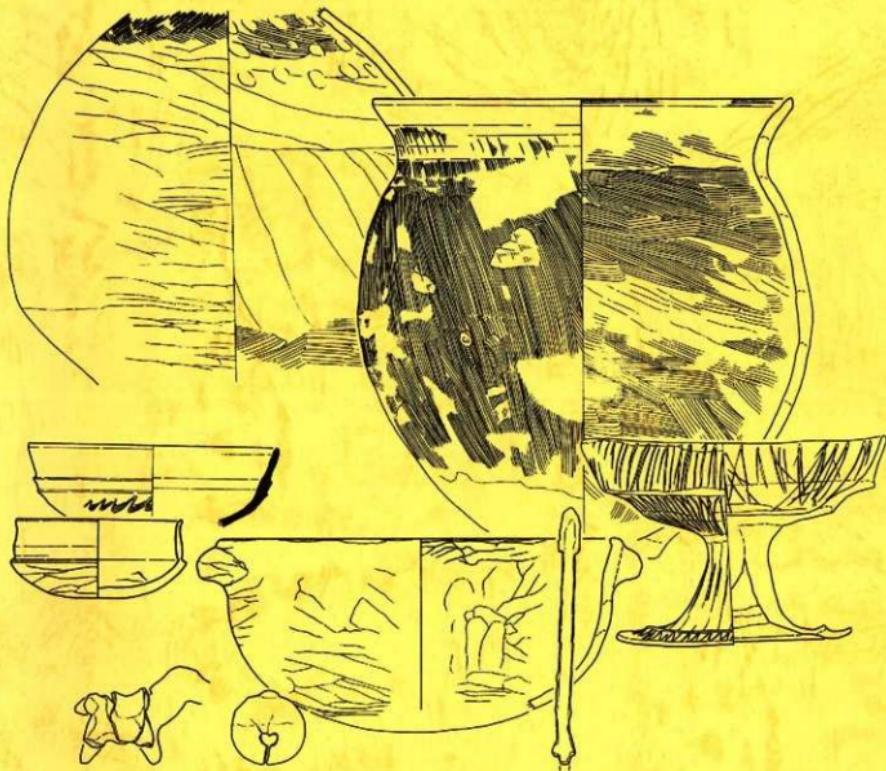


HIRAISHI—SITE

平石遺跡

—都市計画道路「愛宕町下条線」道路改良に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書—



2002

山梨県峡中地域振興局
(財)山梨文化財研究所

HIRAISHI—SITE

平石遺跡

—都市計画道路「愛宕町下条線」道路改良に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書—

2002

山梨県峡中地域振興局
(財)山梨文化財研究所

序

本書は、山梨県甲府市荒川2丁目地内に所在する平石遺跡の発掘調査報告書であります。

この遺跡は、甲府盆地北縁部の荒川が形成した扇状地扇尖部付近に立地しています。盆地西部の荒川流域には居村村上遺跡や弥生時代の著名な金の尾遺跡のほか、「千塚」の地名が示すように6世紀後半から7世紀以降の規模の大きな古墳群が営まれています。湯村地内に所在している巨大な石室をもつ県史跡加牟那塚古墳はその代表的な古墳と目されており、この地域一帯にも甲府盆地東部の古代勢力に匹敵するような首長層が存在していたことが推定されています。また近年では、隣接の敷島町地内から古代、中世のさまざまな遺跡群が数多く調査され、甲斐国内での歴史的位置づけがますます高まっている地域もあります。

当遺跡でも、古墳時代から中世にわたる遺跡の存在が以前から予測されており、今回県道建設に伴って事前の発掘調査が必要となり、平成13年11月から14年1月にかけて実施したところ、さまざまな遺物群を伴う平安時代末の竪穴跡や弥生時代末～古墳時代の溝のほか、中近世の各種遺構群が確認され、多大な成果を得ることができました。これらの調査成果は、今まであまり目を向けられてこなかった盆地北東部地域における古代、中世社会のあり方や歴史性を探るうえで多くの示唆を与えるものと思われます。本調査報告書がそれらの解明の一助になれば誠に幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査の準備段階から本報告書刊行にいたるまで、甲府市教育委員会をはじめ事業主体である山梨県峡中地域振興局建設部の各関係各位、また発掘調査や整理作業に携わった多くの方々から多大なご指導やご協力をいただきました。ここに、深甚なる感謝と御礼を申し上げ序をいたします。

2002年9月

(財)山梨文化財研究所

所長 萩原三雄

例 言

- 1 本書は山梨県甲府市荒川2丁目238・239・240・241・257・3番地ほか所在の平石遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は都市計画道路「愛宕町下条線」の道路改良工事に伴い、山梨県立地域振興局建設部より委託を受けて(財)山梨文化財研究所が実施した。
- 3 本書の原稿執筆・編集は樋原功一(同)山梨文化財研究所考古学第2研究室)が行った。
- 4 発掘調査において基準点測量、空中写真撮影、図化業務を㈱アイシーに委託した。
- 5 本書に関わる出土品、記録類は甲府市教育委員会で保管する予定である。
- 6 発掘調査から報告書作成に至るまで、以下の諸氏、諸機関からご教示、ご配慮を賜った。記して感謝申し上げたい(順不同、敬称略)。
甲府市教育委員会、敷島町教育委員会・小野正敏、信藤祐仁、半塚洋一、志村憲一、大篠正之、望月秀和、保坂和博、岡野秀典、瀬田正明、植崎彰一、藤沢良祐、三枝興業、甲斐丘陵考古学研究会

凡 例

- 1 遺跡全体図におけるX・Y数値は、平面直角座標第8系(原点:北緯36度00分00秒)、東経(138度30分00秒)に基づく座標数値である(旧日本測地系数値)。各遺構平面図中の北を示す方位はすべて座標北である。
- 2 遺構および遺物の縮尺は次のとおりである。

竪穴	1:60
竪	1:40
土坑	1:60
溝	1:80
全体図	任意
土器・土師器・須恵器・陶磁器	1:3
土製品	1:2
鉄製品	1:2
銅鏡	1:1
- 3 遺構図版中の遺物接合線については、実線は接合した2点の接合関係を、破線は接合しないものの同一個体であることを意味する。
- 4 土器実測図中の粗いスクリーントーンはスヌ・コグの付着、器面のドット網掛けは赤形を示す。土器断面の黒塗りは須恵器、粗い網掛けは陶器、ドット

網掛けは磁器、白抜きは土器・土師器を示す。土器・土師器断面図中の破線は接合帯を示す。砥石側面の実線は磨り面を示す。

- 5 土層説明における土色表示は農林水産省水産技術会議事務局監修「新版 標準土色帖」(1991年度版)を使用した。
- 6 遺構図版中の遺物番号は写真図版番号、遺物観察番号と一致している。
- 7 本書図1は国土地理院発行の1/200,000地勢図、図2は1/25,000地形図、図4は甲府市発行の1/2,500都市計画図を使用した。
- 8 本文の註・参考文献については各節(章)ごと文末にまとめた。

本 目 次

第1章	調査の概要	1
第2章	位置と歴史的環境	1
第3章	調査に至る経緯	5
第4章	調査の方法と調査経過	5
第5章	層序と堆積層	7
第6章	検出された遺構と遺物	8
第1節	竪穴建物跡	8
第2節	溝跡	8
第3節	土坑	12
第4節	石列	14
第5節	埋没谷	15
第6節	旧河道	15
第7節	竪状遺構	16
第8節	その他の遺構	16
第9節	遺構外遺物	16
第10節	試掘坑	17
第7章	まとめ	18
第1節	微地形の変化と遺構の変遷	18
第2節	平石遺跡1号溝の弥生後期土器群	18
第3節	平石遺跡1号溝の古墳時代後期土器群	19
第4節	1号竪穴の土鍋	21
第5節	調査の成果と課題	26
抄録		
奥付		

挿図目次

図1	平石遺跡の位置	2
図2	平石遺跡と周辺	3
図3	周辺の地形と遺跡	4
図4	遺跡の位置	5
図5	1号溝北側の土器出土状況	10
図6	高坏(80)の断面図	11
図7	土器の分類	20
図8	把手釜・外耳鉢ほか	24

第17図	1・2号石列と土坑群	53・54
第18図	1号竪穴、1~3・14~17号土坑 遺物	55
第19図	1号溝 遺物	56
第20図	1号溝 遺物	57
第21図	1号溝 遺物	58
第22図	1号溝 遺物	59
第23図	1・2号溝 遺物	60
第24図	2号溝、1・3号石列、2号河道 遺物	61
第25図	3・4号河道、埋没谷、造構外 遺物	62
第26図	造構外、試掘坑 遺物	63

挿写真目次

写真1	高坏(80)の断面写真	11
表1	山梨県内における11~13世紀の竪穴	22
表2	土器・陶磁器観察表	27
表3	鉄・土・石製品観察表	31

写真図版目次

図版1	調査区空撮
図版2	調査区空撮
図版3	調査区空撮
図版4	1号竪穴
図版5	1~8・10~15・18号土坑
図版6	9号土坑、1号溝
図版7	1号溝
図版8	1号溝下層、2号溝
図版9	2号溝
図版10	1~3号石列
図版11	畝状造構、埋没谷、調査風景、諏訪神社本殿周囲の石垣
図版12	1号竪穴、1~3・14~17号土坑、1号溝 遺物
図版13	1号溝 遺物
図版14	1号溝 遺物
図版15	1号溝 遺物
図版16	1号溝 遺物
図版17	1・2号溝 遺物
図版18	2号溝、1・3号石列、2~4号河道 遺物
図版19	4号河道、埋没谷、造構外 遺物
図版20	試掘坑 2~5・7・9・12号トレンチ 遺物

図版目次

第1図	調査区と試掘坑	33・34
第2図	全体図、南壁断面図	35・36
第3図	遺物出土状況	37
第4図	1号竪穴、竪 造構	38
第5図	1~3・11~18号土坑 遺構	39・40
第6図	4~10号土坑 遺構	41
第7図	畝状造構、3・4号溝、 埋没谷 遺物出土状況	42
第8図	1・5号溝、2・3号河道、 9号土坑 遺構	43・44
第9図	1号溝 遺物出土状況	45
第10図	1号溝 遺物接合図(1) 弥生後期	46
第11図	1号溝 遺物接合図(2) 坏類	47
第12図	1号溝 遺物接合図(3) 高坏	48
第13図	1号溝 遺物接合図(4) 高坏	49
第14図	1号溝 遺物接合図(5) 売類	50
第15図	1号溝 遺物接合図(6) 売類ほか	51
第16図	2号溝 遺構、遺物出土状況、 3号石列 遺構	52

第1章 調査の概要

平石遺跡は、甲府市荒川2丁目に所在する古墳時代から平安時代の集落遺跡である。平成13年、都市計画道路愛宕町下条線道路改良に伴い、甲府市教育委員会による試掘調査が行われ、約1,100m²に関して本調査の必要性が指摘された。(財)山梨文化財研究所では、山梨県岐阜中地区振興局からの委託を受け、平成13年11月から平成14年1月に発掘調査を実施した。その結果、堅穴1軒、土坑18基、溝5本、旧河道等が発見された。中でも古墳時代の溝からは、高坏を中心とした土器群や須恵器が出土し、何らかの祭祀関連の溝と考えられた。そのほか中・近世の遺物が出土したほか、近世以降と思われる礎石4個を伴う溝があり、水車小屋関連の遺構かと推測された。

第2章 位置と歴史的環境

平石遺跡は、甲府市荒川2丁目地内に所在する(図1・2・4)。甲府盆地の北縁部にあたり、甲府市の市街地西側、敷島町境に近い場所に位置し、付近一帯には住宅地が広がっている。笛吹川支流のひとつ、荒川が形成した扇状地の扇尖部、荒川右岸に位置し、荒川にごく近接した立地である。荒川の音羽橋南、約200m、荒川土手から直線距離で150mをはかる。南側には諏訪神社が存在する。道路予定地となる前の本調査地区の現況は畑地であるが、以前は桑畠、水田であったという。

『甲府市遺跡地図』(甲府市教委1992)によれば、「68 平石遺跡」は諏訪神社西側、直徑約100mの円形の範囲で広がり、平安時代の遺物散布地として記載されている(図2)。今回の調査区は、緻密には遺跡地図に示された平石遺跡の範囲内からは外れ、字名も「平石」ではなく「北河原」である。しかし甲府市教委の平成13年度試掘調査では、平石遺跡の広がりとして調査が行われ、「平石遺跡」の名称が与えられて本調査が行われる運びとなった。

周辺には穴塚古墳が存在する(図3)。荒川対岸にある「千塚」という地名が示すように、かつては周辺に多数の古墳が分布したといわれる。この一帯の中心的な古墳が、甲府市湯村にある加牟那塚古墳であり、東日本の中でも有数の規模の横穴式石室をもつ円墳である。甲府盆地西部を拠点とした有力豪族の墳墓と考えられ、盆地東部の御坂町姥塚古墳に対比されている。荒川対岸の音羽遺跡では、県職員住宅建設に伴い調査

が行われ、弥生・奈良時代を中心とした集落跡が調査されている(高野ほか1997)。そのほか、遺跡地図や城館跡報告書には登録されていないものの、調査地點東南の集落内には土豪屋敷あるいは居館跡と思われる屋敷地推定地があるといわれ、「荒川氏屋敷(館)跡」と仮称されることがある。現状では地割の痕跡は明瞭ではないが、水田面から一段高い段状の地形がある(図4・第1図-A)。それとは別に調査区の南100mに、竹やぶとなっている十手状の地塊があり、その南側には一辺約80mの方形区画を示す屋敷地が推定できる(図4・第1図-B)。これも本地域における中・近世の居館跡の候補のひとつであろう。

遺跡南側40mには諏訪神社が所在する。本殿の外周に珍しい石垣根付きの石垣を巡らせており、水害除けの特殊な構造かと思われる(図版11-5)。その境内に建つ「諏訪神社沿革」説明板には、神社の棟札および神社周辺の歴史について整理してあり、大変参考になる。それによると「慶長六年檢地帳」に荒川村内に「大明神」(諏訪神社か)がみえ(1601年)、正徳元年(1711)、荒川の大洪水で神社が流失、正徳3年(1713)に本殿、拝殿が再建され、この時に本殿外周の石垣が築かれた。正徳4年には石鳥居が建立され、その後も幾度か修理等が行われたようで、社宝として元禄9年(1696)、正徳3年(1713)、寛保3年(1743)、安永5年(1776)の棟札が保管されている。文化元年(1804)には大水害があり、荒川の堤防が数箇所で決壊したといわれる。その後の明細書下書によれば戸数41戸、181人、馬5頭が記録されている(文化3年・1806)。文化13年(1816)洪水によって荒地となるが、文政7~天保4年(1824~1833)には「獄下年季で荒地195石余の返却」とあり(文化5年「定書」、文化7年「請書」)、荒地の再興が行われた。天保6年(1835)の「当村地名明細帳」には諏訪神社地のほか御崎明神社地(一の出川除け守護神)、神明社地(二之出川除け守護神)、熊野権現社地(三之出川除け守護神)がみられ、当時、荒川堤防の1~3番の各出しに祠が祀られていたことがわかる。明治初期には殖産興業政策によって社地は農地となり、付近一帯では昭和30年ころまでは稻作と養蚕が盛んであった。このように荒川に近接する本地域では、堤防が整備される以前には水害の被害を幾度となく受けており、そのつど神社社殿の再建や畠地復興が繰り返し行われるなど、荒川との結びつきが強い地域といえる。

参考文献

- 甲府市教委 1992 「甲府市遺跡地図」
高野玄明ほか 1997 「音羽遺跡」山梨県教委ほか



図1 平石遺跡の位置

0

(1:200,000)

20km



図2 平石遺跡と周辺 (■は平石遺跡、●は古墳、遺跡名は図3参照)

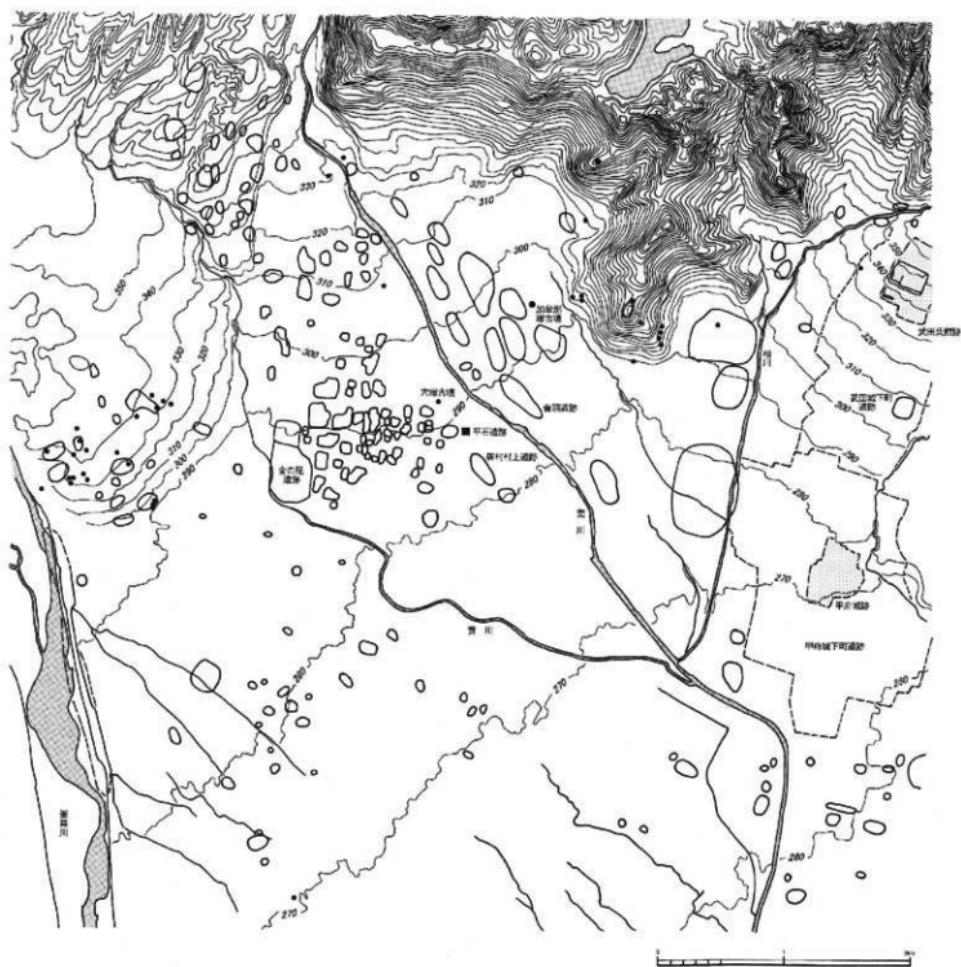


図3 周辺の地形と遺跡 (●は古墳)

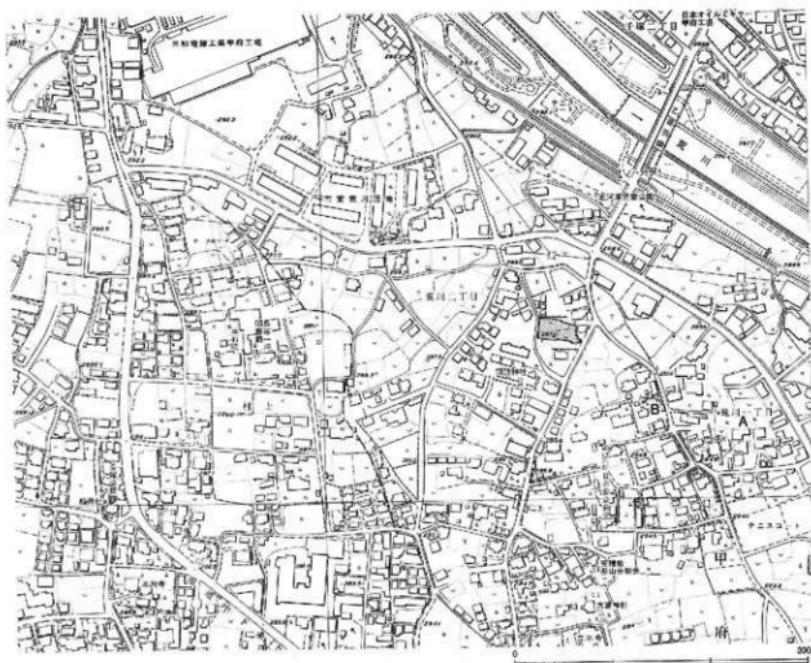


図4 遺跡の位置

第3章 調査に至る経緯

平石遺跡周辺において山梨県狭山中地域振興局建設部による都市計画道路愛宕町下条線の道路改良工事に伴う開発が予定され、平成13年6月に甲府市教育委員会による試掘調査が実施された（第1図）。道路予定区城は $22 \times 220\text{m}$ 、 4.840m^2 で、幅2mの試掘坑5本（1T～5T）が設定され、約 350m^2 の試掘が行われた（第1図参照）。その結果、1Tでは搅乱が著しく、遺構・遺物ともに検出されていない。2～4Tでは古墳～中世の遺物が若干出土し、うち2Tでは列石・集石を作り溝が検出された。5Tからは土器器柄等が出土した古墳時代後期の溝（SD1）、石積みをもつ近世の溝（SD2）が確認された。以上の結果、甲府市教委では5Tの試掘坑の地番、約 1.100m^2 に関して本調査が必要であると判断した。

山梨県狭山中地域振興局では財團法人山梨文化財研究所に調査業務を委託し、本調査が実施されることとなった。

なお、本調査実施中の平成14年1月、本調査区東側の都市計画道路予定地内、荒川1丁目264-1番地ほかで甲府市教委によって試掘調査が実施された（第1図）。トレンチ7本（T-1～7）、約 180m^2 が調査された結果、T-2（本報告第1図では7号トレンチ・7トレンチに変更）・3（8トレンチ）・7（12トレンチ）から中世陶磁器、土師質土器片が出土した。T-2（7トレンチ）ではピット1基が検出されたほか、T-7（12トレンチ）からは蓮弁文の青磁碗片、常滑壺片が若干出土したが、全体的に搅乱や氾濫時に堆積した砂層が広がり、遺構の遺存状況は悪く、本調査は行われていない。

第4章 調査の方法と調査経過

調査区は幅 $20\text{m} \times$ 長さ 50m の道路予定地である（第2図）。調査区全域が調査対象とされ、調査区外への上の搬出が困難であったため、調査区を南北に2分割し、2回に分けて表土を剥いで、調査区を半分ずつ調査することとした。調査に際しては、国家座標に基づ

く基準点の設置、調査区内における5m間隔での杭設置、調査終了後の空中撮影（2回）、全体図作成を㈱アイシーに業務委託した。個々の遺構は平板測量で実測し、空中撮影の図化平面図と合わせた。

調査前半では、市教委調査の試掘坑（5T）を中心に調査区南半分を調査した。試掘で確認された石積みを伴う溝（SD2）は調査区西側の埋没谷内にあり、北側が閉じた溝であった（本報告では2号溝に変更）。周囲の埋没谷覆土の黒色土を掘り下げたところ、平安～中世の遺物が認められた。埋没谷周囲は疊層で、疊層を一部掘り込んで平安末の豊穴が1軒確認された。西側から中央付近には方形の土坑群があり、近世以降の土坑と考えられた。東側には試掘で確認された古墳時代の溝があり（本報告では1号溝に変更）、細分化した高坏等の土器片が多数含まれていた。そのほか、全体的に旧水田面に伴う酸化層が覆っており、南壁断面で観察すると数面の水田遺構の存在が予想されたが、遺物との対比で近世以降が主と考えられたため、水田遺構把握のための調査は行っていない。

調査後半では調査区北半を調査するとともに、西側の2号溝周辺部をさらに掘り下げた。中央付近では土坑群を調査した後、下層の疊層面まで下げ、土坑群よりも古い地殻の石列を確認した（1・2号石列）。また2号溝周辺の疊を除去し、2号溝西側に沿う列石を確認した（3号石列）。東側では1号溝の続きを調査した。溝を切るように近世以降の旧河道（2号河道）が東北側に存在し、覆土の砂層下部を調査していたところ、当初1号溝の底と考えられた疊層下からも遺物が出土することがわかり、1号溝下層に弥生時代後期の旧流路が存在することが判明した。

整理作業は平成14年3月より山梨文化財研究所で実施した。1号溝の接合を重点的に行い、分布図作成に時間を要することとなった。9号土坑のブタについては骨格標本として保管するためにクリーニング、接合を行った。

＜発掘調査参加者＞（順不同・敬称略）

青山利子・飯室久美恵・石川弘美・岡部京子・岡部聰雄・小林明美・五味佐和子・高添美智子・堤吉彦・内藤実・長谷川規愛・平野達也・福井光幸・真浦雅美・舟田貞雄・宮川昌蔵・宮川久・松野久子・森沢篤美・望月幸子

＜整理作業参加者＞（順不同・敬称略）

保坂真澄・小林小路・田中真紀美・佐野靖子・矢戸静江・梶原薰・藤井多恵子・広瀬悦子・原野ゆかり・金

井いく代・倉田勝子・佐田金子

＜調査日誌抄録＞

2001（平成13）年

11月12日（月）

本日より調査開始。周辺の家々に挨拶し、重機による表土剥ぎを開始。長方形の調査区のうち南半分を最初に掘削し、北側に盛り土する。市教委調査分の試掘坑を掘りなおし、試掘調査で検出された溝の位置を再確認する（試掘時報告のSD1を「1号溝」、SD2を「2号溝」とする）。作業員の手配を敷島町教委や区長さんに依頼。器材を搬入する。

11月13日（火）

本日より作業員による掘削開始。調査区の壁を平らにし、鍛鎌がけによる遺構確認作業を進める。2号溝内より礎石状の石を2個確認。

11月14日（水）

試掘坑の全体を確認。2号溝は北側へ直線的に延びることが予想されたため、溝の北側延長線上の表土も除去することとする。1号溝付近で獸骨出土（9号土坑）。

11月15日（木）

重機掘削は終了。1号溝を掘り下げたところ、古墳時代の高坏等の土器片が多く出土した。溝は直線的に北へ延びることが判明。

11月19日（月）

調査区西側で土坑を多数確認し、掘り下げる。業者による基準点測量、グリッド杭設置。

11月21日（水）

土坑群の平面図作成。2号溝の掘り下げ継続。

11月26日（月）

1号溝で遺物の実測、取り上げ、掘り下げを繰り返す。土器集中部の微細図を作成。2号溝の平面図、石積み側面図（立面図）の作成開始。

12月10日（月）

1号溝の続きを南側へ調査区いっぱいまで拡張することとし、掘り下げる。

12月17日（月）

ラジコンヘリによる1回目の空撮。調査区全体を清掃。撮影後、調査区南壁の断面実測。

12月18日（火）

重機による北側の表土削除。土は南側へ反転して盛り土する。石列を確認。

12月19日（水）

重機は終了。北側は表土が薄く、擾乱が多い。

12月20日（木）

グリッド杭打設。礫層部分が多く、杭が打ち込めない箇所が多い。遺構面の精査を行い、土坑等の遺構を掘り下げる。

12月25日（火）

1号溝掘り下げ。1号塹穴立面図作成。

12月26日（水）

年内は本日で終了。年末年始の休暇に備え、遺構面シートをかけ、道路に面した横を補強するなどの安全対策をする。

2002（平成14）年

1月8日（火）

本日より作業再開。1号溝の調査に集中する。

1月15日（火）

砂層（2号河道）の掘り下げ。陶磁器がわずかに出土する。

1月16日（水）

1号溝に接する2号河道内を掘り下げて1号河道下層の堆積状況を見たところ、1号河道下層の砂礫層中に弥生後期の大型破片が存在することがわかり、1号溝下層を掘り下げることとする。なお、本日より調査区東側で市府市教委による試掘調査が開始される。

1月30H（水）

2回目の空撮。調査区全体の清掃を行う。

1月31日（木）

本日で片付け等の作業を残し、調査はほぼ終了となる。2号溝の礫石の取り上げ。記念撮影。

第5章 層序と堆積層

第2図下に調査区南壁断面図を示したように、調査区内には耕作土（1層）下に近年まで使用された水田面があり、2層は水田覆土（アマ土）、3層は酸化土（床土、苦土）となる。3層は調査区全体をほぼ覆っている。それ以下には同様な水出面が1～3層認められ（6・8・12・32・34層）、水田面と考えられる。埋没谷内では平安時代から中世にかけての遺物の出土位置から、ある程度層位の時代推定が可能となっていく。調査区東～北側には明治以降と思われる荒川の氾濫原が調査区にかかり、厚い砂礫層を形成している。

遺跡面は中央から西側にかけて礫層面が露出し、西側では礫を除去して旧河道面を精査した。中央から東側では礫層は土中にもぐり、礫層の上層に1号溝や土坑が形成されていたため、礫層面を露出するには至っていない。礫層中からもわずかに土師器片が出土し、1号溝下層の礫層中から多量に出土した弥生後期の遺物を取り上げたが、他の地点では十分な調査を行って

いない。礫層面自体がある時期の大規模な氾濫時の形成と考えられるので、下層に包含層が存在する可能性はある。

ここでは調査区南壁断面図（第2図下、A-A'、B-B'、C-C'）の土層説明をもって遺跡内層序の説明としたい。

- 1 黒褐色土層（10YR2/3）耕作土（表土）。炭化粒・石灰粒を含む。
- 2 褐灰色砂質土層（10YR4/1）やや灰色の強い表土。細粒。
- 3 赤褐色砂質土層（10YR4/6）酸化層（ニガ土）。
- 4 灰褐色色砂層（10YR6/2）やや粗。しまりなし。
- 5 褐灰色砂質土層（10YR4/1）
- 6 明褐色砂質土層（7.5YR5/6）酸化層。
- 7 褐灰色砂質土層（10YR4/1）細粒。炭化物を含む。
- 8 明褐色砂質土層（7.5YR5/6）酸化層。炭化物を含む。
- 9 暗褐色砂質土層（10YR3/4）やや灰色の強い砂質土。
- 10 褐灰色砂質土層（10YR4/1）やや粗い砂粒を多く含む。
- 11 褐灰色砂質土層（7.5YR4/4）酸化層。
- 12 褐色砂質土層（10YR3/2）上部質土器片を含む。
- 13 暗褐色砂質土層（10YR3/2）上部質土器片を含む。
- 14 鮎い黄褐色砂質土層（10YR5/4）砂粒はやや粗い。酸化粒を少含む。
- 15 鮎い黄褐色砂質土層（10YR5/4）砂粒はやや粗い。酸化粒を少含む。
- 16 暗褐色砂層（10YR4/4）酸化粒をわずかに含む。土師器片を含む。
- 17 暗褐色砂層（10YR3/3）黒色の強い砂層。土師器片を少量含む。
- 18 短灰褐色砂層（25Y5/2）やや粗い砂層。
- 19 灰褐色色砂質土層（10YR5/2）灰褐色ブロックをやや多く含む。
- 20 褐灰色砂利層（10YR5/1）粗い砂。小砾（径1cm大）主体。
- 21 褐灰色砂層（10YR4/1）小砾をやや多く含む。
- 22 灰色砂層（10Y5/1）やや青味がある。
- 23 褐灰色砂層（10YR5/1）20層に似るが、小砾はほとんど含まない。
- 24 灰色砂層（10Y5/1）22層とはほぼ同じ。
- 25 暗褐色砂質土層（10YR3/4）上面が黒色の鉛で覆われる。
- 26 褐色砂質土層（10YR4/4）酸化層。
- 27 褐色砂質土層（10YR4/6）28a層への漸移層。
- 28 灰色砂層（5Y5/1）微細～細粒。粘性あり。
- 29 灰オリーブ褐色砂層（25YR3/3）やや酸化粒を含む。
- 30 灰色砂層（5Y5/1）微細粒。粘性強い。
- 31a 黑褐色土層（10YR3/1）1層とはほぼ同質。石炭粒・炭化物を含む。
- 31b 海色土層（10YR4/4）3層と3la層の混合土。3層のブロックを含む。
- 32 鮎い赤褐色砂質土層（5YR4/4）酸化層。
- 33 灰褐色色砂質土層（10YR5/2）
- 34 鮎い赤褐色砂質土層（5YR4/4）酸化層。
- 35 灰褐色色砂質土層（10YR5/2）

- 36a 黒色土層 (10YR2/1) 1号溝覆土。土師器片多い。礫化鉱少
量含む。しまり・粘性ややあり。
- 36b 黒褐色土層 (10YR2/2) 36a層とほぼ同質だが、やや黒色度
が弱い。
- 37 黒褐色砂質土層 (10YR3-2) 黒色度は36層より弱い。
- 38 灰褐色砂質土層 (10YR3/3) 黒色度はさきに弱い。
- 39 灰褐色砂質土・砂混合土層 (10YR4/6) 2号溝覆土。(以下同
じ)。やや大きな塊をやや多く含む。
- 40 鮎い黄褐色砂質土層 (10YR4/3) 41層に似るが、41層よりも
礫化鉱は少ない。
- 41 鮎い黄褐色砂質土層 (10YR4/3) 3層に似る。礫化鉱をやや
多く含む。
- 42 灰色砂・暗褐色粘質土 (10YR4/1) 互層 上層は砂、下層は
粘質土。
- 43 灰~褐灰砂層 上層は粗、下層は細砂。
- 44 灰~褐灰砂層 上層は粗、下層は細砂。
- 45 灰~褐灰砂層 上層は粗、下層は細砂。
- 46 灰~褐灰砂層 上層は粗、下層は細砂。
- 47 灰~褐灰砂層 上層は粗、下層は細砂。
- 48 灰褐色粘質砂質土層 (10YR3/4)
- 49 黄褐色砂礫層 (25Y5/3) 振乱状。
- 50 白灰色砂礫層 (25Y7/1) 振乱状。

第6章 検出された遺構と遺物

第1節 壇穴建物跡

1号壇穴 (第4・18図、図版4・12)

(位置) C2・3グリッド。調査区西側、礫層面の縁辺部
が埋没谷にかけて落ち込むところにあり、礫層面を掘
り込むように壇穴を構築している。

(重複) 3号土坑に切られる。2号溝、3号石列にも
切られると考えられる。

(覆土・検出状況) 2号溝北側にサブトレーンチを東西
に入れ、礫層面を断ち割るようにして断面観察したと
ころ、竈の袖石と思われる立石を伴う石組みが検出され、炭化鉱を多く含んだ層が確認された。竈から北側
は上層より積重に掘り下げ、プランをおおよそつかむ
ことができたが、南側(南東壁付近)はサブトレーンチ
で床面をカットしてしまったため、壁や竈穴の規模を
正確に把握することができなかった。断面(第4図
G-G'ライン)からわかるように、床面は竈から2m
程度先で礫層を含む河川堆積層の影響を受け、大き
く欠失している。

(形状・規模) 南北4mの隅丸方形と考えられるが、
礫層によって西南側を削られ、床面は三角形状に約半
分のみ遺存する。竈はコーナー竈で、竈穴の南東コー
ナー部に石組竈をもつ。

(遺物出土状況) 竈前面を中心に同一個体の上鍋片
(1)が数点出土した程度で、遺物量は少ない。ほか
にノミ状の鉄製品がある(2)。

(床) 炭化鉱を多く含んだ層(5層)が残存した床面
に広く認められ、その直下が床面と考えられるが、硬
化面はなかった。

(竈) 矶層面に構築されたコーナー竈で、河原石を芯
とした石組み竈である。袖石のみ遺存し、天井石は失
われている。向かって右袖は遺存状況が良く、礫を4
個一列に立てて並べている。左袖は2個程度の礫が残
るのみである。両袖石の裏側には裏込め的に礫が置か
れている。袖石の高さは35cm、袖石間は30cmである。

(壁) 矶層面に掘り込んだ南東壁一辺が残るのみで、
長さ38mを確認した。壁溝はない。竈寄りの壁面には
礫を一部積み上げたように並んでいる(第4図A-A'
ライン)。壁面の保護のために、竈袖石から延長して
礫を積んだものと思われる。礫は20~35cm程度の小型
で、積み方は雑然としている。

(遺物) 1は把手付き上鍋。把手は口縁部外側に長さ
10cm、幅3cm程度の横長の把手が付着するもので、相
対して2箇所につくものと思われる。径25.8cm、高さ
推定12.4cmで、底はないが丸底と思われる。このよう
な把手をもつ土器としては、把手付き丸底深鍋、あるいは把手斧とも呼びうる土器群が一宮町笠木地蔵遺跡
などでコーナー竈をもつ竈穴に伴い出土しているが、
本例のような浅い上鍋タイプは県内では類例がない。
本資料は竈を伴う竈穴からの出土のため、竈にかけて
使用されたものと考えられるが、器高が低く、13世紀
後半に散見される外耳鍋に類似していることから、開
炉裏への移行直前段階の鍋とも思われる。なお、遺構
外(第25図)とした189・191・192は本竈穴周辺出土遺
物である。出土地点が竈穴の推定プラン内に収まるも
のの、礫層によって欠失した部分からの出土であり、
床面よりも下位から出土しているため、1号竈穴の遺
物から除外した。3点とも竈穴より後出する13世紀後
半と考えられ、竈穴とは無関係の遺物である。ただ
189の外耳土器は1の上鍋と系譜的に関連性が予想さ
れる。コーナー竈の竈穴は12世紀後半までには存在する
が、13世紀以降は未確認であり、本竈穴の時期を小歴
する。

2はノミ状の鉄製品。

(時期) 平安時代末(12世紀代)。

第2節 溝跡

1号溝(第8~15・19~23図、図版6~8・12~ 17)

(位置) 調査区東側、A8~D7グリッドに位置する。南
端は調査区外に及び、北端は2号河道の砂層によって
切られ、溝全体の把握には至っていない。

(遺構) 幅約4m、長さ18mで、南北方向に直線的に伸びた溝であるが、C7グリッドで綴やかに「く」の字状に屈曲している。底面はほぼ水平であるが、現状の荒川との位置関係、荒川扇状地の形成方向から溝は南流するものと考えられる。断面形は逆台形、あるいは緩い「U」字形となっている。立ち上がりの壁面は全体的に非常に緩く、溝とその周囲の境がわかりにくくなっている。調査時では2重の掘り方として捉え、溝本体の範囲と、その外側に溝の範囲である可能性ある部分（非常に緩やかな傾斜面）を想定した。ただ両者は別々ではなく、一体的なものであることはいうまでもない。

(覆土・遺物出土状況) 第2図南岸断面図中および第8図に示したように、疊層面上に黒色土の溝覆土が堆積し、高坏・坏を中心とした古墳後期の土器片が全体的に出土した（第9～15図）。また3箇所程度の遺物集中箇所があり、壺片などがまとまって出土している。96の壺が出土した地点については、微細化した破片がとくに集中していたため、「土器集中部」として図化した（第8図）。人為的な破碎行為が予想されるものである（図版6-6）。下層の疊層中には、北側で弥生後期の土器が多く含まれ、弥生末頃に形成された自然河道であることがわかった。上層にあたる古墳時代の溝については、現段階では旧流路上層に構築された人工的な流路と考えておくが、自然流路の可能性もある。番号をつけて取り上げた遺物を全て示したのが第3・9図であり、そのうち図化資料のみを南北方向の縦断面図にドットで示している。第10～15図は図化資料の出土位置および接合関係を示したものである。

(遺物) 21～104は1号溝出土遺物である。弥生時代後期の遺物（21～47、100・101、一部不明なものを含む）、古墳時代後期の遺物（48～99）、平安時代の遺物（102）、中世の遺物（103）がある。

21～34は弥生後期の壺形土器。21は肩部にLRの縦行繩文を施し、胴下半に屈曲部をもつ。22・23も胴下半に屈曲をもち、同時期と考えられるが、調整技法や器形が多少異なる。24・25はII縫部で、折り返しI縫に連続キザミ・連続押圧痕をもつ。26は時期が定かではないが一応弥生後期の仲間としておく。27は外側赤彩された壺。28は21に類似した壺で、頸部に擬似繩文と2個1組の円形貼付文をもつ。擬似繩文の施文具は不明であるが、貝殻ではなく割り板状のものかと思われる。29は繩文施文した上に縫長の隆線を貼付した口縫部片である。30は肩部片で、結節繩文が横位施文されている。31はLR繩文を横位施文した肩部片。32も同様の破片であるが、繩文は擬似繩文で、28とは同種

の施文具である。33は羽状の結節繩文をもつ土器。やや厚手で、壺形土器ではない可能性がある。34は底部片で、端に寄ったところに木葉痕の主脈が通っており、注意される。

35～41・43は壺形土器。35は折り返し口縫に連続キザミが施文される。36・37は単純口縫に連続キザミをもつ。41は頸部に描き波状文をもつ壺で、口縫部には連続キザミをもつ中部高地系の土器である。

42は高坏もしくは壺口縫部で、外側には赤色塗彩が施されている。45・46は高坏脚？で、両者とも外側ヘラナデ（ミガキ）が施され、45には外側に赤彩塗彩が施されている。

44・47は台付壺。47は台部と壺底部の接合部に連続指頭押圧痕をもつのが特徴的で、駿河方面の土器（登昌式土器）と考えられる。

48～61は壺、瓶。48～53は丸底の壺。54は平底の壺。55は瓶。56～63は屈曲部をもち、口縫部が立ち上がる壺で、須恵器の模倣壺といわれる。

丸底壺にはII縫部が立ち上がるもの（48～50・52）、緩やかに広がるもの（51）、内面に後をもって屈曲するもの（53）があり、さらに内面に放射状のミガキをもつもの（49・52・53）、かすかなハケメを残すもの（48）がある。54には口縫部に粘土紐積み上げ痕を残す。屈曲部をもつ模倣壺には比較的忠実に模倣したと思われるもの（56）とそうでないものがある。また屈曲部より上の口縫部（立ち上がり部）と屈曲部より下の体部（底部）の高さ（長さ）の比較では、ほぼ同じものに56・58・59、口縫部が長いものに57・61・63、体部が長いものに60・62がある。59は内面黒色壺で、内外面に赤色塗彩を施している。

64～84は高坏。壺部に着目すると、壺部が箱状（逆台形状）のもの（68・69・72・73）、屈曲部をもつ模倣壺状のもの（65～67・71・74・75）、箱状と模倣壺の中間的なものの（70）、屈曲部をもたないものの（64）に大別できる。脚部には注目すると、ハの字状に単純に広がるもの（66・68・69・70・72・81・82）、柱状で端部が強く開くもの（64・65・71・76～78・83）、後をもつものの（67）がある。壺部と脚部の組み合わせについては、箱状の壺部にハの字状脚部、模倣壺に柱状脚部が伴う傾向はあるが、はっきりしない。なお、壺部と脚部の接合部には接合技法の大きな特徴が見られる。ほとんどの脚部に認められるもので、脚部上側を円柱状（筒状）に仕上げた後、壺部の底部中央からロート状に粗く垂らした粘土紐を筒の中に通し、脚部内側に押し付けている（図6、写真1）。押し付け方は指頭で片側の内面に押圧するもので、ロート状の粘土紐の

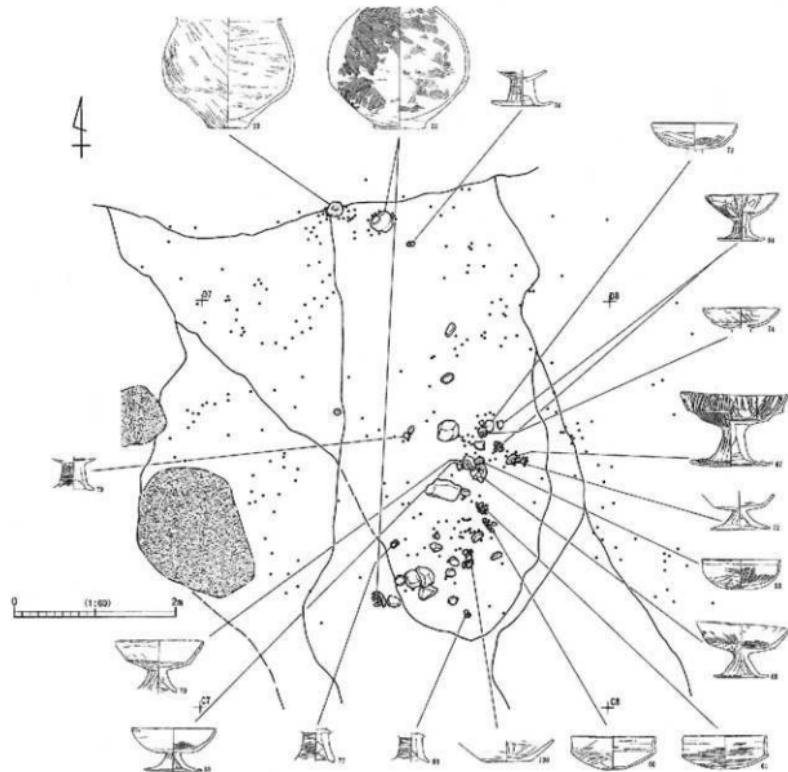


図5 1号溝北側の土器出土状況

末端は端部を斜めに切ったような形態で脚部内側、中央に顔をのぞかせている(図版14~16)。ロート状の粘土紐が剥離してしまった事例に65、78があり、坏部内面と脚部が貫通してつながっている。内外面の調整痕としては、かすかなハケメ痕(68・69・73)、ミガキ状の暗文(64・65・67・76~82)、ナデ・ヘラ削り痕などがある。ハケメ痕をもつ事例には箱状タイプが多い。暗文をもつタイプには模倣坏タイプで柱状脚部をもつ例が多いように思われる。暗文には坏部内外面の放射状暗文(64・65)、花弁状暗文(67)、横方向の暗文(76・79)がある。また脚部の暗文には筋状(67)、横方向(76・77・79・80)、放射状(78・81・82)がある。坏部外面の暗文が横方向であれば脚部は横方向、坏部が放射状であれば脚部は放射状と、暗文の施文方法を合わせている。器形との関連性では、脚部が柱状

のものに横方向の暗文が多く、ハの字形の脚部に放射状暗文が多い傾向がある。

85は筒形口縁部をもつ長頸壺で、86・87が同一個体の可能性がある。88は須恵器高坏で、TK208~47型式と思われる。91は短頸壺。上下で接点はないが、図のように推定した。89・90は小型土器、手づくね上器。90の口縁部内外には赤色塗彩が認められる。92~99は壺類で、体部は丸く、口縁部は単純に聞くものが多い。調整痕にはハケメ(94・96~99)、ナデ(92・93・95)がある。

102は灰釉陶器、103は常滑?壺で、ともに混入と思われる。102の外面は、2本の平行沈線間に縱の沈線を施し、釉は内外面にハケ塗りされたように施釉されている。器種は不明であるが、図が上下逆とすると正面鏡の脚部の可能性がある。ただ、脚とすると内面



図6 高坏(80)の断面図

の施釉は不自然である。104は角棒状の不明鉄製品。
(時期) 下層の弥生後期と古墳時代後期初頭の2時期の遺物からなる。後者は、高坏の一部にやや古手の中期内的な様相を残しているが、坏類の様相など全体的にみると後期初頭（5世紀後半～6世紀初頭）の一群といえる。

2号溝（第16・23・24図、図版9・10・17・18）

（位置）調査区西側の1号河道と埋没谷に挟まれたBC2・3グリッド内に、南北に存在する。

（遺構）幅1.3m、長さ5.5mの石積み（石垣）をもつ溝で、北端はコの字形に閉じ、南端は調査区境にもぐり、溝の全体は明らかにできなかった。底面はほぼ平らであるが、覆土中には砂が上層から底面まで堆積し、南流する水の流れがあったことは明らかである（土層については第5章参照）。また溝の掘り方は、第3図下の南壁断面図に示されているように、地表下2枚目の水田面を切って、逆台形状に削除されている。覆土上層から石積み周辺には小礫が数多く堆積し、とくに石積み上には礫を無雜作に集めたような状況であった。東側と西側の石積みは1～2段遺存し、30～40cmの礫を用いて「落しと積み」風に積み上げている。本来2段から3段はあったと考えられるが、何らかの理由でほとんどが欠落している。この石積みの仕方は、近くにある源訪神社の本殿を取り壇した石垣（正徳3年～1713・構築か）とほとんど同一であった（図版11-5）。北側の石積みは横長の礫を列状に並べたような形態で、石の奥行きがなく、東西両側とは違っている。

石積みで囲われた内部からは、4個の礎石状の礫が平らに据えられて検出された。長軸35cm～50cmの表面が平らな梢円形の自然礫を、長軸方向が溝方向を向くように置かれている。礎石は20～40cm間隔で設置され、礎石中央での距離は東西60cm、南北80cm程度である。



写真1 高坏(80)の断面写真

る。礎石の機能は不明で、橋脚の礎石とも考えられる。しかし約2m北側で溝が閉じているうえ、幅1.3m程度の溝であれば礎石を置く必要はないため、橋ではなかろう。想像をたくましくすれば水車施設に関わる礎石と思われる。つまり溝が礎石の北側で閉じていることから、橋状のもので引水して水を落としていることが予想され、水車を立てる柱受けとして溝内に礎石を据えたのではないだろうかと想像される。この点に関し、伝承や記録は一切ない。ただし現地表面を表した第1図によれば、本調査区内の西側に、ちょうど北側から2号溝につながるように溝が存在する。調査前の状況では、はっきりした溝ではなく、既に水回りは移動され、溝自体は廃棄されて地境的に残っていたにすぎなかつたが、石積みを作った溝が存在したことは確かである。その溝が2号溝の始まる地盤付近で途切れていることから、かつては溝から2号溝に水を導水していたことが予想される。したがって2号溝の北側で、意図的に落差をもたせて溝が構築されていたことになる。水車の可能性が高く、水車小屋が付随した粉挽き用の水車ではなかったかと想像されるが、いずれにせよ何らかの利水施設の基礎と思われ、現存する資料（水車施設）との比較などにより、今後検討する必要がある。

（覆土・遺物出土状況）覆土中からは近世の陶器片と多数の鉄釘が出土した。第16図の上段に石積み確認状況と遺物出土状況を示し、覆土中の遺物出土状況を南壁断面に投影して示している。それによれば、鉄釘類はほぼ全体的に多数出土し（礎石北側は空白となっているが、試掘時に掘られてしまつたため本調査では出土遺物がない）、レベルとしては溝底面から覆土上層にかけて分布している。陶器類は41層とした覆土上層を中心としている。

（遺物）105・106は磁器、107は土師質土器、108は砥石、109～162は鉄製品である。そのほか、182の

青磁碗（近世）は埋没谷の遺物として図示されているが、2号溝の掘り方に位置する遺物である。

105は肥前の箱形湯呑みで、19世紀代。106は瀬戸の箱型湯呑みで19世紀前半。107は暖房具と考えられる土師質土器で、円形の窓を側面に1箇所もち、上部は丸く閉じた形と考えられる。内面には窓から上方にかけてスズによると考えられる黒変が認められる。また内面には指頭圧痕が顕著なほか、底面寄りの部分には連続爪形圧痕が存在する。なお図示した窓の径および上部形態は推定である。

109はL字状の金具。110～162は鉄釘等の鉄製品。鉄釘は計52点で、大きく2つに分けると大型品（110～113・115～118）、小型品（119～161）がある。さらにそれぞれ大小に分けられそうであるが、欠損例も多く、叢密には分類ができない。小型品の中でも2～4cm程度の小型品が正倒的多いようである。釘はいずれも角釘と考えられ、溝に伴う何らかの上部構造に用いられたものであろう。水車小屋に使われた釘であろうか。釘以外の鉄製品に114・162の板状鉄製品がある。

（時期）石積みの状況から江戸以降と思われ、溝の埋没段階に伴う磁器の年代が19世紀前半である。それ以前に構築された溝といえる。諏訪神社の記録によれば、正徳元年（1711）水害で流失し、同3年（1713）本殿、拝殿とともに本殿周囲の石垣を構築している。その後文化元年（1804）の大水害、同13年（1816）の洪水を受けている。2号溝石積みと神社石垣との類似から、想像を重ねることが許されるならば、溝の構築は18世紀前半、埋没は陶磁器の時期、水害記録から19世紀前半と考えられる。また南壁断面図の1枚目の水田床土（3層）は19世紀前半以降、2枚目の水田床土（6層）は溝の掘り方に切られていることから、18世紀前半以前と考えられる。

3号溝（第7回）

（位置）前半の調査時に調査区中央付近で南北に検出された溝。A5～C5グリッドに位置する。

（造構）長さ9m、幅40cmで浅く、断面U字状である。後半の調査では搅乱の影響で検出できなかった。

（遺物）なし。

（時期）不明。

4号溝（第7回）

（位置）調査区西端の中央付近に位置する、東西にのびる溝。D1・2グリッドに位置する。

（造構）長さ5m、幅20cmで浅い。2号溝の西側延長線上にあり、1・2号石列とそれらに囲まれた区画

（地境）が生きていた段階での形成と想像される。東端は1・2号石列の交点付近から出現し、西端は4号

河道のためわからなくなっている。

（遺物）なし。

（時期）1・2号石列と同時期と思われるが、不明。中・近世以降か。

5号溝（第8回、図版8-3）

（位置）調査区東端、CD7・8グリッド内にあり、1号溝脇に位置する。

（造構）D8坑を中心としたL字状の溝内に礫が充満し、さらに南側に礫を伴わない溝が接続し、直線的に続く。長さ約9m、幅は40～80cm。溝内の礫は径20cm程度で、意図的に充填したのか、氾濫時に自然の状態で堆積したものかはつきりしなかったが、ここでは人為的集石の可能性がある、と指摘するにとどめる。

（遺物）なし。

（時期）不明。

第3節 土坑

調査区中央付近から西側では、表土直下から掘り込みをもつ長方形を主としたトレンチ状の深い溝が、上坑群を形成する（9・10号土坑を除く）。L字形を呈する1・2号石列に沿うようにL字に配置し、石列に直交するように上坑の主軸方向を向けている。すなわち調査区中央付近（D4グリッド周辺）では、土坑群は南北方向に、また右列が南北に伸びる調査区西側（D3・E3グリッド付近）では、土坑群は主に東西方向に主軸をそろえて配置する傾向がある。北側にも調査区境に沿って南北方向に同様な土坑が3基並ぶほか（15～17号土坑）、東側にも18号土坑隣りに土坑状の落ち込みがあり（全体図参照）、E4グリッド内の方形を呈した搅乱部分を中心にして、四辺に土坑群が取り囲むように配置している。

土坑と石列には重複関係があり、石列を切るように土坑が存在する部分がある。各土坑の構築時期は定かではないうえ、土坑群が同時期に構築されたとも考えにくいものの、土坑形成に先行して石列を伴う平坦面の形成が行われたと考えられる。

各土坑の幅は1～1.5m、長さは2～4.5mである。表土直下から掘り込みがあることから、調査時には新しい造構とみなし、詳しい土層観察を行っていないが、ほとんどの土坑覆土には砂層が堆積する。出土遺物としては、近世以降の陶磁器類小破片や鉄製品が混在的に出土する程度で、遺物はほとんど含まない。平面形や群集する状況は中近世の墓坑に類似しているが、本遺跡では墓坑関連遺物や人骨等は皆無であることから、墓域とは考えにくい。畑の耕作に伴う掘り込みであろうか。

1号土坑（第5・18図、図版5・12）

（位置）C・D 4グリッド。調査区ほぼ中央、長方形土坑群中、13号土坑西隣りにあり、東西に伸びる1分石列に接する。

（検出状況・覆土）前半の調査で土坑南半を調査し、後半の調査で完掘した。

（形態）長軸3.0m、幅1.3m、深さ26.4～35.7cmの長方形で、主軸方向はN 8° -W。断面形態は浅い箱状。

（出土遺物）土坑内中央および北寄りに土器・磁器小片が4点出土している。3は不明鉄製品。

2号土坑（第5・18図、図版5・12）

（位置）C 3・D 3グリッド。

（検出状況・覆土）南側を前半に調査し、北側を後半に調査。

（形態）長軸6.4m、幅1.06～1.33mの長い溝状の長方形土坑。南側の土坑底面が北側に比べ全体に5～8cm程度深く、中央付近にわずかな段差があることから、2基の上坑が接続した状況を示す。ここでは仮に北側を2a号土坑、南側を2b号土坑とする。2a号土坑は長さ3.3m、幅1.12～1.33m、深さ9.6～11.6cm。2 b号土坑は長さ3.2m、幅1.06～1.1m、深さ12.8～16.4cm。断面形態は浅い箱状。主軸方向は2a・2bともにはば同一で、N 5° -E。

（出土遺物）2a号土坑中央から鉄製品（4）、2b号土坑北寄りから磁器片南寄りから鉄製品（5）が出土している。4は板状の鉄製品で、箱状のものが押し潰されたようになっている。5は楕円形の輪に釘をつけたようなもので、木に打ち込んで引くための金具のようなものか。

3号土坑（第5・18図、図版5・12）

（位置）C 3・D 3グリッド。土坑集中部西端、2号土坑西隣りに位置する。

（検出状況・覆土）覆土は灰色砂礫層。

（形態）わずかに東西に長い不整円一隅丸方形。長軸長2.3m、幅2.1m、深さ21.3～23.4cm。主軸方向は不明確ではあるが、あえて示すならばE 8° -W。

（出土遺物）6は混入品と思われる須恵器壺。7は鉄製品の角釘。

4号土坑（第6図、図版5）

（位置）D 2・3グリッド。5号土坑の隣りで、5号土坑、6 b号土坑と等間隔に並ぶ。

（検出状況・覆土）覆土は灰色砂礫層。

（形態）長軸長2.9m、幅1.2m、深さ26cmの楕円形土坑であるが、いくつかの掘り方がひとつの土坑としてまとまっている。断面は箱状。主軸方向はE 15° -N。

（出土遺物）なし。

5号土坑（第6図、図版5）

（位置）D 2・3グリッド。4号土坑、6 b号土坑間に存在する。

（検出状況・覆土）覆土は灰色砂礫層。

（形態）長軸長3.8m、幅1.35m、深さ16cmで、4号土坑同様に3つの掘り方がつながっている。断面は箱状。主軸方向はE 9° -N。

（出土遺物）なし。

6号土坑（第6図、図版5）

（位置）DE 2・3グリッド。5号土坑の北隣りに位置する。

（検出状況・覆土）覆土は灰色砂礫層。

（形態）南北方向の6a号土坑と東西南方向の6 b号土坑がL字状に連結したもので、本来それぞれ別々の土坑と思われる。6 a号土坑は長軸長2.4m、幅1.2m、深さ18cmの長方形で、断面は箱状。主軸方向はN 5° -W。6 b号土坑は長軸長4.7m、幅1.1m、深さ18～30cmの長方形（溝状）で、断面は箱状。主軸方向はE 12° -N。

（出土遺物）なし。

7号土坑（第6図、図版5）

（位置）E 2グリッド。8号土坑と重複する。

（検出状況・覆土）覆土は灰色砂礫層。底面には1号石列が露出している。

（形態）長軸長3.15m、幅1.65m、深さ40cmで、2つの方形土坑が連結した形態で、西半分の土坑は断面袋状になる。主軸方向はE 20° -N。

（出土遺物）なし。

8号土坑（第6図、図版5）

（位置）E 2グリッド。7号土坑と重複する。

（検出状況・覆土）覆土は灰色砂礫層。

（形態）長軸長2.1m、幅1.7m、深さ38cmの方形。主軸方向はN 6° -W。

（出土遺物）なし。

9号土坑（第6図、図版6）

（位置）B 7・8グリッド。調査区東端、1号溝脇に存在する。

（検出状況・覆土）1号溝調査中に石灰に混じって獸骨が出土し、その全体像を掘り進めるなかで家畜獸の埋葬土坑であることが推定され、土坑としての掘り方を再確認した。

（形態）獸骨は頭部を東側、脚を南側にして横たえている。頭部、前の脚部周辺には石灰が多量に付着し、叩堀後に石灰が土坑内に撒かれたか、石灰が同時に廃棄、混入した状況を示す。土坑の掘り方は、西側の壁が溝の調査で掘り進められていたため、あいまいとなってしまったが、長軸長1.28m、幅68～95cm、深さ25cmの隅丸長方形を呈す。主軸方向は明確ではないが、

E6°-N。

(出土遺物) ない。獸骨はブタである(加藤・山内1995)。時期は不明であるが、付近が水田から畠地になってからと思われ、戦後頃かと考えられる。

10号土坑(第6図、図版5)

(位置) 調査区中央、南壁寄りに単独で存在する。B5グリッド。

(検出状況・覆土) 碓層面に構築。覆土は砂質土。

(形態) 径1.2m程度の円形土坑で、深さ18cm。断面桶状で、底面には縛が露出する。

(出土遺物) なし。

11号土坑(第5図、図版5)

(位置) D3・4グリッド。土坑集中部にあり、2・12号土坑間に位置する。

(検出状況・覆土) 碓層面に構築。覆土は砂質土。

(形態) 長軸長2.3m、幅1.02~1.16m、深さ7.1~19.6cmの長方形土坑。主軸方向はN0°-W。

(出土遺物) 磁器片1点出土。

12号土坑(第5図、図版5)

(位置) D4グリッド。土坑集中部、11・13号土坑間、1号土坑北隣りに位置する。

(検出状況・覆土) 碓層面に構築。覆土は砂質土。

(形態) 長軸長2.36m、幅1.16~1.45m、深さ9.5~11.8cmの長方形土坑。主軸方向はN4°-W。

(出土遺物) 土器片1点のみ。

13号土坑(第5図、図版5)

(位置) C4・D4グリッド。調査区中央の土坑集中区にあり、1・14号土坑間に位置する。

(検出状況・覆土) 碓層面に構築。覆土は砂質土。

(形態) 長軸長4.4m、幅1.18~1.22m、深さ12.1~15.8cmの長方形土坑。主軸方向はN3°-W。

(出土遺物) 土器・磁器片が土坑内から散在的に4点出土。

14号土坑(第5・18図、図版5・12)

(位置) D5グリッド。土坑集中部、13・18号土坑間に位置する。

(検出状況・覆土) 碓層面に構築。覆土は砂質土。

(形態) 長軸長2.65m、幅1.12~1.43mの長方形で、深さは13.7cm。南側にピット状の不整形の掘り込みがあり、深さ30.8cmと深くなっている。主軸方向はN5°-W。

(出土遺物) 鉄製品が散在的に6点出土(図示したのは5点)。11を除き鉄製釘で、9・12は丸釘か。11は不明鉄製品。

15号土坑(第5・18図、図版5・12)

(位置) E3グリッド。

(検出状況・覆土) 覆土は灰色砂疊層。底面は疊層面

となっているが、覆土と地山がほとんど同質のため、掘りすぎていると思われる。

(形態) 長軸長1.5m以上、幅0.93mの隅丸長方形土坑と思われるが、円形ピットが2基重複し、北側が調査区外にかかっているため、全形は不明。主軸方向はN-2°-W。

(出土遺物) 古墳時代の土師器壺(13)底部が出土しているが、混入、あるいは下層の砂層出土品と思われる。

16号土坑(第5・18図、図版12)

(位置) E4グリッド。17号土坑の隣り。土坑の大半が調査区にかかり、一部がわずかに見えている。

(検出状況・覆土) 調査区壁面を精査中に壁面で確認された。覆土は灰色砂疊層で、底面付近は地山付近と同質の砂層・砂質土層のため、一部掘りすぎているかもしれない。

(形態) 幅1.1mの土坑の一部であるが、おそらく南北に長軸方向をもつ長方形土坑であろう。

(出土遺物) 鉄製品が2点出土。14・15はいずれも鉄製角釘か。

17号土坑(第5・18図、図版12)

(位置) E4グリッド。土坑は南北に長い長方形土坑と思われるが、北側は調査区境にかかり、また南側には大きな擾乱が存在するため、全形は確認できていない。16号土坑の東隣りに位置する。

(検出状況・覆土) 調査区壁面を精査中に確認された。覆土は灰色砂疊層である。

(形態) 幅1.4~1.58m、長さ19m以上、深さ32~34cm。主軸方向はN-1°-E。

(出土遺物) 鉄製品が5点出土している。16は角棒状鉄製品。17~20は鉄製角釘か。

18号土坑(第5図、図版5)

(位置) D5グリッド。調査区中央付近の土坑集中部東端にあり、14号土坑の東隣りに位置する。

(検出状況・覆土) 碓層面に構築。覆土は砂質土。

(形態) 長軸長2.7m、幅1.4~1.52m、深さ7.7~8.5cmの長楕円形、もしくは隅丸長方形。主軸方向はN-10°-W。

(出土遺物) 陶磁器片2点出土。

参考文献

加藤嘉太郎・山内昭二 1995『家畜比教解剖図説 上巻』養賢堂

第4節 石列

1号石列(第17・24図、図版10・18)

(位置) 調査区西側、旧河道(1号河道)に沿って存在する。低くほんだ1号河道と、その東側の一帯高

い面との境に、4～8号土坑と重複するように位置し、旧河道面の疊層と重なるように南北約10mにわたり石列を設けたもので、その東側に整地面を形成している。全体では2号石列と一体のもので、方形あるいは長方形の区画をなしている。石積みというほど整然としたものではなく、列を意識して並べている程度で、部分的に2段程度に積み重なった箇所や、人工的に並べられたことを示すように立石状になったところがある(第17図石列側面図参照)。西側では旧河道の疊層面と一体化し、自然疊堆積との区別は明確ではない。形成時期は不明であるが、土坑群に切られていることから、それ以前である。上坑群は1・2号石列で形成された方形区画を意識したように、石列方向に長軸方向が直交するように配置されている。1・2号石列で囲まれた長方形の区画内部の性格は不明であるが、屋敷地、あるいは畠地であったと思われる。

(遺物) 163は上鋪?底部。内面はコゲによる黒変が認められる。164は志野皿で、17世紀前半。

2号石列(第17図、図版10)

(位置) D2～5グリッド。

(形態) 1号石列がL字状に東に伸びた石列で、約17mにわたり断続的に存在する。石積みを行った部分はなく、列状であり、地境としての列石かと思われる。

(遺物) とくになし。

3号石列(第16・24図、図版10・18)

(位置) BC2グリッド。

(形態) 2号溝西壁の石積みに沿って、約4m程度、南北に緩いカーブを描いて大型の礫が並んでいる。上層には礫が多数堆積し(第16図右参照)、下層には径40～70cm程度の礫を横長に直線的に並べている(第16図左、掘り上がり図参照)。2号溝を保護するように存在しているものの、第3図南壁断面図によれば、2号溝の掘り方よりも下層の3枚目の水田床土(12層)下に石列が存在することから、3号石列は中世段階の構築と考えられる。3号石列の延長線上に1号石列が位置することから、両者を一体のものとみなすことができるが、礫の大きさ、用い方が違うことから一応別の遺構とみなしておく。

(遺物) 165・166は鉄製角鉗。

第5節 埋没谷(第7・25図、図版11・19)

(位置) 調査区西側のB3・C3グリッド付近、2号溝と東側の疊層間に埋没谷がある。

(調査状況) 東側の疊層が急激に深く下がって埋没谷が形成されているもので、地表下2.1mまで下げたところ、疊層面が出たため、それ以上の掘り下げは行わな

かった。堆積土中からは平安時代中期(9世紀代)の土師器片、J2世紀代の白磁碗、江戸時代の陶器類等が見つかっている。

層位の年代観は、2号溝の掘り方(39～41層)が19世紀前半、それに切られている3・5層付近は出土した陶器から18世紀後半。11層付近は出土した白磁から12～13世紀。16層付近は土師器・須恵器から9世紀中期と考えられる。また17・18層は9世紀以前、13～15層は9世紀後半～11世紀頃、5～7層は14～17世紀頃と、おおよそ考えることができよう。

(遺物) 179・180は平安時代の遺物、181は平安末～中世の白磁。183・184は近世陶器、185～188は金属製品である。

179は色調が赤褐色の須恵器高台坏で、高台部は削り出し高台である。須恵器高台坏は8世紀初頭から9世紀中ごろ(宮ノ前VI期)まで存在するが、基本的に回転ヘラ削り後に付け高台をする(柳原1992)。本例は回転ヘラ削りのみで高台を形成していることから、須恵器高台坏の中でも最終段階、宮ノ前VI期(9世紀中期)と考えられる。180は暗文をもつ土師器高台坏で、高台部は削り出し高台。宮ノ前編年ではVI～VII期で、9世紀中期～後半。181は玉縁の白磁碗(碗IV類)。182は近世の青磁片。183は18世紀後半の美濃の灯明皿。184は18世紀後半の美濃の香炉。

185は径3cmの球形の青銅製鉈で、頂部に紐通し用と思われる突起の痕跡があり、体部下半には両端ハート形の切れ目が入る。完形品のため断面状況は図化できていないが、厚さ1mm未満。内部には金属質で径1cm程度の球形の鳴子1個が入っている。県内では高根町湯沢遺跡で金銅製1(8世紀末～9世紀前半)、並崎市中田小学校遺跡13号住(平安末)で金銅製1、鉄製1が出土しており、馬具の飾りと捉えられている。本事例は13・14層付近出土であることから、平安後期～末頃の所産と考えておきたい。

186は鉄鍼。柳葉形で、基部は欠損し、全体が緩く曲がっている。出土層位は185とほぼ同じで13層にあたることから、平安後期～末頃と考えておく。

187・188は不明鉄製品。

これらの出土遺物の中で185・186については出土層位、レベルが近いことから、出土地点は約3m離れているものの、時期的、性格的に関連があるものと考えたい。

参考文献

柳原功一 1992『宮ノ前遺跡における奈良・平安時代の上器・陶器』『宮ノ前遺跡』宮ノ前遺跡発掘調査報告書

第6節 旧河道（第2・24・25図、図版18・19）

自然流路、洪水時の氾濫原等を河道として説明する。本調査区は東側、北東側を大きく2・3号河道が浸食し、また西側には埋没谷から続く浅く広い自然流路があり（1号河道）、さらに西側道路沿いの西壁際に鉄分堆積を作り4号河道がある。

1号河道（第2図）

（位置）西壁から1・3号石列間、B～E1・2グリッドに位置する。

（形態）浅くくぼみ、緩やかに南に傾斜する。底面は礫が露出する。堆積土層については南壁断面層序を参照。河道東岸には1・3号石列が構築されている。

（遺物）陶化遺物はなし。

2号河道（第2図、図版24）

（位置）DE5～8グリッド以北。1号溝を切るように北側に広がりを見せている。

（形態）上層には砂岩が堆積し、下層は礫層となる。砂層が厚く、充填することはできなかった。

（遺物）1671は縄文中期末、曾利V式土器で、磨耗が著しい。168は土師質のすり鉢。中世か。169～171は鉄製角釘、172は不明鉄製品。

3号河道（第2図、図版25）

（位置）BC8グリッド以東。

（形態）東側から不整形に浸食、形成された河道で、覆土は砂礫層である。2号河道との前後関係を捉えることはできなかった。

（遺物）173～175は鉄製角釘。176は板状の不明鉄製品。

4号河道（第2図、図版25）

（位置）西壁際、B1～E1グリッドに位置する。

（形態）1号河道と重複するように南北方向に存在する。幅18m、長さ18mの不整形の溝状を呈し、河道の東側壁面は非常に厚くサビが発達している。

（遺物）177は志野皿で、17世紀前半。178は土師質土馬。頭部、脚部と尾先端を欠損する。現状では長さ3cm。鞍をのせた馬形で、類例としては金峰山山頂遺跡、甲府市金桜神社、一宮町立塚遺跡、白州町坂下遺跡、明野村中村追祖神遺跡、甲西町宮沢中村遺跡の諸例があるほか、県外では源勝市荒神山遺跡例がある。そのうち鞍付の土馬としては金峰山例、中村追祖神例、荒神山例がある。本例と比較すると、大きさは小型で、荒神山例に似るが、尾などの側面形は金峰山例によく似ている。土馬については当初、胎土が甲斐鹿児島の胎土に類似すること、鞍付の十馬であることから平安時代の所産と考えた（鶴原1993）。しかし近年の調査で、宮沢中村遺跡（新津2000）から江戸後期の集落に

伴って出土していることから、年代観に関しては近世まで視野に入れて再考する必要がある。また用途については金峰山例や畿内の土馬の例から雨乞い、あるいは祓い、または牛頭天王開運の祭祀具と考えられているが、本遺跡での出土状況から性格をうかがうことは難しい。ただ脚や頭を欠損している点は、何らかの祭祀行為を意味するものかもしれない。

参考資料

鶴原功 1993「金峰山発見の上馬」『帝京大学山梨文化財研究所報』19

新津 健 2000『宮沢中村遺跡』山梨県教委ほか

第7節 畦状遺構（第7図、図版11）

（位置）DE2グリッド付近、1号石列と4号河道間に位置する。1号石列、5・6号土坑と重複関係にあるが、土坑群を調査した後に本遺構を確認したため、切り合い関係は不明である。おそらく土坑の方が新しいと思われる。

（形態）5m四方の範囲に東西方向、南北方向の畠状の浅い溝が断続的に数条ずつまとまって存在する。東側に1号石列、南側に東西方向の4号溝があり、西側には南北方向に4号河道が走るが、畠状の溝の方向はそれらとほとんど同じ方向をとっている。

（遺物）とくなく、時期は不明であるが、中・近世の所産か。

第8節 その他の遺構

1号溝以西では、調査区全体に旧水田による酸化面が広く認められた。第3図下の南壁断面図に、酸化層を網掛けして水田の床土面を図示したように、表土直下の3層が調査区全体を広く覆う水田面である。また埋没谷から西側に6層、12層の2面の水田があり、東側では3号溝から東側に8層、1号溝付近に32・34層の計3面の水田が確認できる。面的な広がりについては、3層が2号列石付近まではほぼ全面的に広がるほか、6層は埋没谷から4号溝付近まで、8層は3号溝から2号列石付近、32・34層は1号溝から東側付近と考えられる。時期はいずれも不明確であるが、3層は20世紀代、6層は18世紀後半代、12層は12～13世紀代、8層は18世紀頃、32・34層は不明であるが中世～17世紀頃かと思われる。

第9節 遺構外遺物（第25・26図、図版19）

189は外耳上器である。鏽形（釜形）土器口縁部外面に上向きの耳状把手を付けたもので、把手内には凹

孔を2つずつもつと考えられる。190も土器の形態から外耳土器と推定される。外耳把手は圓錐基にかけて紐が燃えないような工夫であり、甲斐國独自の土器と考えられる。県内では甲西町大師東丹保遺跡Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ区（小林1997）で多数出土しているほか、須玉町池下遺跡、大泉村豆生田第3遺跡、南西川遺跡18号ピット、並崎市石之坪遺跡（東区）の諸例がある（第7章第4節参照）。大師東丹保遺跡例は13世紀後半と考えられていることから、本例も同時期としておきたい。

191は柱状高台土器の高台部片。192は青磁碗。193は土師質土器小皿。194～196は鉄製角釘。197はC5グリッド出土の「永楽通寶」。198は「寛永通寶」の文銭。

参考文献

小林建二 1997「大師東丹保遺跡Ⅱ・Ⅲ区」山梨県教委はか

第10節 試掘坑（第1・26図、図版20）

甲府市教育委員会による平成13年6月と平成14年1月の2回行われた試掘調査に際し、試掘調査報告書に基づいて概要を記しておく。調査地点については第1図を参照。なお6号トレンチは試掘報告書T-1、7号トレンチはT-2、8号トレンチはT-3、9号トレンチはT-4、10号トレンチはT-5、11号トレンチはT-6、12号トレンチはT-7である。

1号トレンチ（第1図）

（調査状況）東西30m×幅2mのトレンチ。調査地点は建設会社の資材置場であったことから、搅乱を多く受けている。遺構はない。

（遺物）なし。

2号トレンチ（第1・26図、図版20）

（調査状況）東西54m×幅2m、南北10m×幅2mのL字に曲がった試掘坑。現状の溝と重複して人為的な列石を伴う溝があり、周辺に疊堆積が認められた。また古墳～平安時代の遺物が若干出土した。土層は地表下40cmが表土、以下灰褐色砂質土、暗褐色砂質土などとなり、遺物を含んでいる。地表下90cmで灰色砂層となる。

（遺物）199は13世紀代と思われる小皿。200は小型羽釜。5号トレンチにも同種のものがあるほか、類例としては大師東丹保遺跡Ⅱ区第1面例などが知られている。201は石鉢で、口縁部内面にスグが付着する。202・203は常滑窯片。

3号トレンチ（第1・26図、図版20）

（調査状況）東西17m×幅2mのトレンチ。地表下40cmは表土層、以下灰暗褐色土、暗褐色土などが堆積し、地表下1mで灰褐色砂層となる。遺構はない。

（遺物）204は渥美焼と思われる破片で、表面に叩き日をもつ。

4号トレンチ（第1・26図、図版20）

（調査状況）東西9m×幅2mのトレンチ。地表下30cmは表土、以下褐色沙質土、暗褐色土などがあり、地表下90cmで灰暗褐色沙質土、灰褐色砂層となる。遺構はない。

（遺物）205は銅銭で「皇宋通寶」。

4号トレンチ（第1・26図、図版20）

（調査状況）東西14m×幅2mのトレンチ。遺構はない。

（遺物）206は蓮弁文の青磁碗。

5号トレンチ（第1・26図、図版20）

（調査状況）本調査地Ⅳに設定された試掘坑。南寄りに東西42m×幅2mのトレンチを設定したところ、古墳時代の溝と近世以降の石積みを伴う溝が検出された。土層説明は略。

（遺物）古墳時代の溝（1号溝）中から完形の椀（55）が出土するなど、遺物が多い。207は200に類似した小型羽釜。208は蓮弁文の青磁碗。209は手づくね土器で時期は不明であるが、1号溝に伴うものであれば土師器模倣のミニチュアの可能性があり、6世紀代の遺物といえる。

6号トレンチ（第1図）

（調査状況）現状は水田。東西10m×幅2mのトレンチ。深さ1.7mまで掘削をして調査したところ、表土以下40cmは近代以降の耕作土であった。その下層は砂礫層で、遺構・遺物はない。

（遺物）なし。

7号トレンチ（第1・26図、図版20）

（調査状況）南北22m×幅2mのトレンチ。地表下20cmは耕作土で、その下層に褐色土層、黒褐色土層などがあり、地表下80cmで砂礫層となる。土坑と思われる遺構が1箇所確認された。

（遺物）210は脚部に円孔をもつ土師器高杯で、古墳時代中期。211は内面黒色の土師質土器で11～12世紀代か。

8号トレンチ（第1図）

（調査状況）南北10m×幅4mのトレンチ。地表下50cmで暗褐色土層となり、遺構・遺物が検出された。地表下0.8mで砂礫層となる。

（遺物）なし。

9号トレンチ（第1・26図、図版20）

（調査状況）東西10m×幅2mのトレンチ。表土下0.9mで灰褐色土層、1.2mで疊層になる。

（遺物）212・213は鉄釘と思われる鉄製品。

10号トレント（第1図）

（調査状況）東西5m×幅2mのトレント。地表下40cmは耕作土、以下暗褐色土層、黒褐色土層などがあり、地表下0.9mで砂礫層となる。遺構はない。

（遺物）なし。

11号トレント（第1図）

（調査状況）東西10m×幅2m。地表下0.8~0.9mで暗褐色土層となり、その直下の暗褐色粘質土層中に若干の土器類が検出されている。地表下1.2mで砂礫層となり、古墳~古代と思われる土師器片が少量出土した。

（遺物）図化資料はなし。

12号トレント（第1・26図、図版20）

（調査状況）南北7m×幅4mのトレント。地表下40cmで暗褐色土層、50cmで黒褐色土層となり、同層中から常滑窯、青磁碗、土師質土器などの中世の遺物がやや多く出土した。また浅い不整形ピットや炭が出ていている。地表下0.8m以下は砂礫層となる。トレントの南北両側は近世以降と思われる氾濫による砂層堆積層となっている。

（遺物）214は蓮弁文をもつ青磁碗。215は内面に沈線文をもつ青磁碗。216~220は常滑窯。

第7章 まとめ

第1節 微地形の変遷と遺構の変遷

平石遺跡は荒川右岸に位置し、現堤防まで約200mと近接している。地元の方の話では近年でも増水による氾濫の危険はたびたび生じることで、かつては氾濫の影響を直接的に受けた地域であった。調査状況によれば、調査区東側には砂層が厚く堆積し、近世以降の氾濫で流路、あるいは氾濫原となったことが明らかであった。調査区そのものは微高地で、周間に旧河道や埋没谷が存在することから、かつては起伏のある地形であったことがわかる。なお、微高地自体も下層の砾層の存在から荒川の氾濫によって形成されたことは明らかで、弥生後期以前に形成されたと思われるが、調査には至っていない。

調査成果に基づく遺跡の土地利用の変遷を述べると次のようになる。

弥生時代後期 1号溝下層に旧流路が形成され、土器が堆積する。土器は駿河系を主とすることから、東海系の影響力の強さがうかがえる。集落域は不明。

古墳時代後期初頭 旧流路に重なるように1号溝が設けられる。溝内からは高坏が多く出土し、土師器甕が破碎されて集中するなど、祭祀の場、あるいは祭祀後の土器の廃棄場所として利用されたらしく、周辺に

居住域が想定される。起伏に富んだ地形であり、微高地をはさんだ西側には、1号河道および深い谷（埋没谷）が凹地として存在したらしい。

平安時代（9世紀中頃）西側の埋没谷は次第に埋没しつつあるなかで、谷内から土師器・須恵器・高台坏が出土することから、谷内で何らかの行為が行われた。

平安時代末（12世紀）埋没谷はほぼ平坦化するとともに、微高地と埋没谷間に堅穴1軒が構築され、初めて居住痕跡が出現する。堅穴南側にあたる埋没谷からは鉄鋤、銅鋤が出土し、何らかの祭祀が行われたか、何らかの特殊な場としての土地利用が想定される。

中世前期（13世紀後半）この頃、埋没谷を中心にお水田が形成されるとともに、白磁片の存在から周辺地域に居館等の居住施設があったか、居住域としての土地利用が行われたらしい。3号石列が構築されるのもこの頃か。

中世後期～近世初期 この時期は遺物が少なく、土地利用の状況がわかりにくい時期であるが、1・2号石列が構築され、地割りが行われたと考えられる。その際、3号石列が地境の基準になっていたことが予想される。1・2号石列で開まれた地区は平坦地として整地され、何らかの土地利用が行われている。周囲の1号河道、埋没谷、1号溝上層は水田が整備されたようである。また4号溝、畝状遺構が構築されるものこの時期であろう。この時期、本地域は諏訪神社社地であったことも予想されるが、こうした地割りや地境は神社との関連で形成されたものとも思われる。

近世（18世紀前半頃）地境である3号石列脇に2号溝が構築される。同時に1号石列上層に溝が構築され（調査では削平）、水を引き込んで2号溝に落とし、何らかの利水施設としている。おそらく精米あるいは粉挽きのための水車小屋か。

近世（19世紀前半）水害のため2号溝は埋没。その後の開墾により、2号石列以降は全体的に水田化したと推定される。1・2号石列による地境はその後も意識されたらしく、現在までの地境として残る。

近代以降 水害で2号河道が形成される。また1・2号石列付近に溝状の土坑群が形成され、土坑の覆土には2号河道と同質の砂礫層が充満する。

以上のように荒川との強い結びつきの中で、弥生末以降、平安時代までは断続的ではあるが、それ以降は現代まで連續と積極的な土地利用が行われている。

第2節 平石遺跡1号溝の弥生後期土器群

山梨県地域の弥生時代後期縦年は、弥生後期前半（5期）と、弥生後期後半（6期）に区分され、中部

高地系土器と東海系土器の2つの大きな分布圏の影響が認められるという（中山1999、保坂2002）。

5期は2期に細分され、5-(1)期として北信地域の吉田式、中南信地域の橋原遺跡1期に類似した土器様相を示す「金の尾I式（期）」、5-(2)期として箱清水式、樽式分布圏の中で甲斐独自の地域性をもつ「金の尾II式（期）」〔家下・金の尾型〕に分けられている。また5-(2)期に東海の菊川式、山中式の影響を受けた土器群が盆地南西部に局地的に分布し、「住吉式」と呼称されている。

金の尾I期は壺・甕・鉢・瓶・高坏で構成される。壺は頸部に簾状文、櫛描波状文、肩部に鋸齒状沈線文をもつ。そのほかに吉田式に出来する頸部に綾杉文をもつ壺、南信から中位に由来する複合口縁壺などがある。甕は口縁部に櫛描波状文、頸部に簾状文、胴部に櫛描波状文、たすき状縦羽状文、格子目文、南信系の櫛描短線文、ボタン状貼付文などがある。敷島町金の尾遺跡、姫崎市下横屋遺跡、北下条遺跡、八代町下長崎遺跡などがある。この時期、東海系の影響は少なく、中道町上の平遺跡で出土した東海系の壺が知られる程度である。

金の尾II期は、中部高地系土器群が甲府盆地に最も普及した時期とされている。壺・甕・鉢・瓶・高坏・片口など多彩な土器からなる。壺は大型・小型があり、頸部から肩部には櫛描波状文、横走櫛描文、T字状文、簾状文などが施文され、小型壺では赤彩例が多い。甕は櫛描羽状文、格子目文が消失し、波状文はほとんどが右回りの中部高地型である。東海系の影響を受けた「住吉式」土器は壺、甕、高坏、広口壺で構成される。壺は柄状工具による羽状文、刷状文、結節状文、ボタン状貼付文などが施文される。高坏は坏部中段で屈折し、朝顔形に直線的に開き、口縁部に櫛描波状文、凹線文を巡らすものがある。壺や甕は東海地方の菊川式土器新相を示し、高坏には山中式の影響が強い。

6期前半には、中部高地系土器の分布域が盆地北西部に拡まるとともに、東部東海から西相模地域に広がる結節羽状繩文系土器群が盆地全域に広がって優勢となる〔六科丘式〕。また甲府盆地から県東部には台付甕が分布する。

6期後半では、西部東海系土器が盆地内に急激に流入する。土器はS字型などの尾張地域の土器群を主体とするほか、わずかに北陸系土器が混在する。

では平石遺跡1号溝の弥生後期土器群は、どのような土器群から構成されているだろうか。

壺には21~23、26~34などがあり、肩部に縄文、擬似繩文をもつものに21、28、31、32、結節繩文をもつ

ものに30・33がある。器形がわかる21~23では、肩部が無花果形で中央下間に弱い肩部をもち、5期後半的な様相があり、「住吉式」として理解しておきたい。29は壺口縁部で、縄文地面上に短い隆線文を縦位貼付したもので、東海系や住吉式に認められる技法である。27は赤彩壺で、金の尾II式の小型壺の可能性はあるが定かではない。30・33については6期前半の六科丘式と考えられる。

甕には44・47の台付甕があり、24・25・35~37の口縁部も台付甕であろう。47は脚部の接合部外面に特徴的な指頭压痕をもつ土器で、駿河地方の「登呂式」と思われる。またハケメ調整で折り返しII縁上に連続キザミをもつ24・25・35~37のII縁部片も駿河地方の影響を受けた土器群と思われ、5期後半から6期前半と考えられる。41は頸部に櫛描波状文、口唇部にキザミをもつ甕で、金の尾II式と思われる。

高坏には42・45・46がある。42は屈曲をもつ器形で赤彩があり、5期後半と考えられるが、II唇部の外反がないことから壺の口縁部の可能性もある。45・46は時期不明であるが、5期後半から6期前半とみておく。

以上、主な器形から土器群の様相をみたが、中部高地的な様相が非常に弱く、東海系の影響が強くうかがえることが明白である。本遺跡と敷島町金の尾遺跡とは距離的に近いため、5期段階では櫛描波状文をもつ中部高地的な土器群が存在するはずであるが、本遺跡にはほとんどないことから、中部高地的な影響力が低下した6期前半の土器群を主とすると考えられる。

参考文献

- 中山誠二 1999 「弥生時代の福井」『山梨県史 資料編2 原始古代2』
保坂和博 2002 「甲府盆地における弥生後期の土器様式」丘陵例会発表資料

第3節 平石遺跡1号溝の古墳時代後期土器群

古墳時代後期土器群には、食器・供膳具として土師器坏、碗、高坏、小型長頸甕、小型壺、須恵器高坏などがあり、煮沸具として土器器甕がある。器種分類をすると以下の通りである。

土師器

坏A - 須恵器坏蓋の模倣と考えられている口縁部が直立する坏 (56~61)。

A 1 - 体部中央の稜が沈線で強調されるもの (56)。より忠実な模倣形態と思われる。

A 2 - 稜に沈線を伴わない (57~61)。

坏B - 丸底で口縁部が丸く立ち上がる。暗文状の放

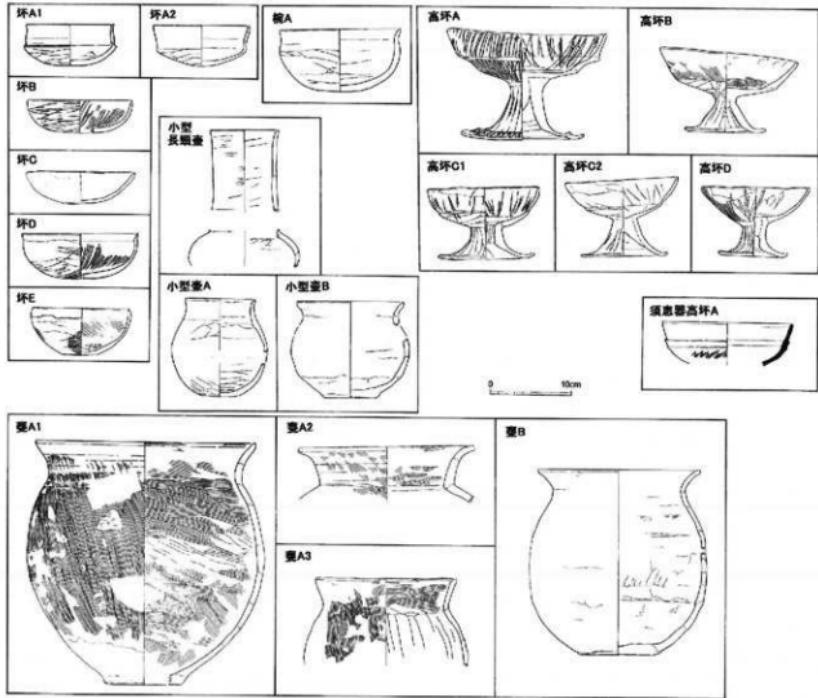


図7 土器の分類

射状ミガキを内面にもつもの（49・52）とミガキをもたないもの（48・50）がある。

壺C - 丸底で口縁部が直線的に開く（51）。

壺D - 丸底で口縁部がくの字に外反する（53）。内面に暗文状の放射状ミガキをもつ。

壺E - 平底で口縁部は丸く立ち上がる（54）。壺Bよりも器高が高い。

椀A - 口縁部が外反し、底部は丸い（55）。

高环A - 壺部中央および脚部に強い稜をもつ（67）。
壺部内面、脚部外間に花弁状、鋸歯状の暗文状ミガキをもつ。

高环B - 逆台形の箱状の壺部をもつ。脚部はハの字状に開く。

高环C - 壺部中央やや下に稜をもつ。壺A的な壺部（65・66・70・71・74・75）。

C1 - 脚部が筒状からハの字状に移行する。脚部横位の暗文状ミガキをもつものも本類か（76・77・79・80）。

C2 - 脚部がハの字状に開く（66・70）。放射状の暗文状ミガキも本類か（81・82）。

高环D - 壺部は直線的に開く。脚部は筒状からハの字状に広がる（64）。

小型長頸壺 - 頸部は長く直立し、体部は丸いと推定される。底部は平底か（85～87）。

小型壺A - 口縁部は短くわずかに外反し、体部は丸く平底（91）。

小型壺B - 口縁部は強く外反し、底部は平底（92）。

壺A - 内外面が主にハケメ調整された壺。

A1 - 広口で胴部は丸い球胴（96）。

A2 - A1よりも狹口で、胴部は丸い球胴か（97・99）。

A3 - やや小型のハケメ壺（94）。

壺B - 内外面が主にナデ調整された壺（93・95）。

須恵器

高环A - 壺部中央に稜をもち、稜下に擗波波状文をもつ。陶邑編年I-3～5段階（TK208・23・47）

と考えられ、5世紀中～末としておきたい。

上師器の土器様相を県史編年に対比すると（坂本1999）、およそ古墳時代VI～VII期と思われる。VI期では須恵器が明確かつ良好な形で確認できる時期とされ、TK208が伴う。VII期は楕円形壺を主とする中で須恵器壺が逆転した模倣壺が出現する時期とされる。須恵器TK23が伴い、時期は5世紀第3四半期後半～第4四半期前半とされている。VII期では須恵器模倣壺が主となり、壺は長胴化傾向にある。須恵器はTK47が伴い、時期は5世紀第4四半期後半～6世紀第1四半期初頭とされている。

七師器壺Aと壺B～Eでは、圓化点数を量的に比較した場合、壺Aがわずかに多いもののほぼ同量といえる。したがって、壺Aが主となるVII期以前の様相を示している。壺AのI～II部形態はVII～VIII期に類似があるが、A1は須恵器に比較的忠実な模倣と思われる事例であり（56）、VII期と考えられる。高壺C1はVII期に相当し、また高壺C1はVII期に相当する。壺で全形が判明しているものは壺A1（96）のみであるが、最大胴径と器高がほぼ同じで、球胴といえる。明らかな長胴はないことから、VII期以前の様相といえる。

以上により、VI～VIII期相当の土器群といえる。したがって、ある程度の時間幅は考えねばならない。ただVI期とVII期の区分は難しく、1号溝内で分布域に明瞭な違いが見出せるわけでもないため、廃棄行為が継続的であったのか、短期的なものであったのかは不明である。土器の器種構成をみると、土師器壺A8点、壺B～E7点、楕円A1点、高壺A～D21点、須恵器高壺1点で、高壺C22に対し、壺・楕円16となり、一般的な出土状況に比べて高壺が多い。これによれば祭祀的な行為に伴う廃棄土器群という見方が可能である。また壺（96）は意図的な破碎状況を示し、祭祀行為に伴う可能性がある。祭祀に伴うものであれば、継続的ではなく、短期的、単発的な廃棄の可能性があり、一括りの高い資料といえる。ただ、この時期は御坂町続塚遺跡、二之宮遺跡に良好な資料が知られているものの、意外と資料の少ない時期であり、編年時期および内容については再検討する必要もある。

参考文献

- 坂本英夫 1999 「古墳時代の編年」『山梨県史 資料編2 原始・古代2』

第4節 1号竪穴の土鍋

1号竪穴出土の土鍋（第18図1）は、平安時代末と考えられる把手付丸底鍋である。ほかに関連遺物とし

て、1号竪穴周辺で出土した外耳土器（鍋）がある（第25図189・190）。12世紀から13世紀にかけた時期は、竪穴建物の大変革期で、竪穴から平地式に移行するとともに、竈が焼用されて匂炉裏に変わる。こうした諸施設の変化と対応するように、土器は壺・羽釜から鍋へと変わっていくが、おそらく食生活の変化を背景としたものであったことを予想できる（柳原1999）。

近年、大師東丹保遺跡で13世紀後半の遺物に伴って多数の外耳土器が出土し、外耳土器が中世前期の甲斐地域を代表する煮沸具であることが改めて認識された。そこで10世紀後半から13世紀代、甲斐型上器消滅期以降、外耳鍋出現までの山梨県内の竪穴を集成し、土鍋の系譜、時期を推定してみたい。この時期の県内の土器編年としては森原編年（森原1994）、西田町編年があるが、ここでは西田町編年（柳原1997）を用いて説明する。

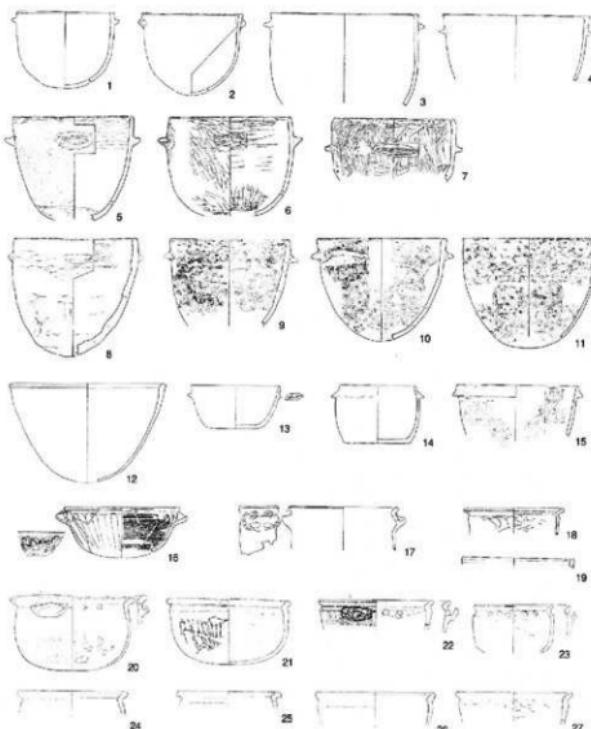
山梨県内で10世紀後半以降（甲斐型土器以降）の竪穴は、23遺跡102軒が集成できた。地域的には北巨摩（八ヶ岳山麓）地域 - 9遺跡29軒、中巨摩（笠無川東）地域（敷島町） - 2遺跡6軒、中巨摩（笠無川西）地域 - 3遺跡6軒、東山梨地域（塩山市） - 1遺跡4軒、東八代地域 - 8遺跡57軒である。

それぞれの竪穴について、炊事施設（竈の位置、床面の焼土）、柱穴（本数）、屋内施設（壁溝、仕切り溝の有無）、出土遺物（鍋・釜類、土師質食器類、貿易陶磁、国産陶器、その他）、時期（西田町編年）の観点で整理したのが表1である。時期については、およそ1期 - 10世紀後半、2期 - 11世紀前半、3期 - 11世紀後半、4期 - 12世紀前半、5期 - 12世紀後半、6期 - 13世紀前半、7期 - 13世紀後半としておく。

北巨摩地域では29軒中、2期3軒、3期（2～3期を含む）6軒、4期（3～4期を含む）12軒、5期1軒、6期2軒、7期1軒である。竈はコーナー竈が5期まで存在し、位置は下大内の1例を除き南東か南西のいずれかで、南東9軒、南西7軒、北東1軒となっている。柱穴は2期にはないが、3期以降7期には存在する事例が多い。屋内施設として3・4期に仕切り溝をもつ事例が石之坪（東）で計3軒認められる。4期にコーナー竈に加えて焼土を作り事例が4例あるほか、焼土のみをもつ事例も3軒あり、竈の焼用が始まっている。ただ5期以降への継続性は資料が十分でなく、不明確である。煮沸具は3期に把手釜、把手丸底釜が石之坪、石原田北で出現し、4期ではそれらが主となる。5・6期では様相が明らかではなく、7期に外耳鍋と思われる資料が石之坪に存在する。

・官町を中心とした東八代地域では57軒中、1期2

山梨県における11～13世紀の豊穴



1: 笠木地蔵4住 2: 笠木地蔵11住 3: 笠木地蔵28住 4: 笠木地蔵29住 5: 石原田北4堅
6: 石原田北18堅 7: 石原田北19堅 8・9: 石之坪(東)3住 10・11: 石之坪(東)33住
12: 笠木地蔵4住 13: 一ノ坪SD06 14: 騎岳田4住 15: 石之坪(東)2住 16: 豆生田第3
17: 滝下7住 18: 南西田 19: 石之坪(東)2住 20~27: 大師東丹保II区
(S=1/12)

図8 手把釜・外耳鍋ほか

軒、2期5軒、3期5軒、4期19軒、5期11軒、6期2軒、7期9軒を確認した。竈はコーナー竈が5期まで存在し、位置は南東か北東が主で、わずかに南西がある。全体的には39軒中南東20、南西3、北東16となる。床面の焼土については4期1例、5期2例、7期1例で、北巨摩地域同様に4期から出現するものの、数は少ない。柱穴は3期から存在するようであるが、明確になるのは4・5期で、6・7期にも継続するようである。仕切り溝をもつ例はない。煮沸具は4期に把手釜、把手丸底釜が出現、5期に継続するが、6・7期は不明である。

中巨摩地域（敷島町）では2期1例、3期5例の計6例のみである。竈は不明で、焼土をもつものが2期

に1例ある。煮沸具は壺、羽釜がある。

東山梨地域（塩山市）では1遺跡4軒の事例のみであるが、2期1軒、3期3軒で、竈は3期に北東のコーナー竈2軒が確認されている。煮沸具は3期に把手釜が存在する。

中巨摩地域（釜無川西岸）では5軒中4期2軒、5期3軒、7期1軒で、竈は4期に南東コーナー竈1軒、5期に南東、南西のコーナー竈が1軒ずつあり、北巨摩の様相に似ている。煮沸具は4期に把手鍋が1例存在する。

以上、山梨県内の11世紀から13世紀の堅穴建物と煮沸具の状況を整理すると、次のようになる。

竈は1期（10世紀後半）以降、堅穴の隅に主軸方向

を45度内側に向けた「コーナー竈」となり、5期（12世紀後半）まで継続する。竈の位置には地域性があり、北巨摩地域では南東または南西コーナー、東八代地域では南東または北東が主である。それに加えて北巨摩地域では4期（12世紀前半）以降、床面に焼土をもつ例があり、東八代地域でも少数ではあるが、4期以降に焼上が存在する。これは竈以外に暖房施設としての地床炉、あるいは囲炉裏を併設した事例と思われ、寒冷地対策と想定される。また間仕切り例も北巨摩地域にのみ存在するが、これも竪穴内に仕切ることによって寒さを防ごうとしたものと想像される。柱穴は3期（11世紀後半）以降に存在し、明確に4本の柱穴をもつものが存在するなど、3期以降、竪穴建物の構造上の変化が発生したことがわかる。煮沸具は、1・2期では平安後期の羽釜、竈のあり方を引き継ぐが、3期に把手釜が出現し、5期まで継続するようである。把手釜は羽釜の鉢を分断するように2～3箇所程度に把手が付けられたもので、羽釜からの系譜を引いていることは間違いない。なぜ鉢が把手に変化したのかについては、あくまでも想像するしかないが、竈に掛ける際に鉢が次第に不要となった結果、形骸化した姿と考えられる。これは平安時代を通じて薄手で長胴形態であった壺が、支脚石を支えにして固定され、主に蒸し器の湯を沸かす煮沸具として用いられたと考えられるのに對し、羽釜の出現により壺内での直接的な炊飯が始まる（註1）。この際、炊飯時ごとに竈からはずす必要が生じ、器壁は厚く丈夫になり、重みを鉢で直接受けるように鉢は幅広で頑丈に作られる。やがて、器壁を一層厚くすることで胴部自体を竈の孔に固定できるようになったと考えられ、鉢は不要となり、把手はあくまでも持ち上げる際に機能するにすぎなくなったりと考えられる（註3）。6・7期の煮沸具がまだ明確ではないが、7期になると外耳鍋が存在し、竪穴に伴う事例もわずかにある。

このように、コーナー竈は1期から5期まで存在するなかで、羽釜が3期に把手釜に変化し、5期まで存在する。6期以降竈が消滅するとともに煮沸具は不明となるが、7期には外耳鍋が出現する。この土器は管見では甲斐地域のみに知られるもので、紐で吊り下げるための2孔1対の孔をカバーするように、孔の下側から耳状の把手が付けられるものである。器高は把手釜に比べると著しく短くなり、鉢に近い形態となる。口縁部は蓋受け状の形態をもつことから、木の蓋を伴うものである。以上の特徴から、外耳鍋は囲炉裏で自在運動的な装置によって吊り下げられた上器と考えられる。外耳鍋の蓋受け状口縁については、排煙装置のあ

る竈ではなく、開放的な囲炉裏での使用のため、蓋が必要となったのであろう。6期（13世紀前半）以降、竈がなくなるとともに、竪穴の機能が一般的な住居ではなく、特殊なものに変化していったと予想され、一般的な住居形態は平地式、あるいは床をもつ高床式へ移行したと考えられる。そこで炊事施設は囲炉裏であったと考えられる。したがって6期以降では煮沸具が竪穴内で使用されなくなるとともに、竪穴に伴って出上するケースも減少するのではないかと思われる（註2）。

以上のように平安末から鎌倉までの竪穴と煮沸具の変化について、想像を交えて予想してみた。ここで翻つて1号竪穴の把手鍋について考えてみたい。

1号竪穴の把手鍋は、器高の点では7期への系譜が伺える。しかし口縁部は蓋受け形態ではないこと、1号竪穴には東南コーナー竈があることから、竈で使用された煮沸具であることがわかる。把手の形態は3・4期の把手釜の把手と同一で、横長である。ただし口縁部上端に付けられている点は異質で注意される。したがって竈で用いられた煮沸具の一形態として理解でき、笠木地蔵遺跡例などが深い蓋形であるのに対し、次第に器高を減じていった新しい様相をもった上器といえる。したがって時期的には4期、あるいは5期と考えられる。

註

註1 長胴壺では、内面にコケなどの煮沸痕を残さないのが通例である。したがって蒸し器であり、コメの炊き方には「強飯」であったと予想されている（坂井1998）。内面にコケが認められるようになるのは、検証は不十分であるが羽釜からと思われる。把手釜では内面にコケや黒変が認められるのは普通となる。

註2 竈から側が表へ移行したのか、両者が並存したのかわからないが、明治以前では囲炉裏のみであったという伝承をもつ地域が多い。おそらく食生活の変化とともに囲炉裏での調理が普及したと思われるが、囲炉裏の普及は鎌倉以降のムギ作の普及と共に関連があるものと考えられる。

註3 手把釜は山梨県域を中心として東信、中信地域にも分布が認められる。

参考文献

- 森原明廣 1994 「山梨県地域における古代末期の土器様相—「甲斐型上器」の消滅とその後」『正版』14 甲斐丘陵考古学研究会
備原功一 1997 「西田町遺跡調査報告書」西田町遺跡発掘調査団ほか
坂井秀弥 1998 「古代のご飯は蒸した「飯」であった」『新潟県考古学講座会報』2
備原功一 1999 「炭化穀実から探る食生活 古代～中世を中心に」『「食」の復元 遺跡・遺物から何を読みとるか』帝京大学山梨文化財研究所 研究集会報告集

図8の出典

- 1～4・12 長沢宏昌 1985「笠木地蔵遺跡」山梨県教委ほか
- 5～7 平野修 2001「石原山北遺跡」マート地図(石原山北遺跡発掘調査団ほか)
- 8～11・15・19 植原功一 2000「石之坪遺跡(東地区)」石之坪遺跡発掘調査会ほか
- 13 小野正文 1997「一ノ坪遺跡発掘調査報告書」山梨県教委ほか
- 14 大島正之 1999「御岳山遺跡」煮島町教委
- 16 植原功一 1986「市生田第3遺跡」大泉村教委ほか
- 17 山路恭之助 1998「浅下遺跡」須玉町史 考古・古代・中世須玉町
- 18 中山千恵 1998「南西山遺跡調査報告書」南西山遺跡発掘調査会ほか
- 20～27 小林健二 1997「大師東丹保遺跡Ⅱ・Ⅲ区」山梨県教委ほか

第5節 調査の成果と課題

本遺跡では1号溝から高杯、坏類を主とした5世紀後半代の土師器類がまとまって出土した。溝そのものの性格に関して、部分的な調査であったために明らかにできなかったが、出土上器は高杯が多く、破碎された壺が出土するなど祭祀的な様相がうかがえた。ただし土器以外に祭祀遺物といえるものは皆無である。出土遺物の時期は限定的で、時期的な印象を受けた。接合関係を調べると、北側と南側で距離を隔てて接合するものが多く、意図的な廃棄も予想される。溝が自然流路の可能性もあるが、水場での祭祀的な廃棄の一例として理解しておきたい。

1号溝下層からは、思いがけず弥生後期の良好な資料が得られた。1号溝構築以前の自然流路内での廃棄と考えられるが、時期的にまとまりがある。本遺跡は金の尾遺跡の周辺部にあたるが、中部高地系土器がほとんどなく、東海系の土器によって占められており、弥生時代末における東海系の影響力の強さが鮮明になった。

2号溝は謎の遺構である。一応ここでは水車と思われる利水施設に関わる溝と考え、水害史や出土遺物から溝構築を18世紀前半、廃棄時期を19世紀前半と想定した。水車の可能性が高いとは思われるが、これまで

この分野に关心が払われてこなかったせいもあって、溝内に礎石を置いて水車を設置した事例に関し、ただちに類例をあげることはできない。遺跡の西側に位置する数島町付近は、かつて水車が数多くみられた地域であり、周辺の現存遺構との比較もまだ可能と思われる所以、今後注意をして観察していくべきと思う。

1号堅穴は12世紀代の堅穴で、疊層を掘削して構築している。壁に礎を積んだ形跡がある点が注意された。出土した把手付土鍋は中世前期の外耳上器へとつながりそうな形態であり、竈の焼用から囲炉裏出現の移行期の土器様相の一例として興味深い発見となった。

そのほか、特殊遺物として銅鈴、上馬、鉄鎌がある。銅鈴は県内で3遺跡目で、遺構外の埋没谷出土であったが、層位的な分析から時期を推定することができた。上馬は4号河道出土で、時期は不明であるが、これまでに発見してきた平安時代の所産といわれる金峰山例などに類似する。近年類例が増加しつつあるので、時期については再検討する必要がある。またその祭祀内容についても改めて考える必要がある。今回の出土地点は諏訪神社裏であり、金櫻神社出土例もあることから、神社周辺の遺物である可能性がある。鉄鎌は銅鈴と同じく埋没谷出土で、なぜそうした場所から銅鈴や鉄鎌が出土するのか不思議に感じられた。遺構外で出土するこうした遺物については注意がほとんどされていないが、何らかの戦の跡を示す一種の戦争遺跡の可能性もある。

中世前期、13世紀代については、白磁や外耳土器などの資料があるにすぎないが、周辺の試掘データを考えあわせると、この一帯には濃密な遺跡分布が予想される。熊跡の所在も明確にはなっていないが、そうした拠点的な施設が周辺に存在したことが予想され、注意していく必要があろう。

最後になりましたが、山梨県県中地域振興局建設部および甲府市教育委員会、調査参加者および遺跡周辺地域の方々には、調査に際して多くのご協力をいただきました。文末ながら御礼申し上げます。

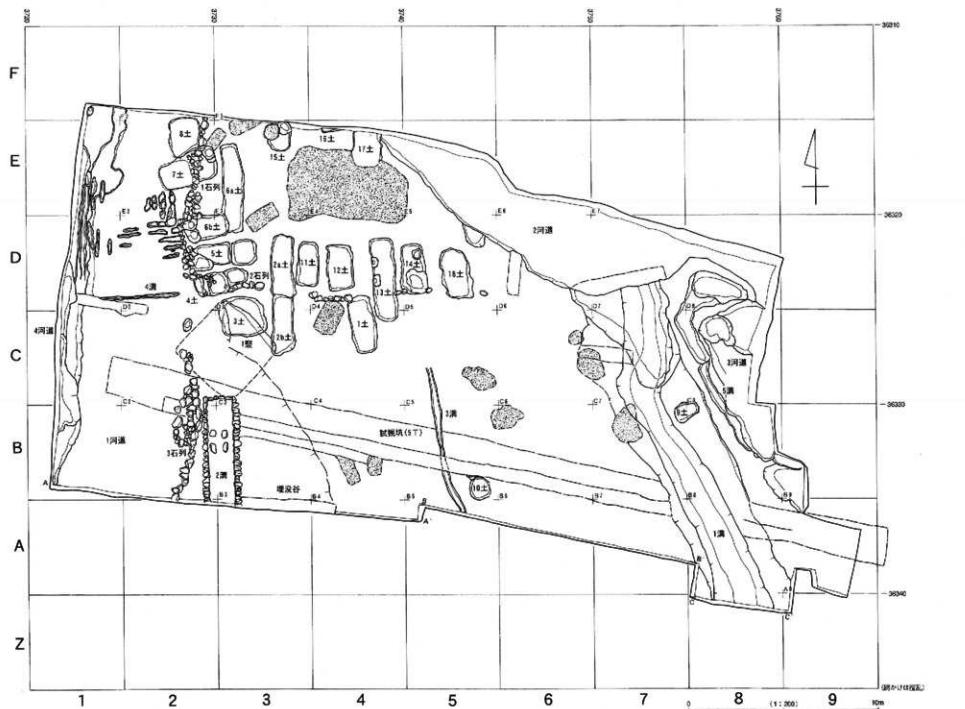
表2 土器・陶磁器類表

表3 鉄・土・石製品観察表

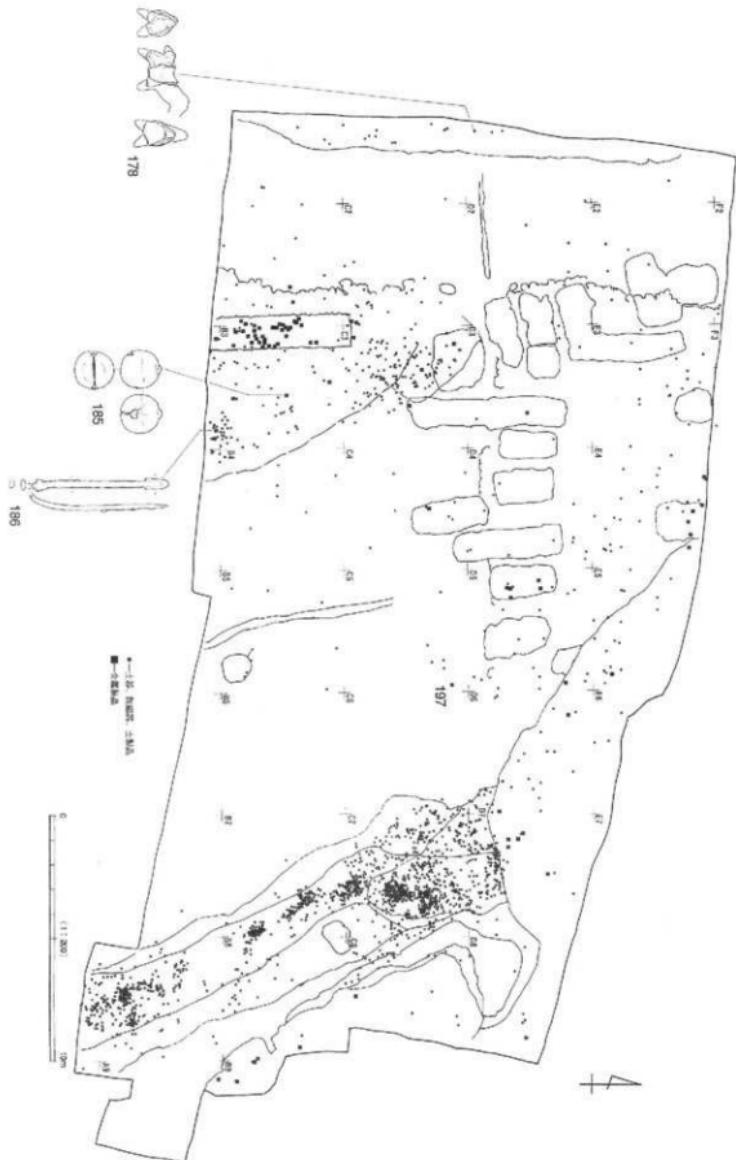
固形地點	番号	所調	材質	JIS規	規格	寸法	大きさ	注記	備考
18115	2	鐵製	鉄	60	1.4	0.8	1.2	80x75	
18115	-	鐵	95	-	-	1.2	1.2	52.16	1.1m×0.7
18115	-	4寸	鉄	102	6.7	1.3	1.3	132.64	2.7m×1.03
18125	5	同上	鉄	104	4.3	0.8	0.8	49.45	2.7m×0.88
18131	7	鉄	28	0.8	0.5	2.23	3	126.89	角材
18141	8	鉄	3.2	1.1	0.7	1.28	14	1.36×1.02	直T
18141	9	鉄	35	0.8	0.5	1.14	14	1.36×1.19	直T
18141	10	鉄	24	0.6	0.2	1.16	14	1.36×1.20	角材
18141	11	鉄	13	2.3	0.2	1.96	14	1.36×1.17	角材
18141	12	鉄	60	0.5	0.2	2.28	14	1.36×1.16	角材
18141	13	鉄	19	0.6	0.4	0.75	16	1.36×1.53	角材
18141	14	鉄	3.9	0.7	0.5	1.33	16	1.36×1.28	角材
18141	15	鉄	94	1.9	0.8	50.71	17	1.36×2.27	角材
18141	16	鉄	5.2	1.0	0.8	3.21	17	1.36×1.35	角材
18141	17	鉄	22	0.7	0.5	0.78	17	1.36×1.21	角材
18141	18	鉄	27	1.4	0.4	0.4	16	1.36×1.56	角材
18141	19	鉄	1.8	0.6	0.5	0.65	17	1.36×1.21	角材
18141	20	鉄	46	1.6	0.5	1.52	18	1.36×1.29	角材
22516	104	鉄	3.1	0.5	0.2	1.75	18	1.36×1.48	角材
22516	105	鉄	164	2.7	1.1	10.28	20	1.36×0.9	上段金具
24285	110	鉄	49	1.2	0.8	1.73	20	1.36×2.2	角材
24285	111	鉄	56	1.1	0.8	7.79	20	1.36×0.9	角材
24285	112	鉄	3.2	1.3	0.7	6.13	20	1.36×1.76	角材
24285	113	鉄	7.3	1.5	0.7	11.52	20	1.36×1.77	角材
24285	114	鉄	6.4	1.2	0.2	3.86	20	1.36×1.81	角材
24285	115	鉄	65	0.5	0.2	11.56	20	1.36×1.86	角材
24285	116	鉄	56	0.9	0.2	3.85	20	1.36×1.85	角材
24285	117	鉄	4.3	1.7	0.6	10.63	20	1.36×2.05	鍛造部
24285	118	鉄	4.3	0.6	0.4	2.05	20	1.36×0.65	角材
24285	119	鉄	57	2.0	0.2	10.16	20	1.36×2.05	角材、運行者
24285	120	鉄	44	0.5	0.3	1.18	20	1.36×0.60	角材
24285	121	鉄	4.0	0.7	0.5	1.53	20	1.36×0.60	角材、角材
24285	122	鉄	3.0	0.7	0.4	1.07	20	1.36×0.75	角材
24285	123	鉄	3.7	0.7	0.3	1.20	20	1.36×0.75	角材
24285	124	鉄	16	0.7	0.3	2.25	20	1.36×1.6	角材
24285	125	鉄	24	0.5	0.4	1.01	20	1.36×0.72	軽い角材
24285	126	鉄	4.1	0.6	0.5	1.67	20	1.36×0.85	角材
24285	127	鉄	37	1.1	0.3	1.54	20	1.36×0.85	角材
24285	128	鉄	26	0.6	0.3	0.96	20	1.36×0.70	角材
24285	129	鉄	38	0.7	0.3	0.93	20	1.36×1.13	角材
24285	130	鉄	3.8	0.5	0.2	0.80	20	1.36×0.60	軽い角材
24285	131	鉄	5.3	0.5	0.2	0.55	20	1.36×0.70	角材
24285	132	鉄	85	0.8	0.3	0.51	20	1.36×0.70	角材、軽い角材
24285	133	鉄	2.4	0.6	0.5	1.75	20	1.36×0.75	角材
24285	134	鉄	1.9	0.6	0.3	1.11	20	1.36×0.75	角材
24285	135	鉄	2.7	0.7	0.3	1.20	20	1.36×0.62	軽い角材
24285	136	鉄	4.1	0.7	0.3	0.20	20	1.36×0.62	角材
24285	137	鉄	1.3	0.6	0.2	0.87	20	1.36×0.65	角材
24285	138	鉄	3.4	0.6	0.4	1.04	20	1.36×0.71	角材
24285	139	鉄	3.1	0.6	0.3	1.85	20	1.36×1.15	角材
24285	140	鉄	3.1	0.7	0.4	1.45	20	1.36×1.15	角材
24285	141	鉄	2.8	0.7	0.4	1.14	20	1.36×1.12	角材
24285	142	鉄	1.6	0.6	0.3	0.66	20	1.36×0.53	角材
24285	143	鉄	2.4	0.5	0.4	0.53	20	1.36×0.51	角材
24285	144	鉄	2.8	0.6	0.2	0.67	20	1.36×0.62	角材
24285	145	鉄	2.9	0.8	0.3	1.50	20	1.36×0.65	角材
24285	146	鉄	2.9	0.5	0.3	0.92	20	1.36×0.54	角材
24285	147	鉄	2.9	0.8	0.3	1.46	20	1.36×0.65	角材
24285	148	鉄	2.5	0.6	0.3	0.95	20	1.36×0.62	軽い角材
24285	149	鉄	2.5	0.8	0.3	0.66	20	1.36×0.62	角材
24285	150	鉄	2.4	0.6	0.3	0.65	20	1.36×0.62	角材
24285	151	鉄	2.8	0.8	0.6	1.87	20	1.36×0.62	角材
24285	152	鉄	2.4	0.6	0.2	1.03	20	1.36×0.72	角材
24285	153	鉄	2.4	0.6	0.2	1.03	20	1.36×0.72	角材
24285	154	鉄	2.3	0.4	0.2	0.71	20	1.36×0.58	角材
24285	155	鉄	1.8	0.4	0.4	0.35	20	1.36×0.62	角材
24285	156	鉄	2.4	0.4	0.2	0.40	20	1.36×0.62	角材
24285	157	鉄	2.2	0.5	0.4	0.73	20	1.36×0.61	角材
24285	158	鉄	3.7	0.6	0.4	1.15	20	1.36×0.64	角材
24285	159	鉄	5.5	0.9	0.3	0.66	20	1.36×0.62	角材
24285	160	鉄	1.6	0.6	0.3	0.66	20	1.36×0.63	角材
24285	161	鉄	1.6	0.5	0.3	0.53	20	1.36×0.63	角材
24285	162	鉄	2.8	1.4	0.6	2.78	20	1.36×0.60	角材
24285	163	鉄	3.1	0.5	0.3	0.47	20	1.36×0.68	角材
24285	164	鉄	4.5	1.0	0.5	4.51	20	1.36×0.60	角材
24285	165	鉄	3.2	1.1	0.5	3.42	20	1.36×0.63	角材
24285	166	鉄	3.6	0.7	0.5	2.0	20	1.36×0.62	角材
24285	167	鉄	4.5	0.9	0.5	3.42	20	1.36×0.62	角材
24285	168	鉄	2.7	2.1	0.5	2.82	20	1.36×0.53	板状
25394	173	鉄	29	0.5	0.2	0.87	14		
25394	174	鉄	1.3	0.5	0.5	3.97	14	1.36×1.08	角材
25394	175	鉄	39	0.9	0.8	5.52	14	1.36×1.07	角材
25394	176	鉄	5.4	0.4	0.5	8.6	14	1.36×0.88	板状
26464	178	鉄	3.0	2.2	2.0	10.00	14	1.36×0.75	色黄明期、無付、静止部を含む
25265	185	漆	32	3.1	3.2	20.00	14	1.36×0.75	角材
25265	186	漆	1.9	0.5	0.4	1.45	14	1.36×0.52	角材
25265	187	漆	1.5	1.1	0.8	2.49	14	1.36×0.52	角材
25265	188	漆	2.3	2.0	1.1	7.03	14	1.36×1.11	漆G
25265	189	漆	2.1	0.9	0.5	1.42	14	D3	
25394	195	鉄	6.2	1.3	0.5	10.65	14	1.36×0.53	角材
25394	196	鉄	6.1	0.7	0.5	6.49	14	1.36×0.53	角材
25394	197	鉄	24	2.5	0.2	1.15	14	1.36×0.63	木造復元
25394	198	鉄	25	0.2	0.2	2.78	14	1.36×0.63	木造復元
26211	201	鉄	安田山	16.4	1.4	1.63	14	1.36×0.69	色黄明期、山形17点、内蔵墨色を含む
26211	202	鉄	24	2.5	0.2	1.83	14	1.36×1.43	「宝光殿」
26211	203	鉄	19	0.8	0.2	3.10	14		
26211	213	鉄	4.30	0.8	0.8	4.29	14		



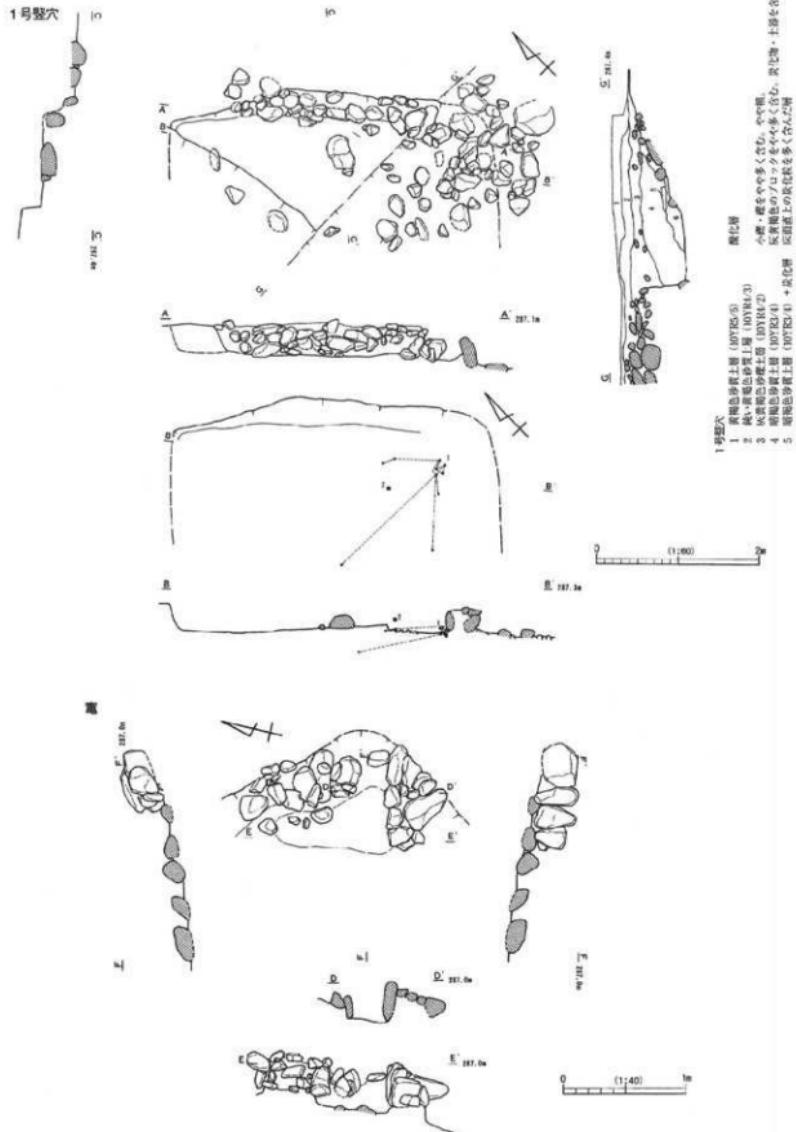
第1図 調査区と試掘坑

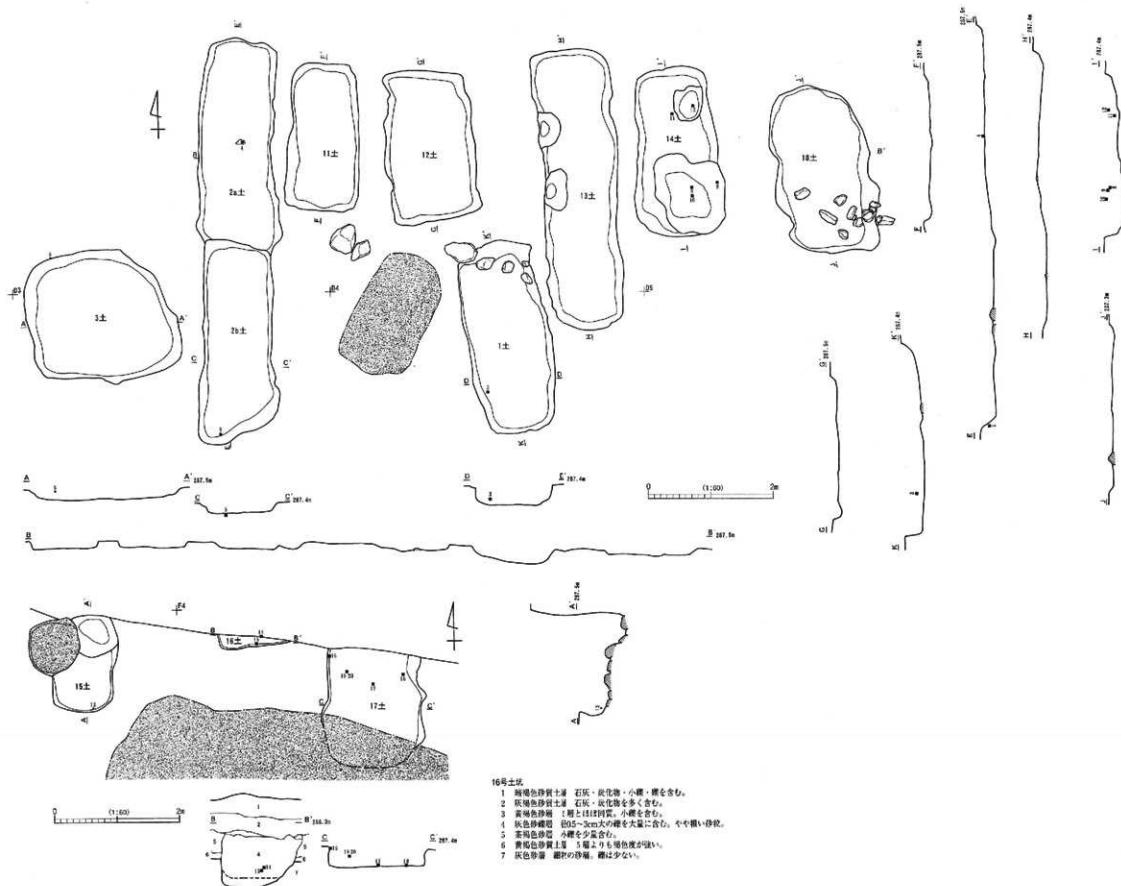


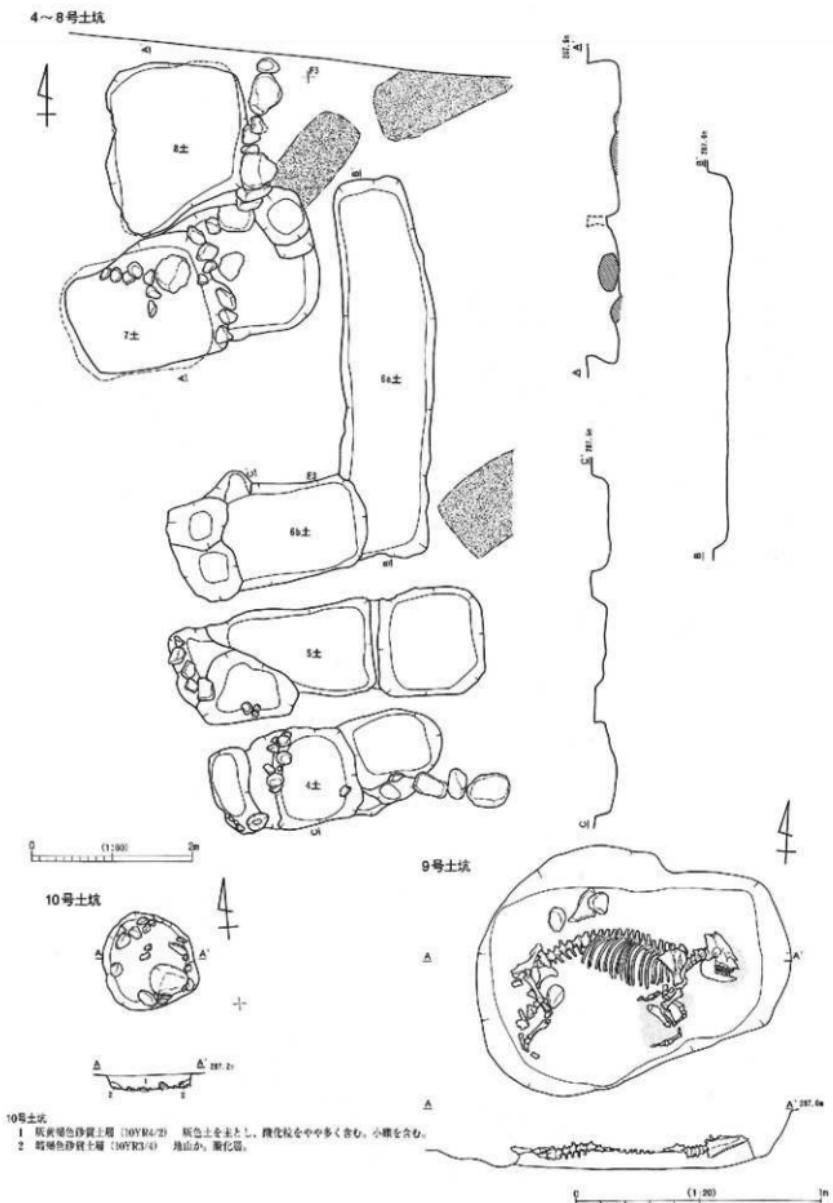
第2図 全体図・南壁断面図



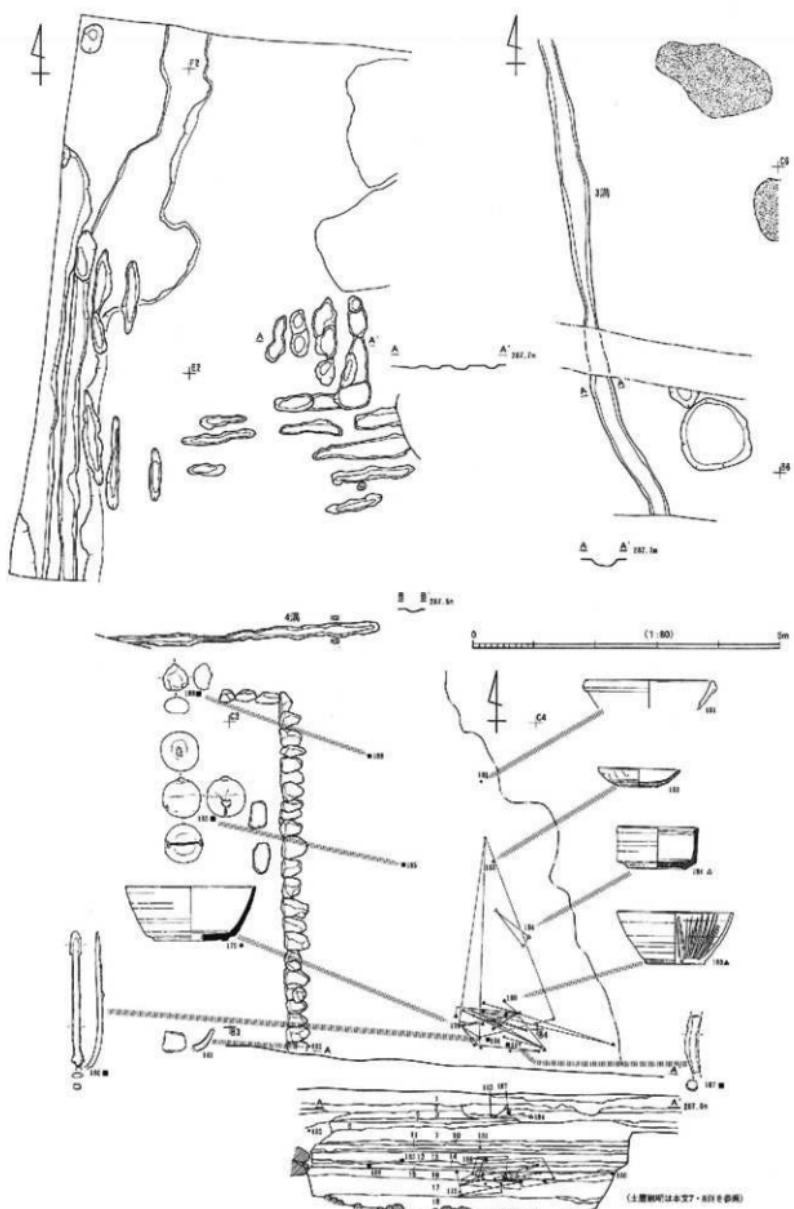
第3図 遺物出土状況



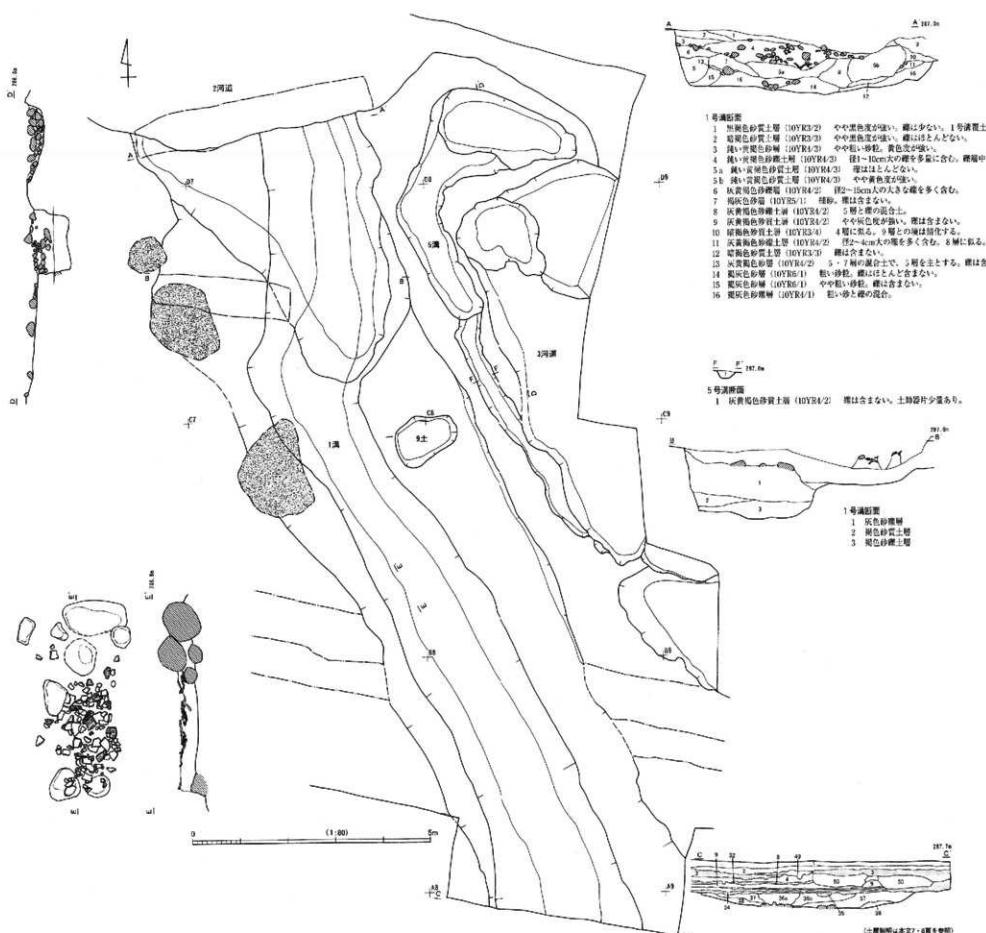




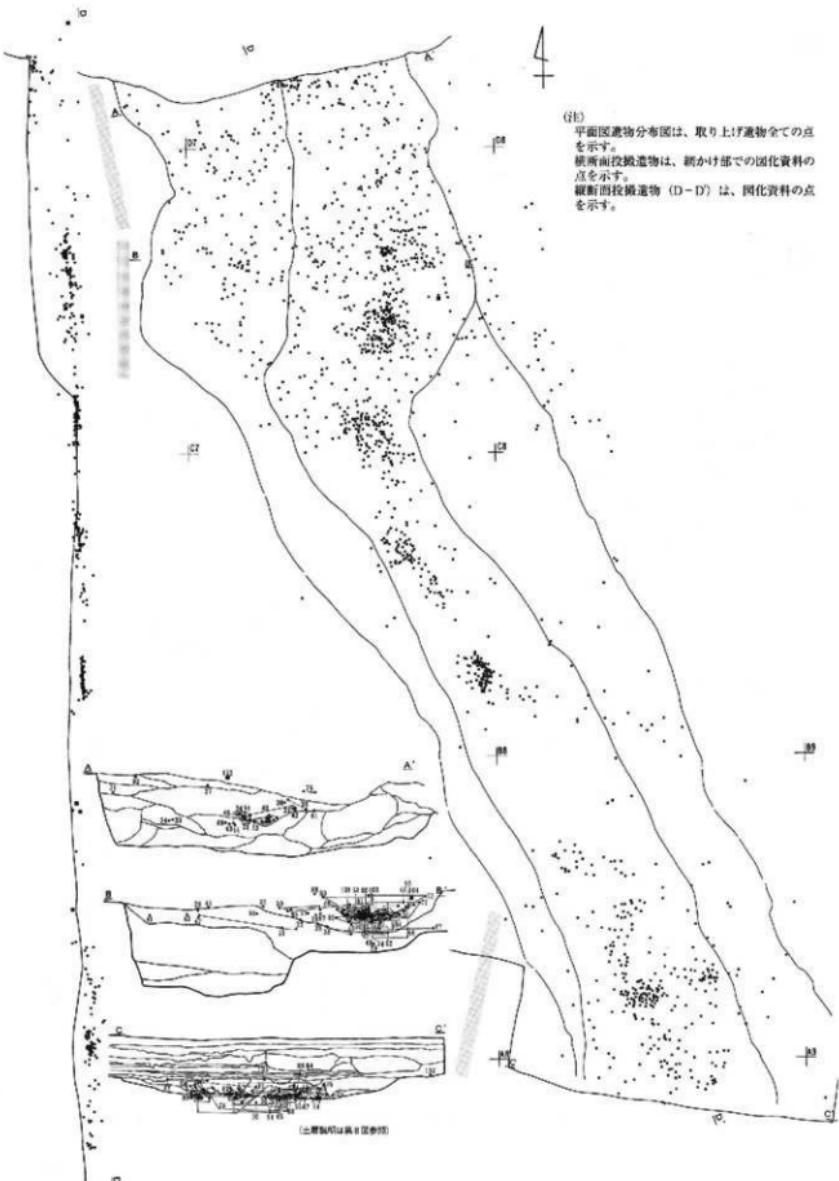
第6図 4~10号土坑 遺構



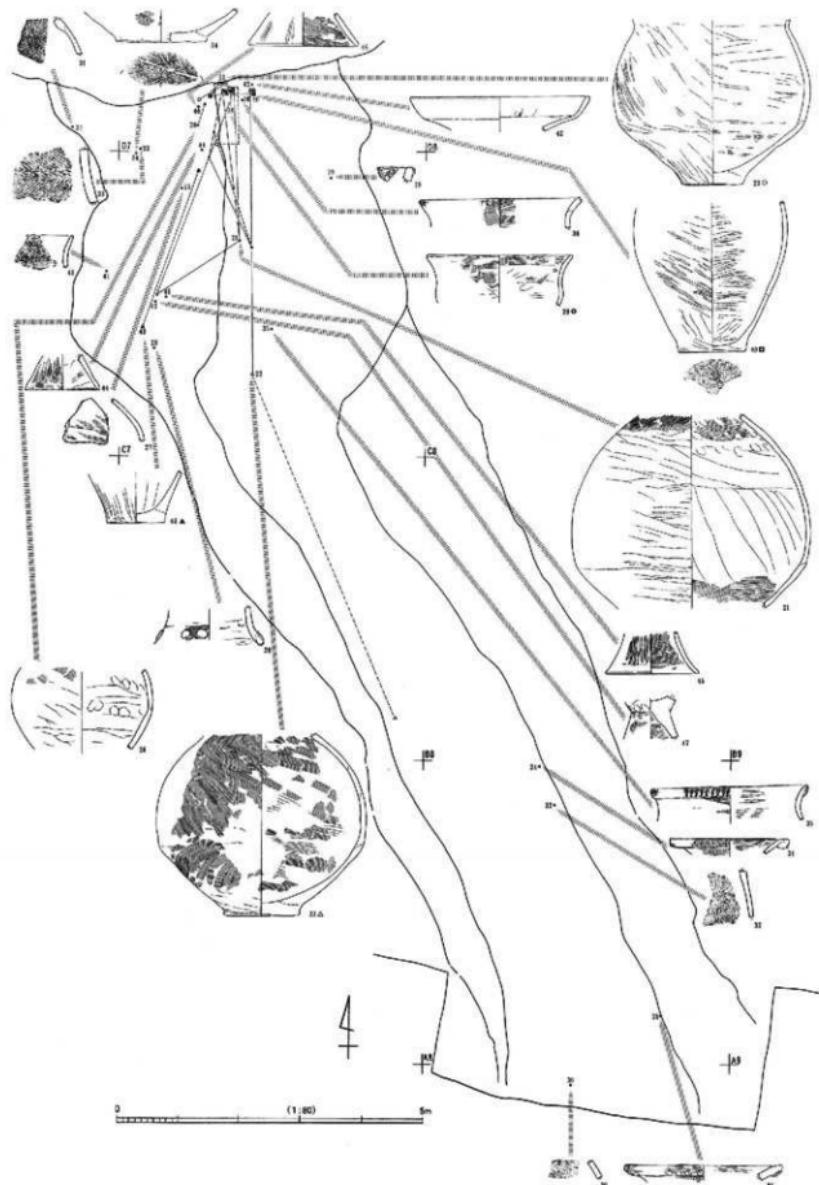
第7図 故状遺構、3・4号溝、埋没谷 遺物出土状況



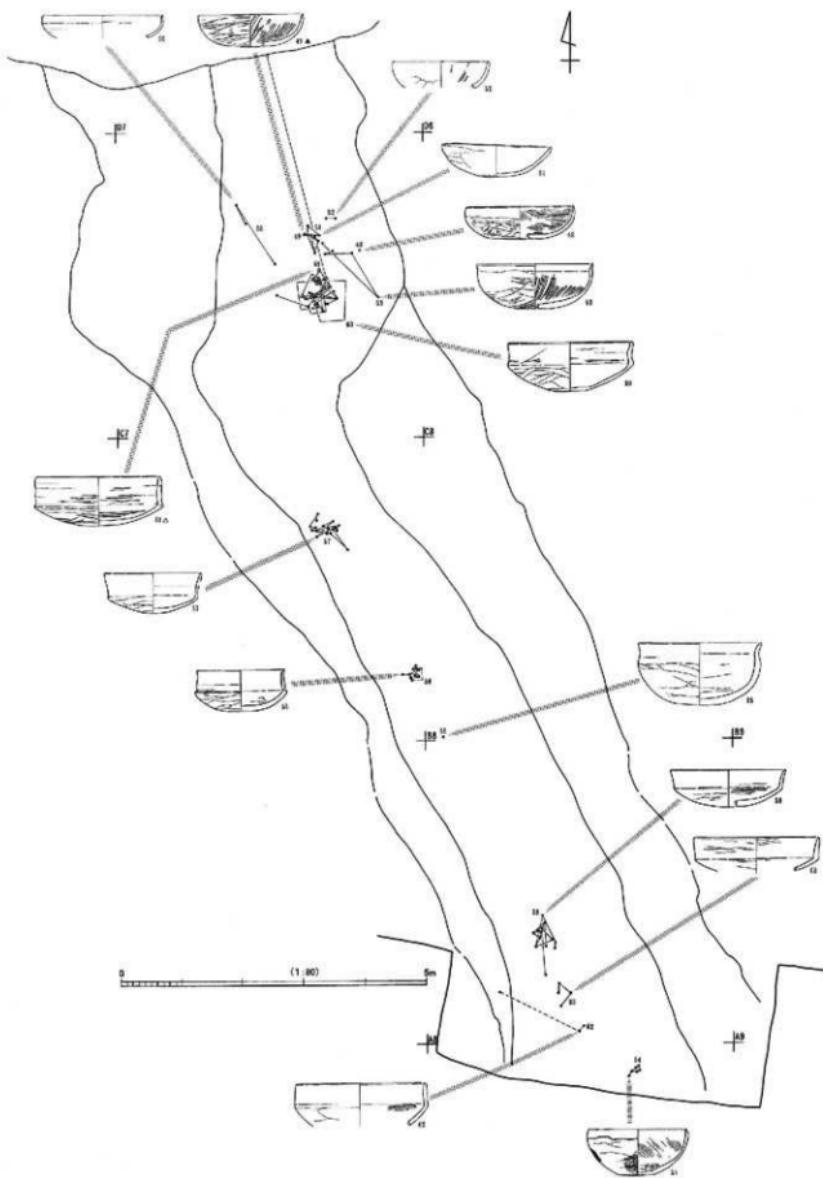
第8図 1・5号溝、2・3号河道、9号土坑 遺構



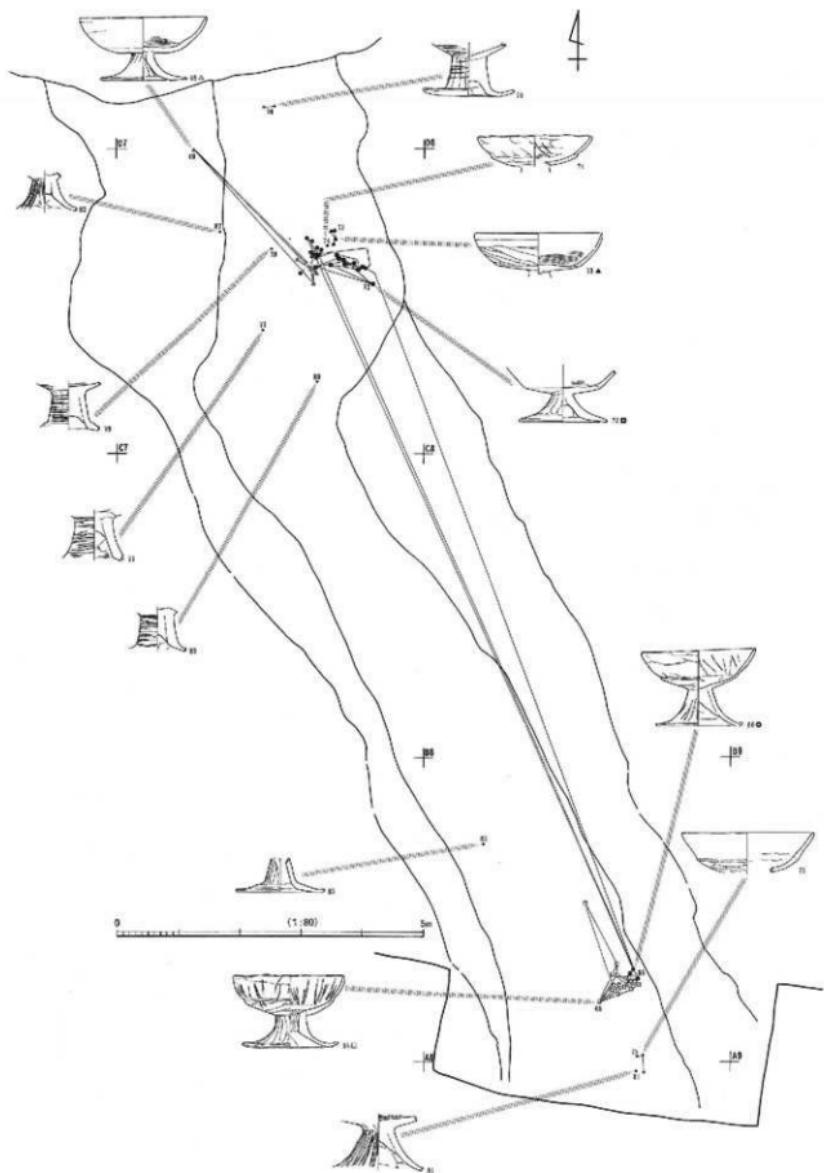
第9図 1号溝 遺物出土状況



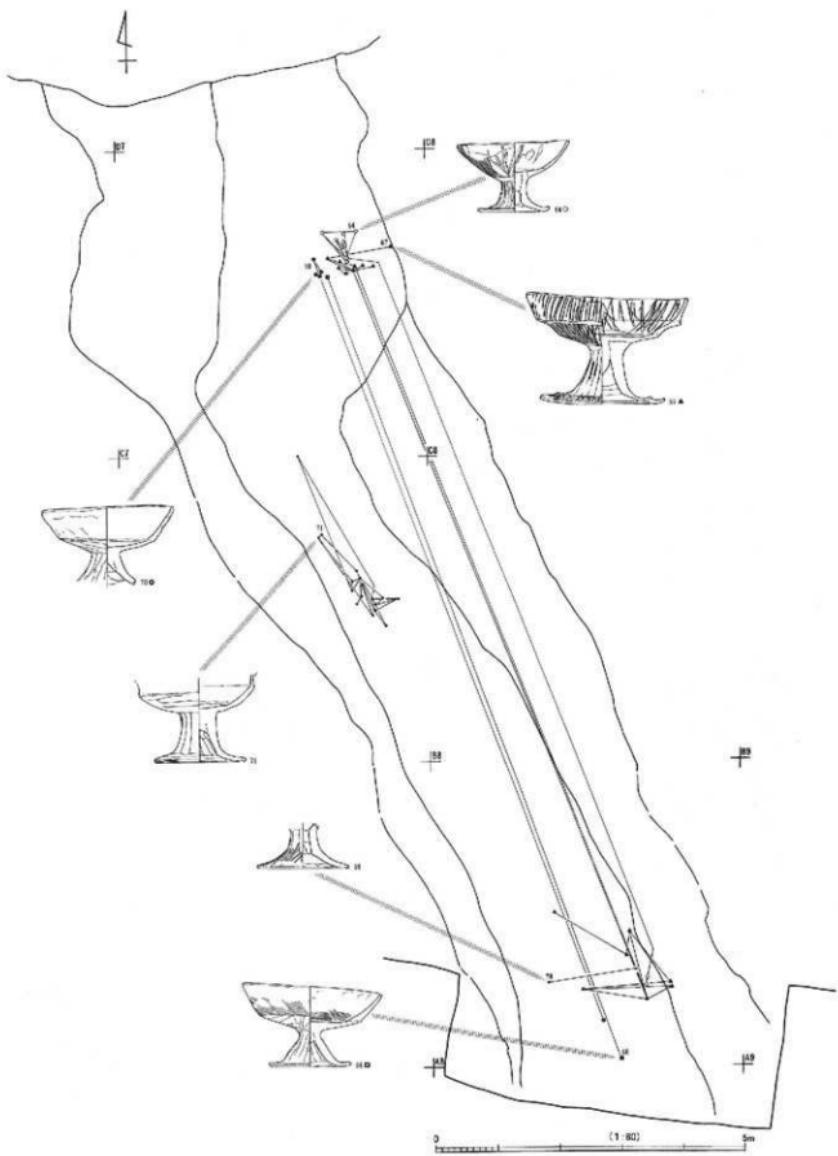
第10図 1号溝 遺物接合図(1) 弥生後期



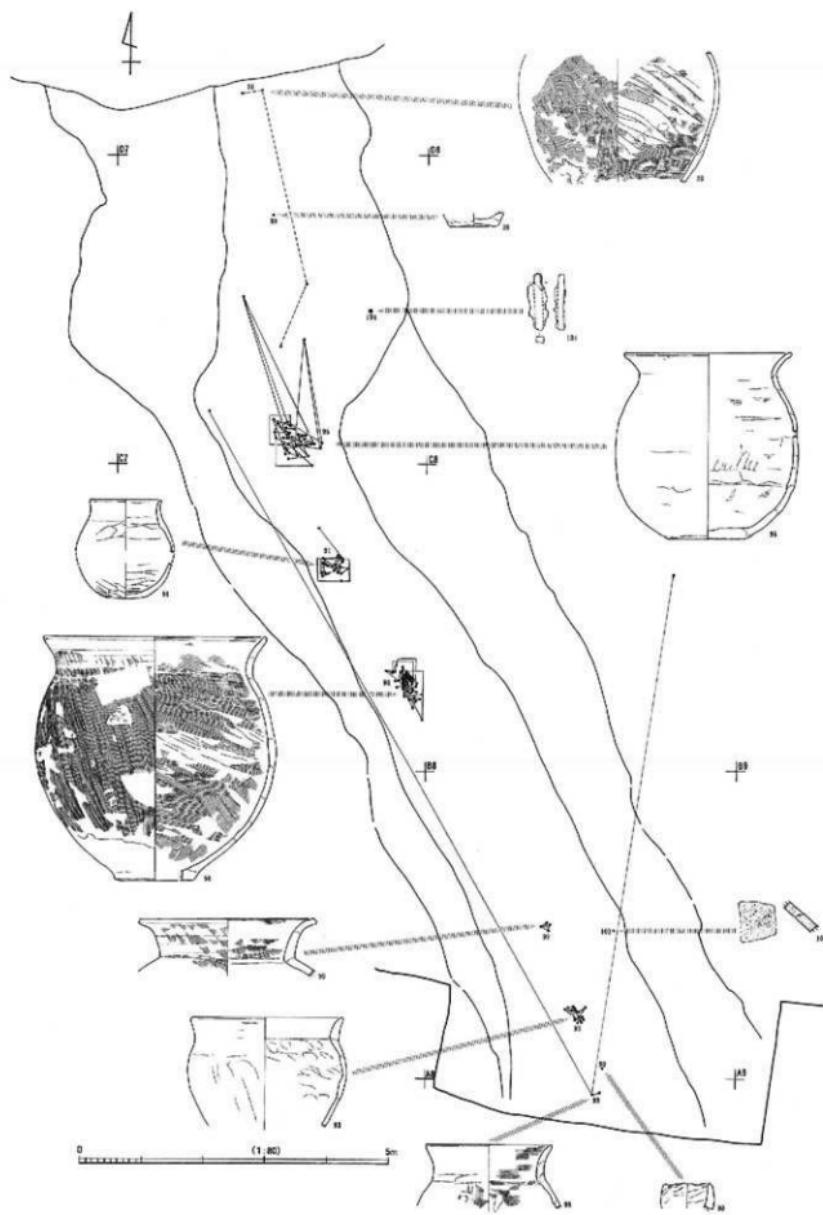
第11図 1号溝 遺物接合図(2) 环類



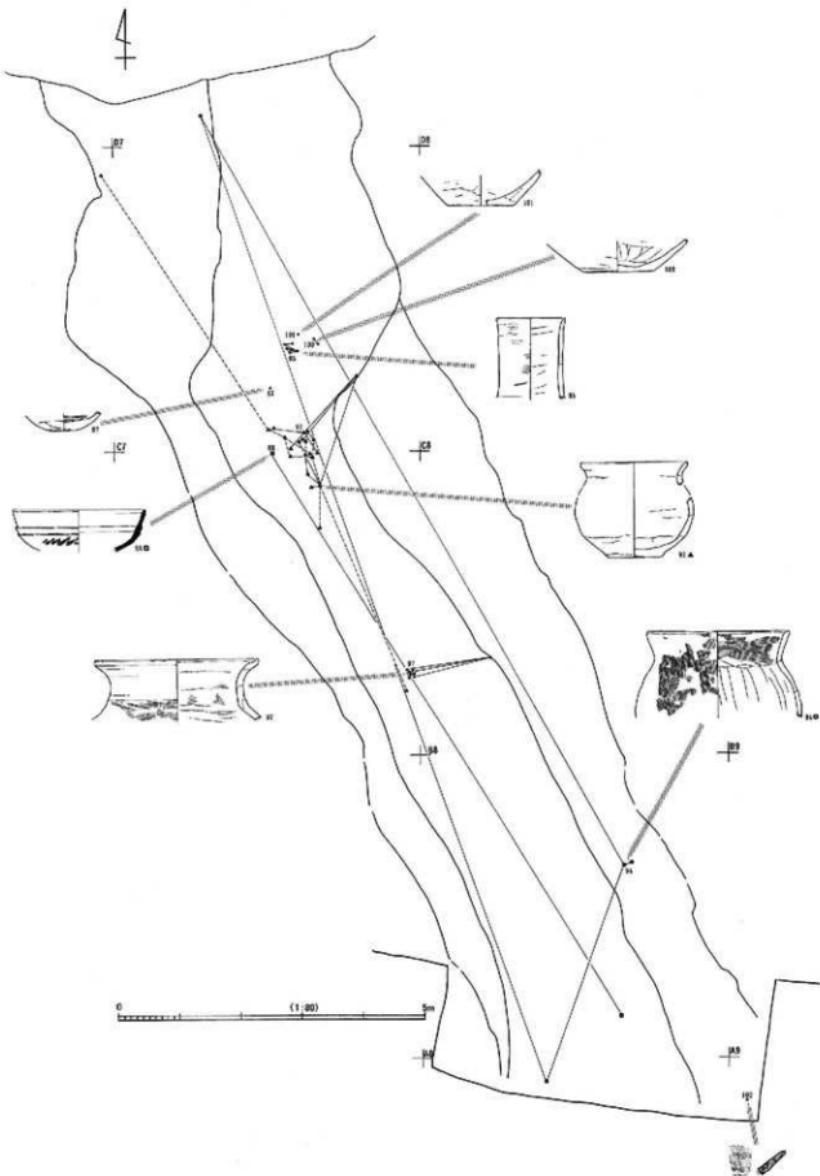
第12圖 1号溝 遺物接合図(3) 高坏



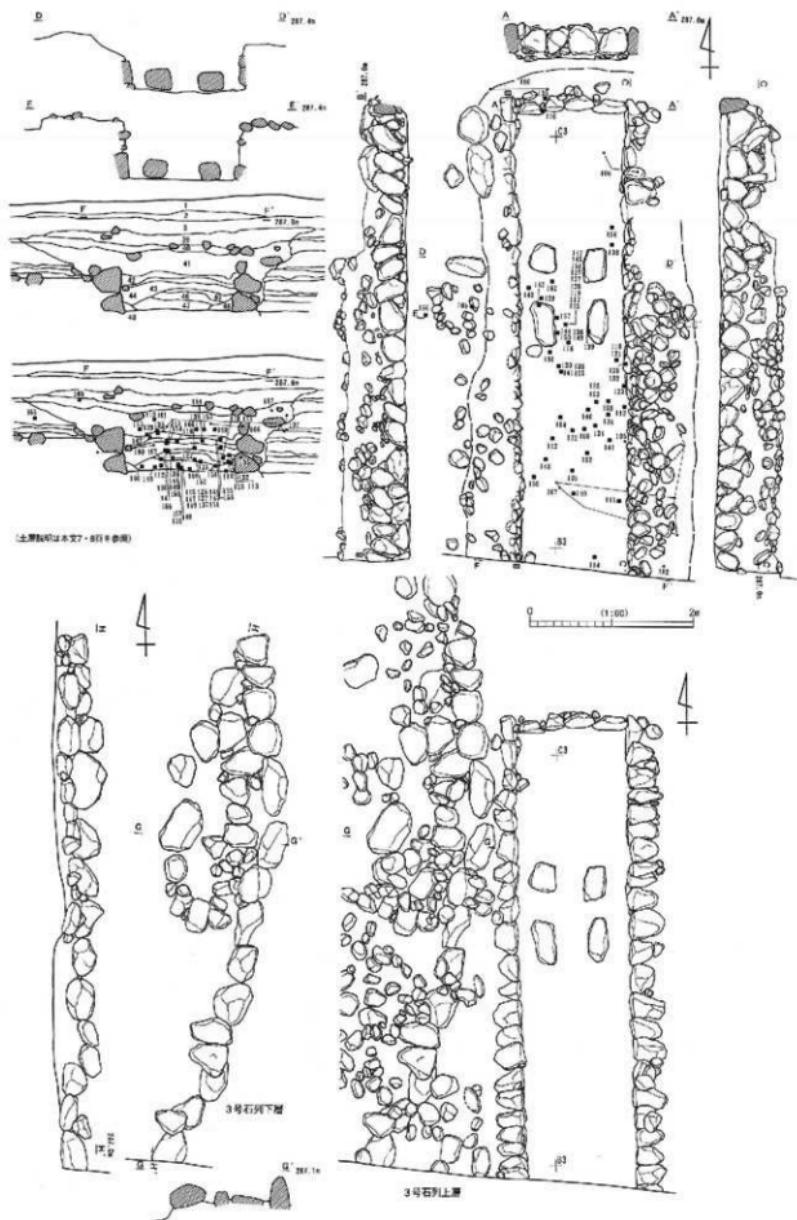
第13図 1号溝 遺物接合図 (4) 高環



第14図 1号溝 遺物接合図 (5) 壺類



第15図 1号溝 遺物接合図 (6) 壺類ほか

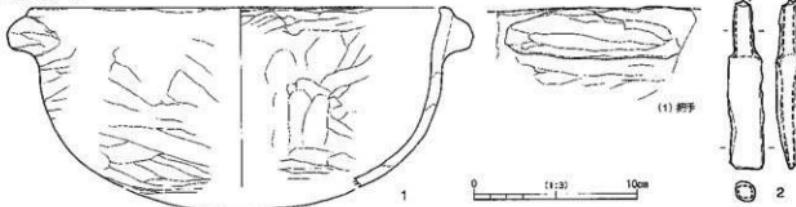


第16図 2号溝 造構・遺物出土状況、3号石列 造構

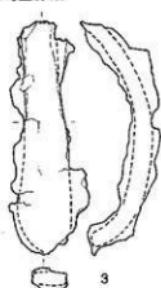


第17図 1・2号石列と土坑群

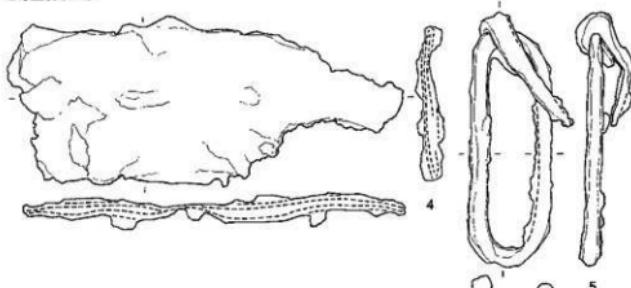
1号竖穴(1~2)



1号土坑(3)



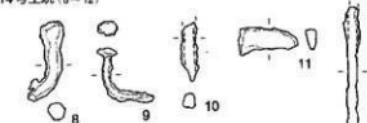
2号土坑(4~5)



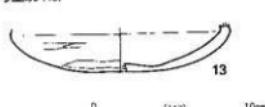
3号土坑(6~7)



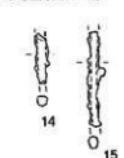
14号土坑(8~12)



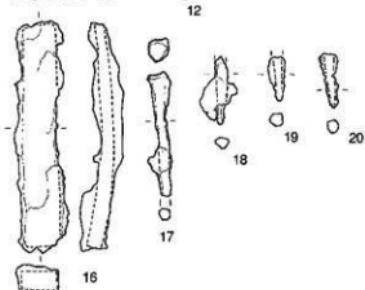
15号土坑(13)



16号土坑(14~15)



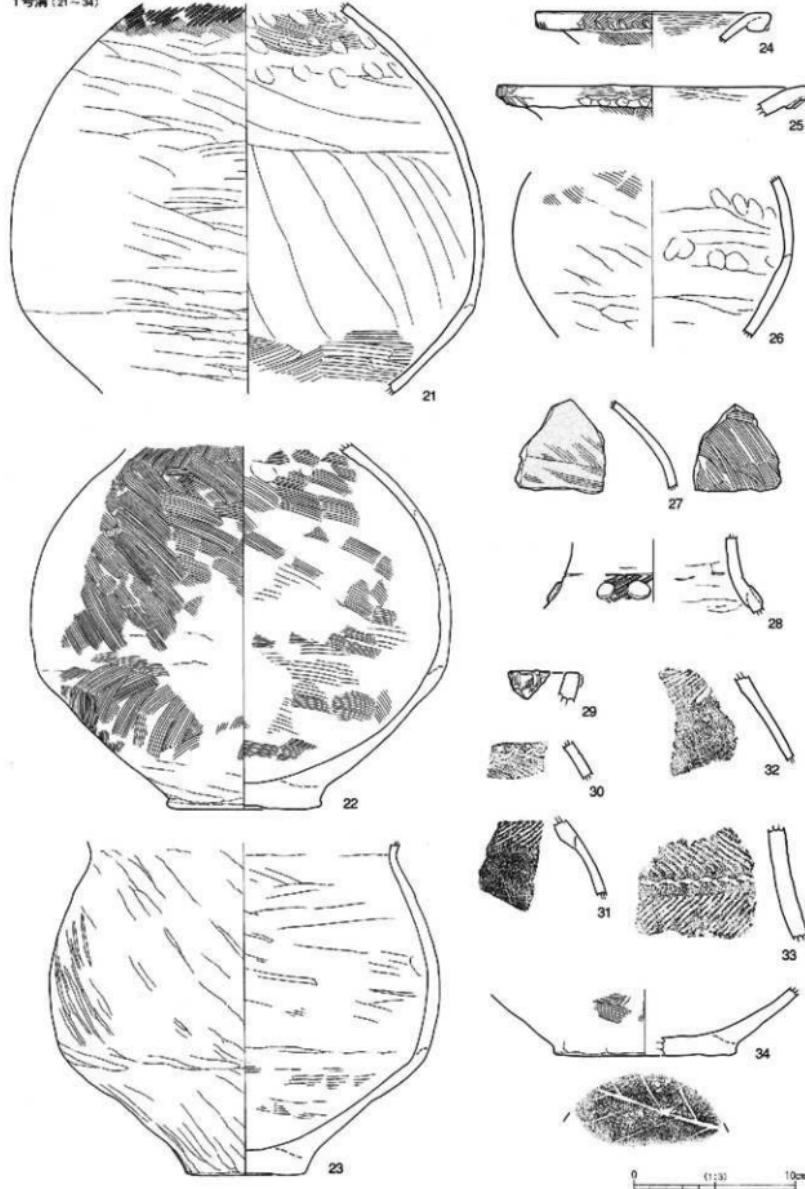
17号土坑(16~20)



0 (1:2) 5cm

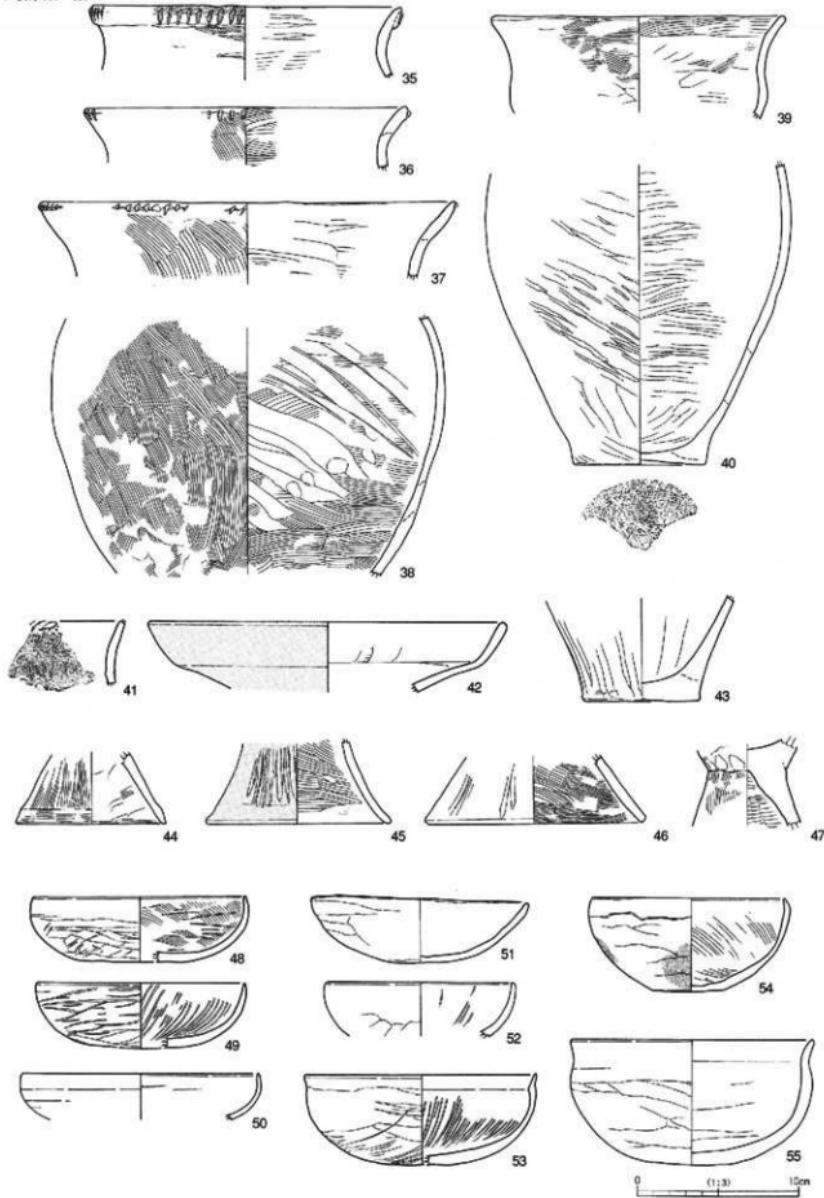
第18图 1号竖穴、1~3·14~17号土坑 遗物

1号溝 (21~34)



第19図 1号溝 遺物

1号溝 (35-55)



第20図 1号溝 遺物

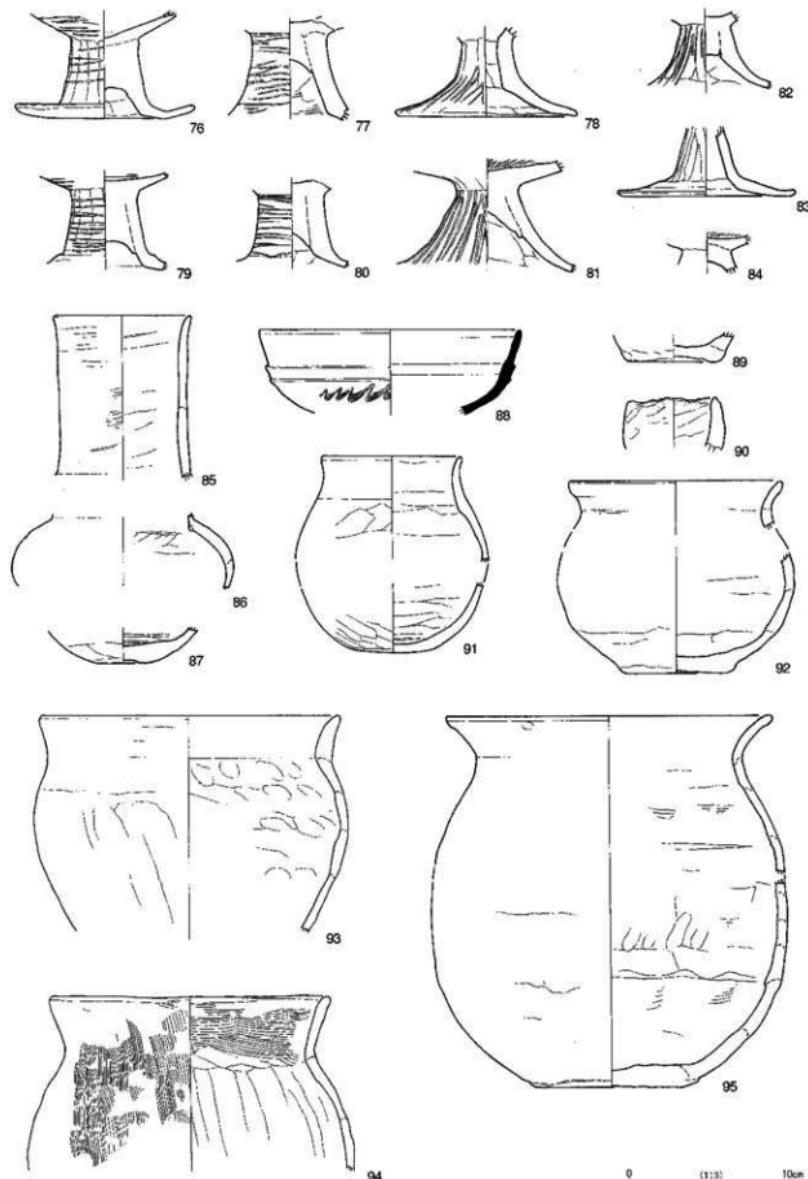
1号溝 (56~75)



第21図 1号溝 遺物

0 (1:3) 10cm

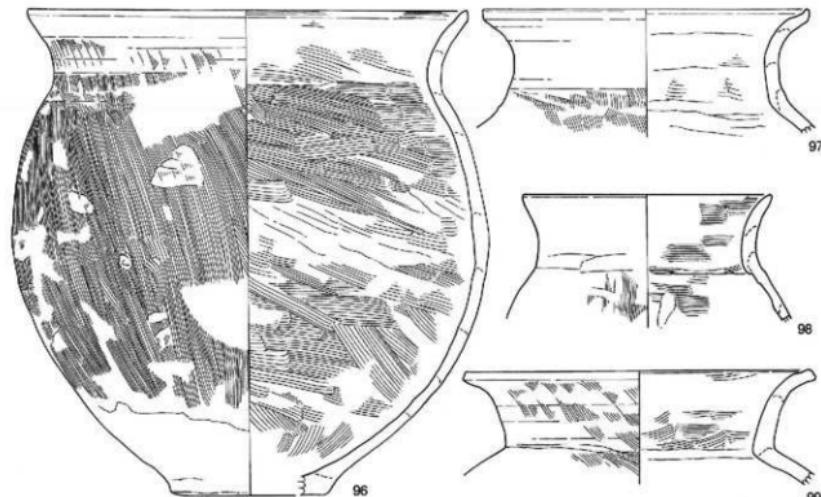
1号溝(76-95)



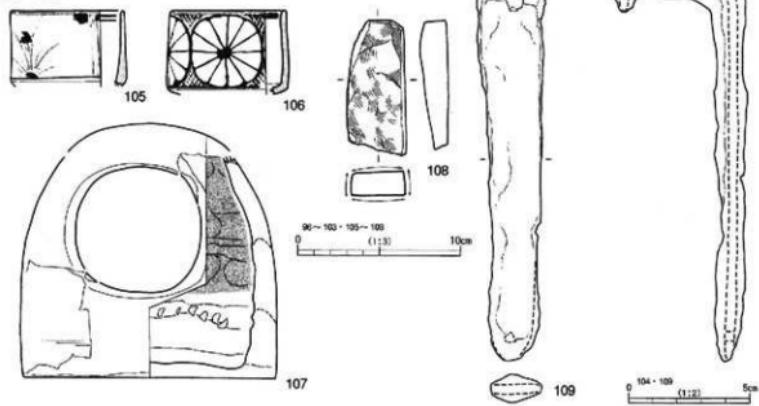
第22図 1号溝 遺物

0 (1:1) 10cm

1号溝 (96~104)

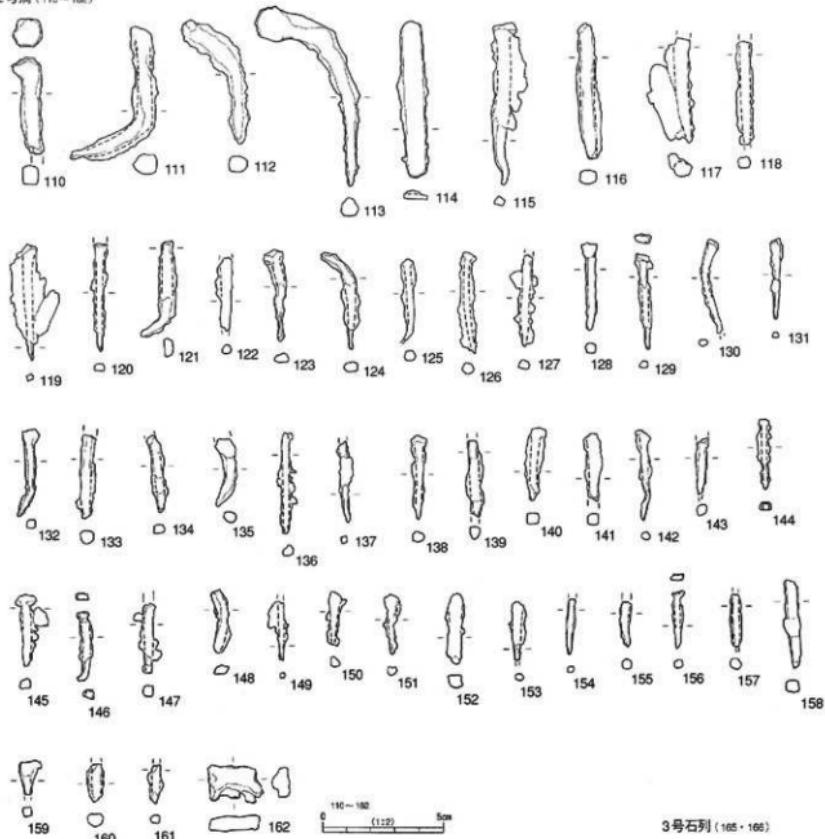


2号溝 (105~109)

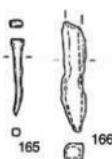


第23図 1・2号溝 遺物

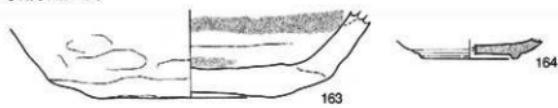
2号溝 (110~162)



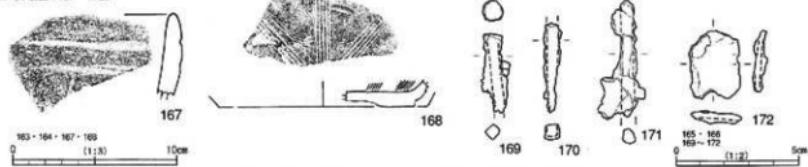
3号石列 (165~166)



1号石列 (163~164)

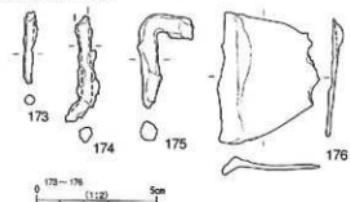


2号河道 (167~172)

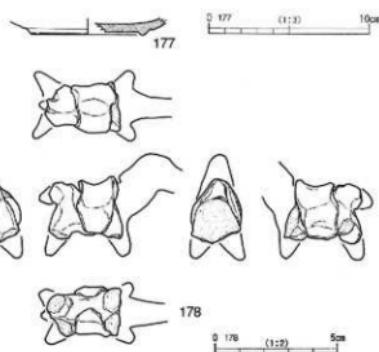


第24図 2号溝、1・3号石列、2号河道 遺物

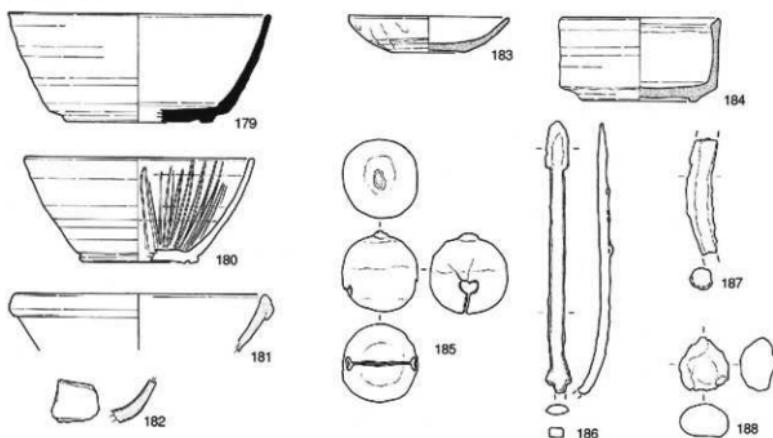
3号河道 (173~176)



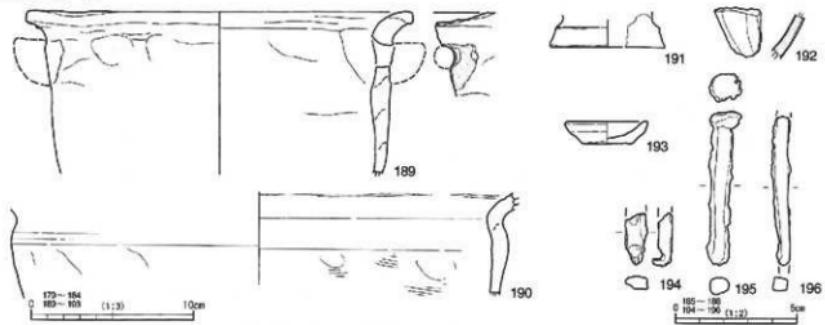
4号河道 (177~178)



埋没谷 (179~188)

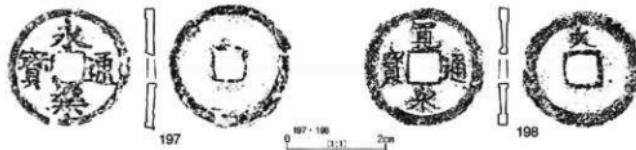


遺構外 (189~196)

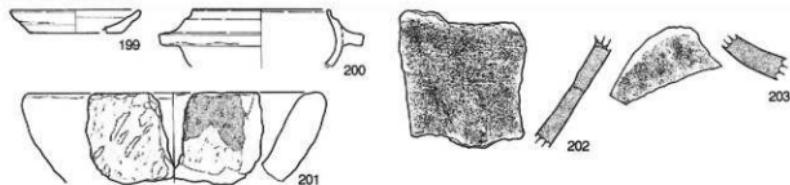


第25図 3・4号河道、埋没谷、遺構外 遺物

遺構外 (197・198)



2号トレンチ (199～203)



3号トレンチ (204)



4-1号トレンチ (205)



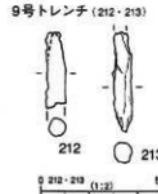
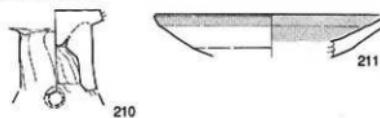
4-2号トレンチ (206)



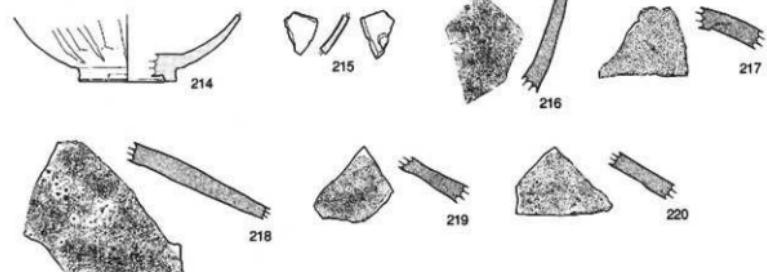
5号トレンチ (207～209)



7号トレンチ (210・211)



12号トレンチ (214～220)



199～204
205～211・214～220
(1:3) 10cm

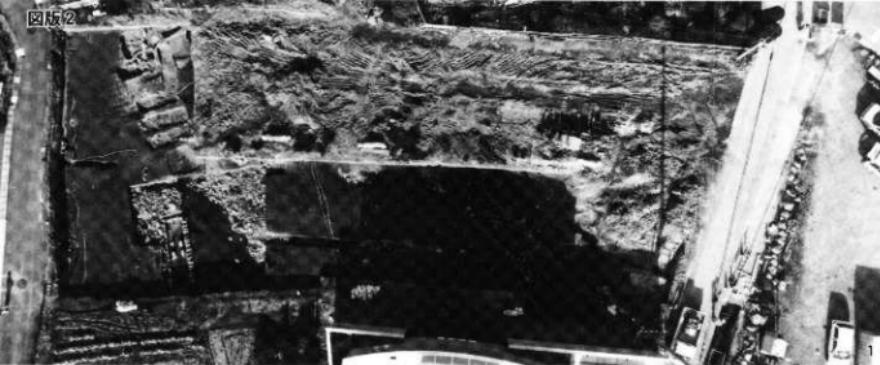
第26図 遺構外、試掘坑（2～5・7・9・12号トレンチ） 遺物

1 : 調査区
1回目空撮
(東より)



2 : 調査区
1回目空撮
(西より)





1 : 調査区
1回目空撮
(真上より)



2 : 調査区
2回目空撮
(真上より)



3 : 調査区
2回目空撮
(南より)

1 : 調査区
2回目空撮
(南西より)



2 : 調査区
2回目空撮
(西より)





1 ~ 9 : 1号竪穴

1・6: 遺物出土状況

2: 調査風景

3: 発掘状況

4: 北壁石積状況 (上より)

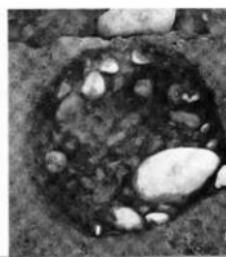
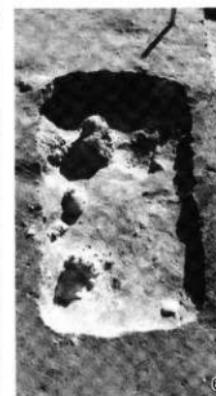
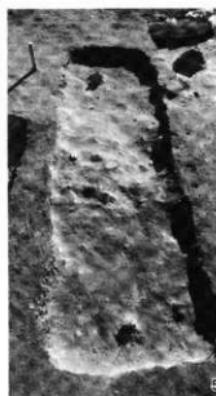
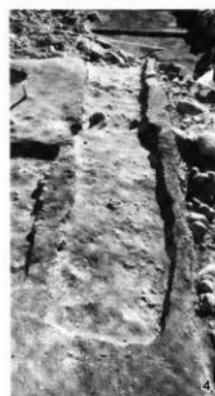
5: 同 (南より)

7~9: コーナーカマドの石積み



1~10 : 土坑

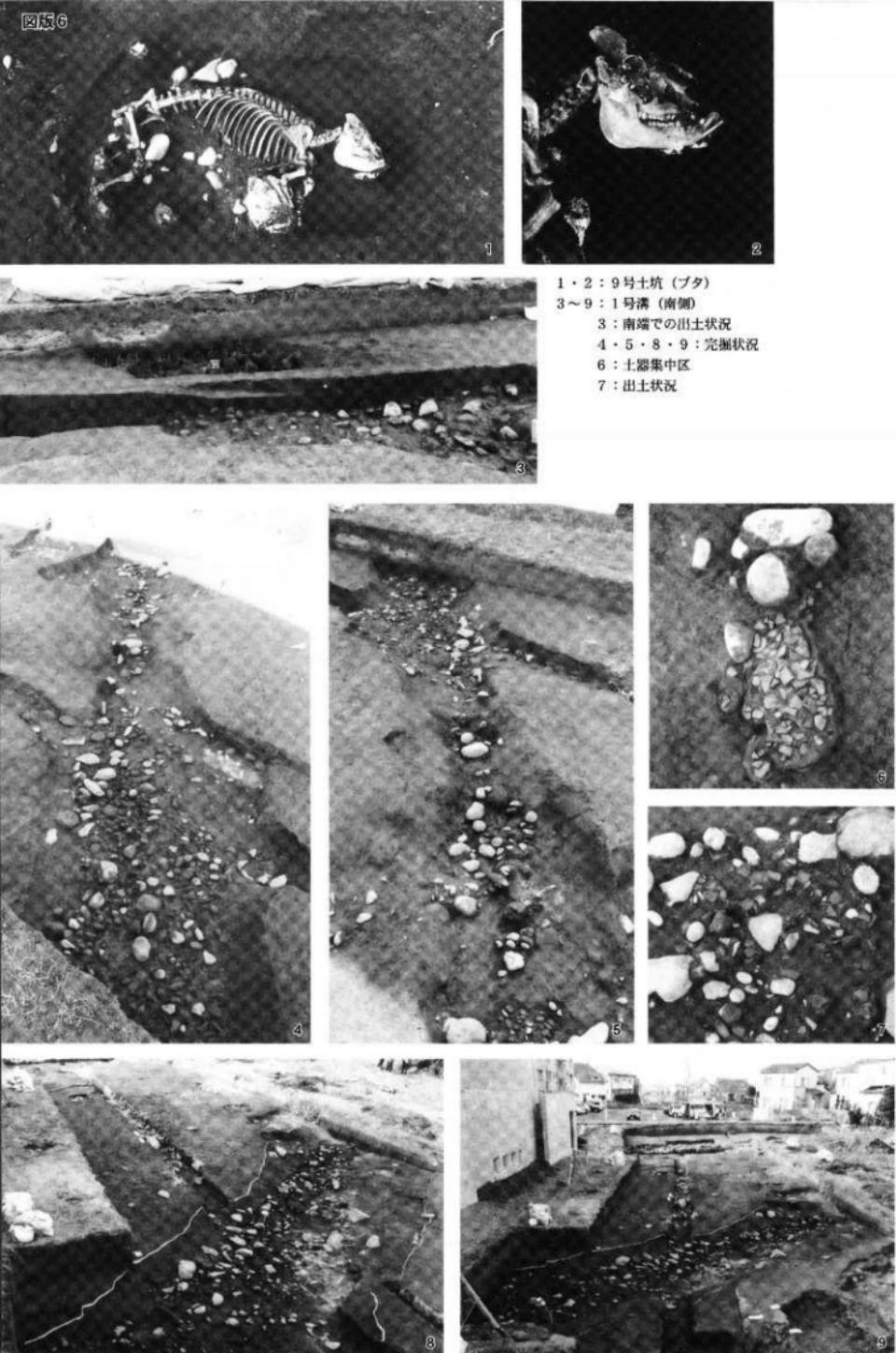
- 1 : 3~8号土坑
- 2 : 3 : 1・2・11~14・18号土坑
- 4 : 2a・2b号土坑
- 5 : 13号土坑
- 6 : 14号土坑
- 7 : 18号土坑
- 8 : 11・12号土坑
- 9 : 10号土坑
- 10 : 15号土坑



8

9

10



1・2：9号土坑（ブタ）

3～9：1号溝（南側）

3：南端での出土状況

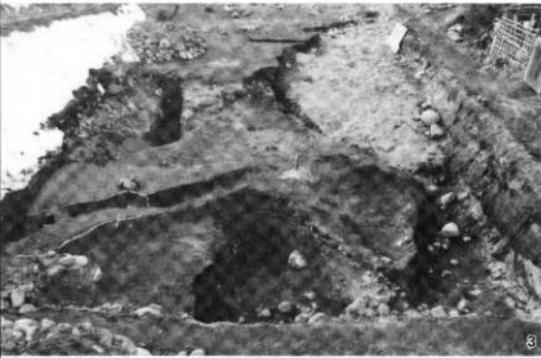
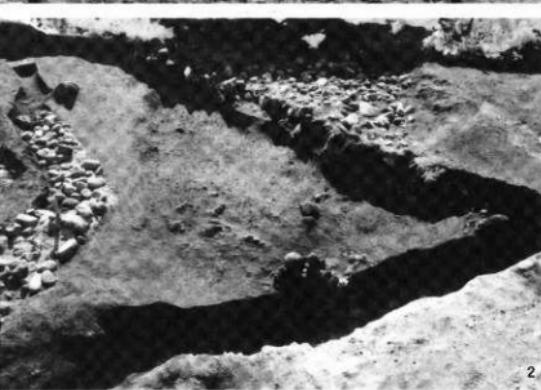
4・5・8・9：完掘状況

6：土器集中区

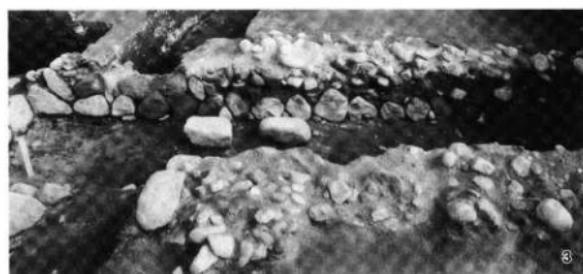
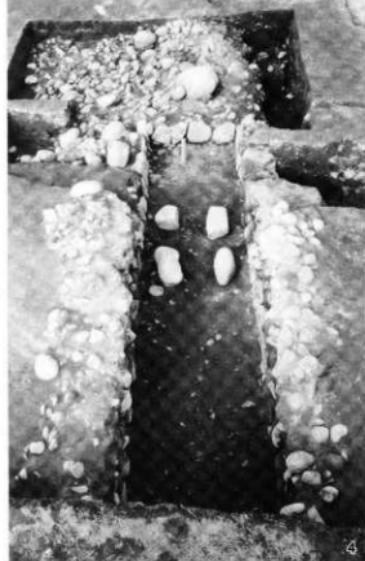
7：出土状況



1～8：1号溝 遺物出土状況（北側）



1～7：1号溝 下層
1・4：下層断面状況（北より）
2・5～7：遺物出土状況
3：1号溝、下層。5号溝、2・3号河道 完掘状況
8・9：2号溝 検出状況



1～8：2号溝

1：調査風景

2：西側石積状況

3：東側石積状況

4：完掘状況（南より）

5：同（北より）

6：2号溝石積及び3号石列

7：溝内堆積状況（南壁断面）

8：溝内北側石積状況



1~4 : 1・2号石列
5・6 : 3号石列
5 : 石列上層 (南より)
6 : 石列状況 (北より)





1：敵状道標（南より）

2～4：埋没谷

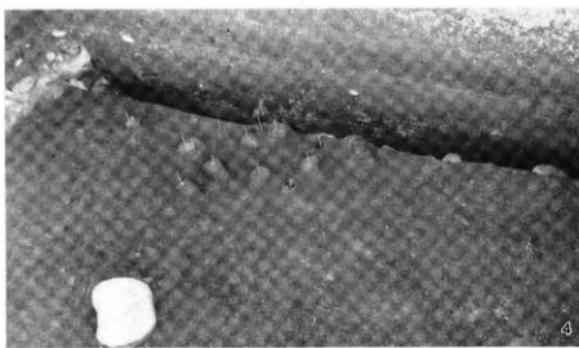
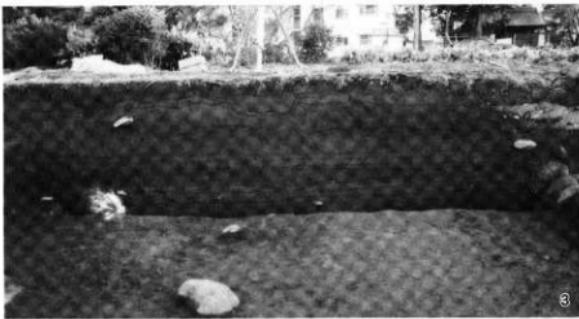
3：堆積状況（南壁断面）

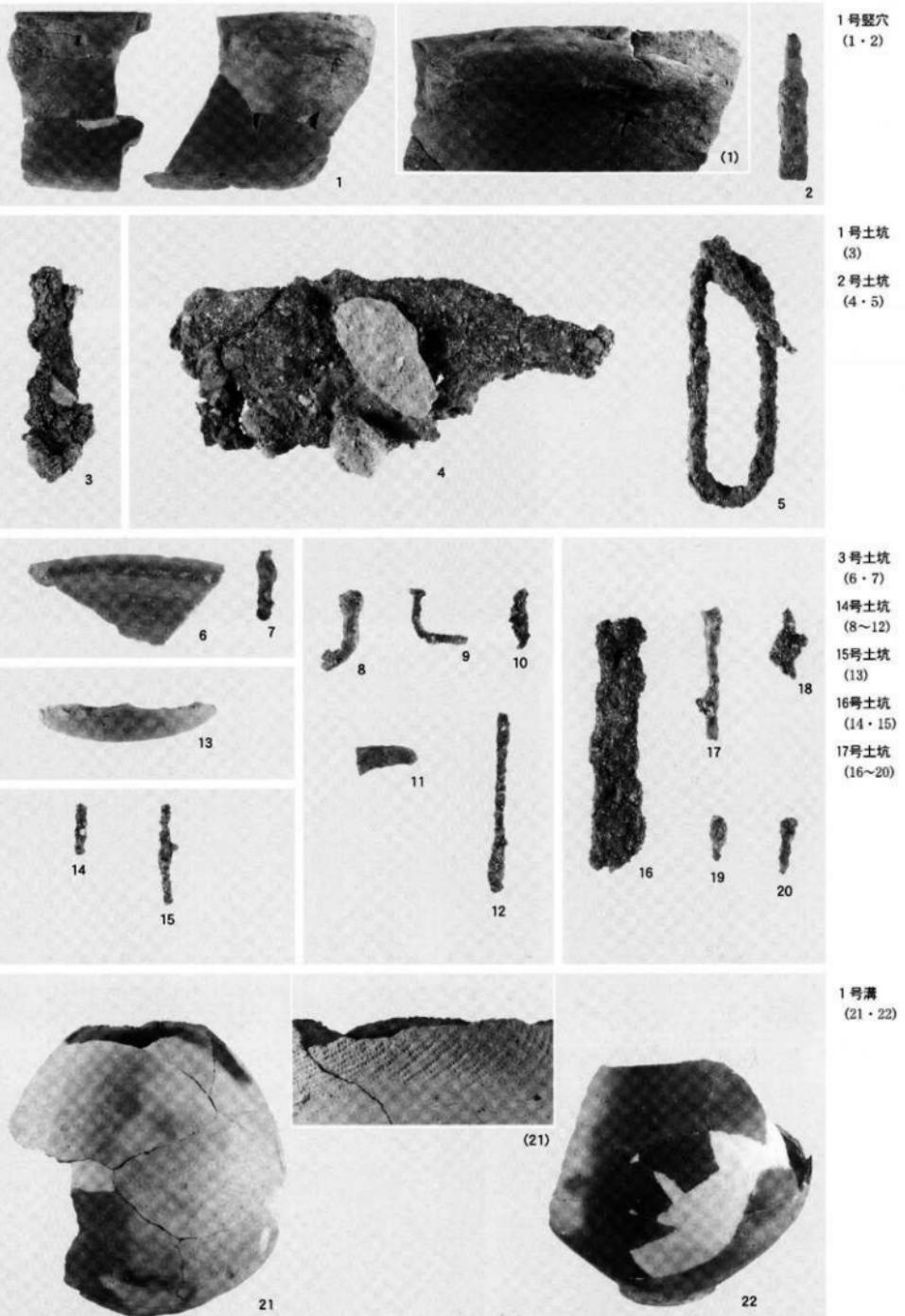
4：遺物出土状況（北より）

5：深訪神社 本殿周囲の石垣

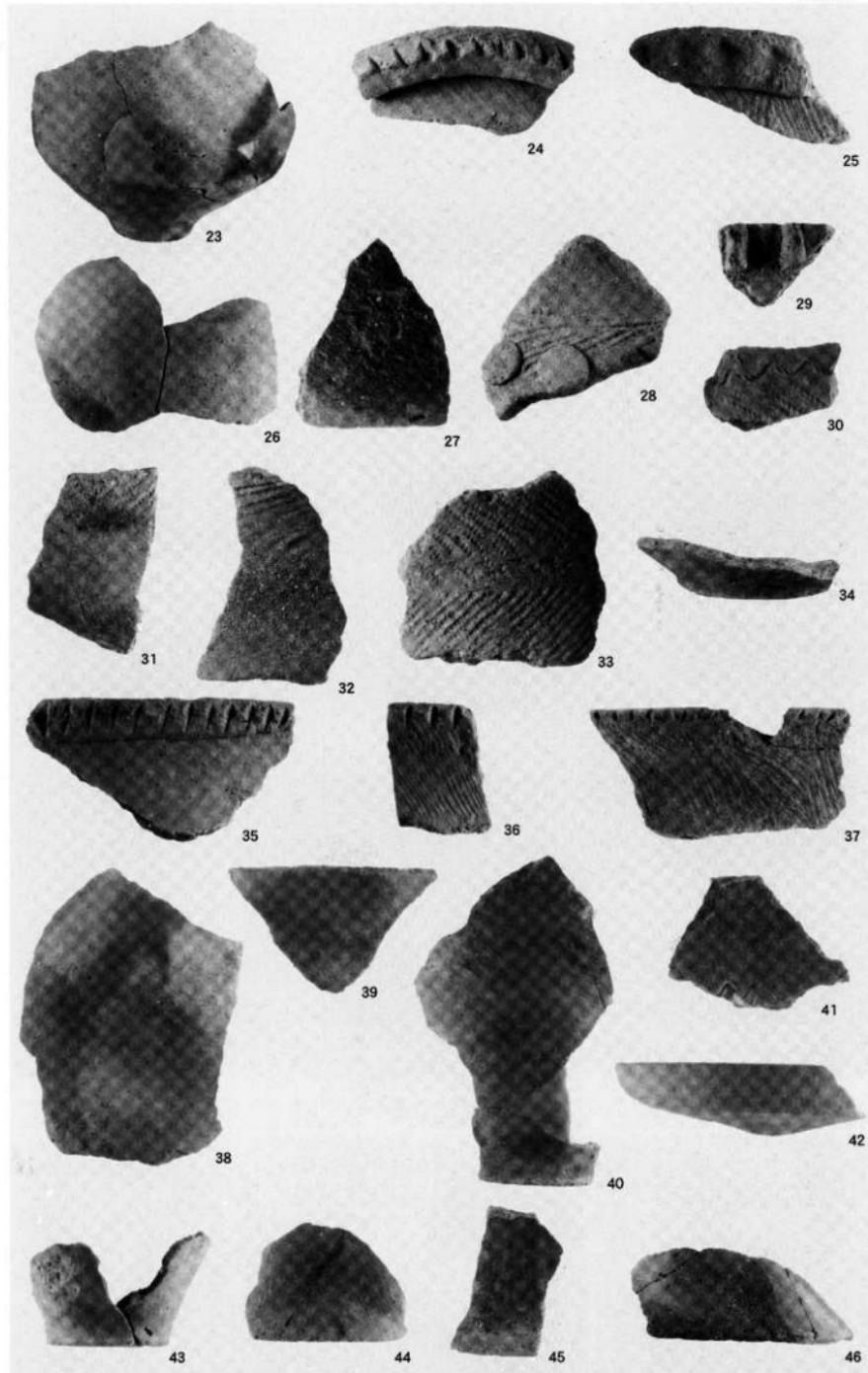
6：1・2号石列付近 調査風景

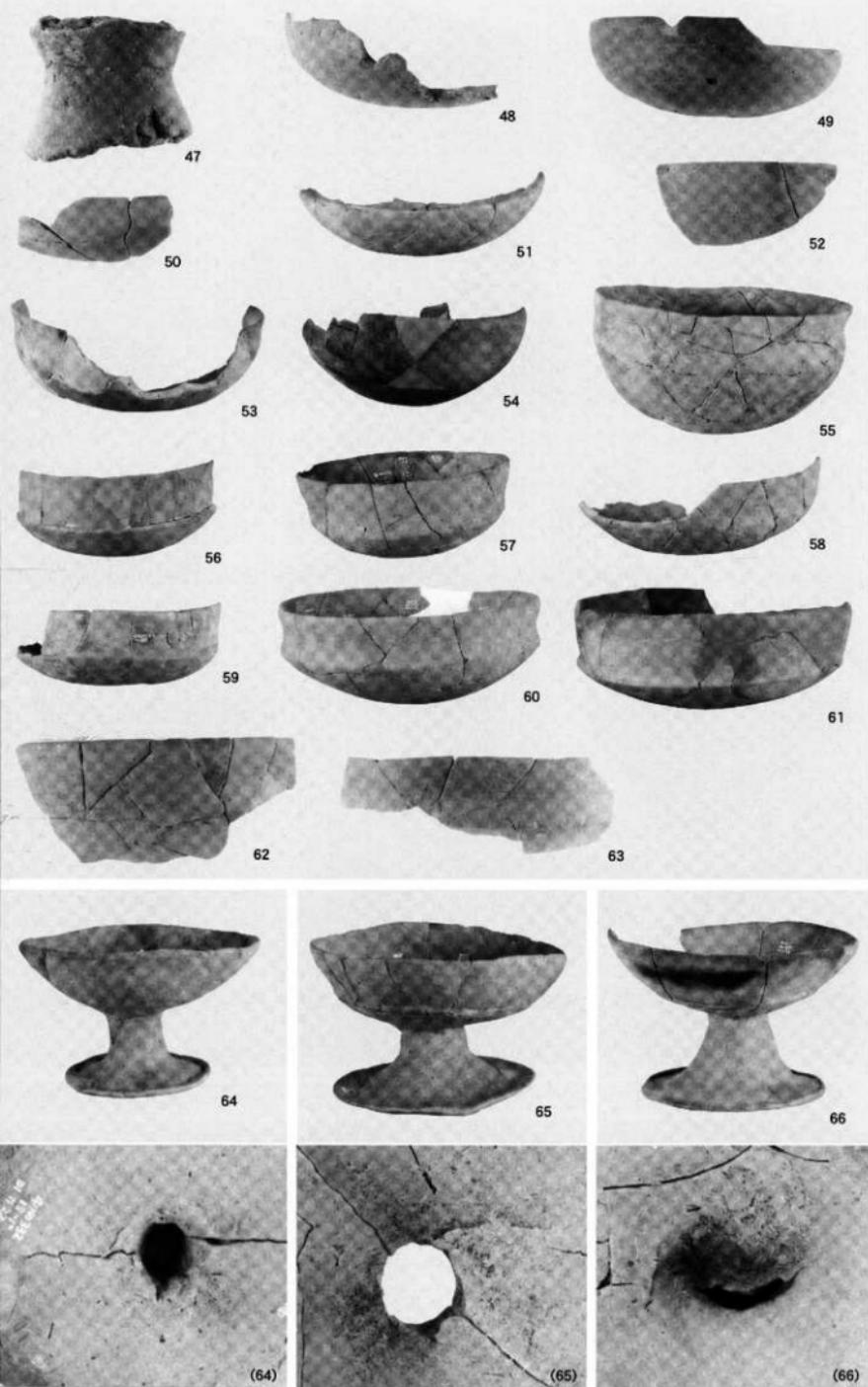
7：1号溝北側付近 調査風景



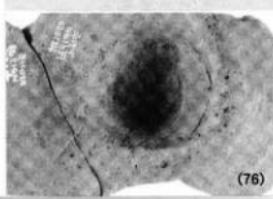
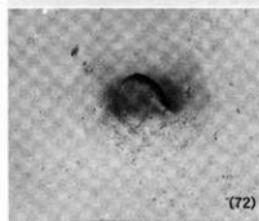
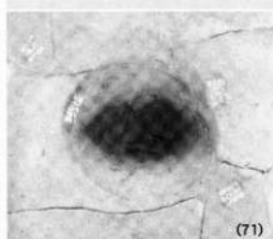
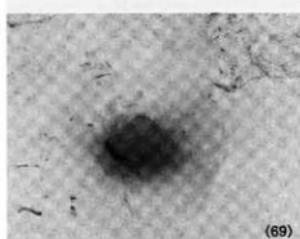
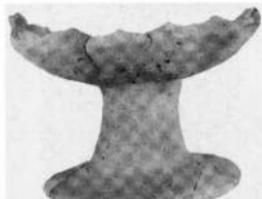
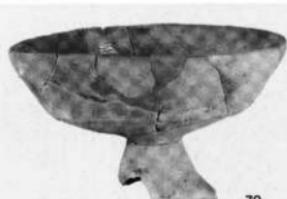
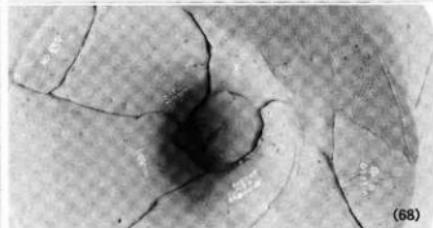
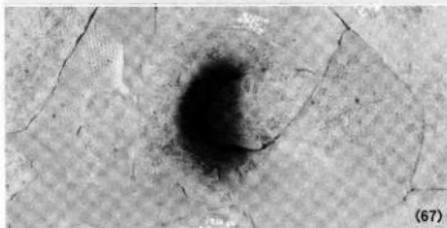


1号溝
(23~46)

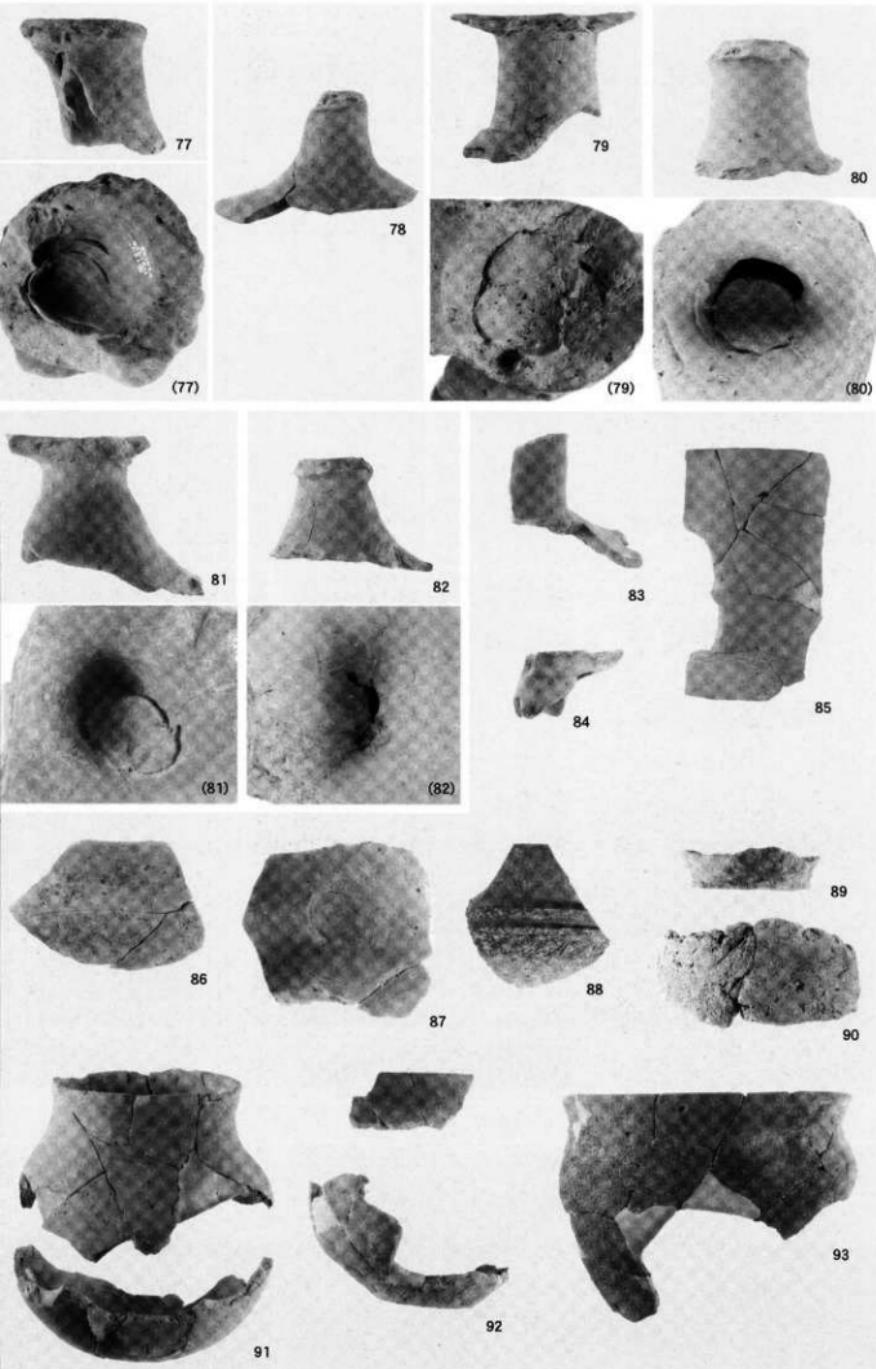




1号溝
(67~76)



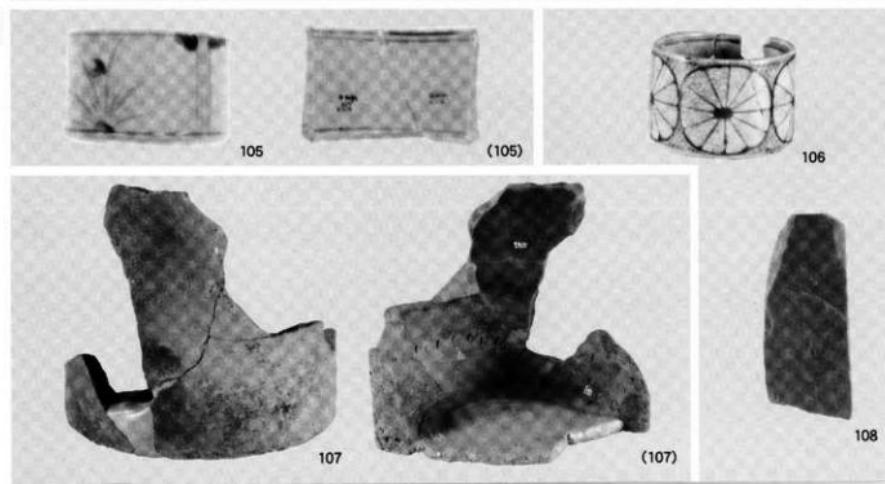
75

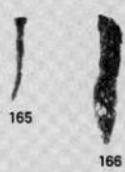
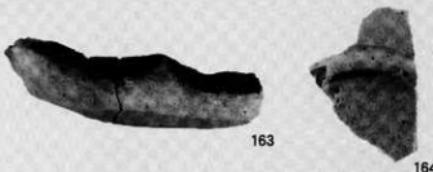
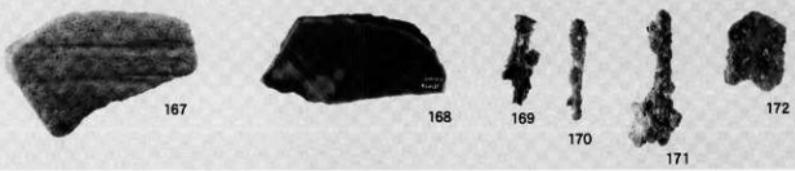


1号溝
(94~104)

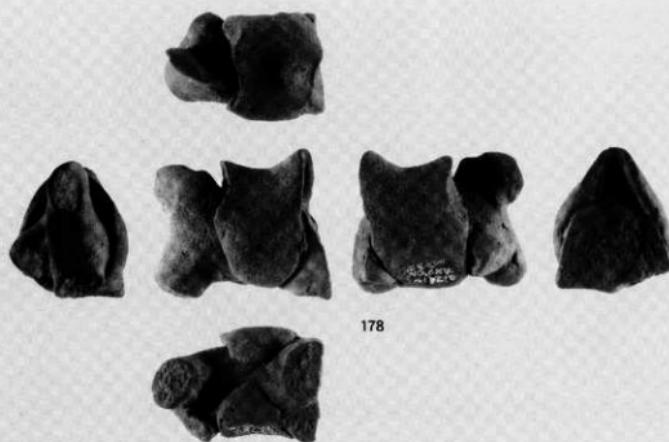


2号溝
(105~108)

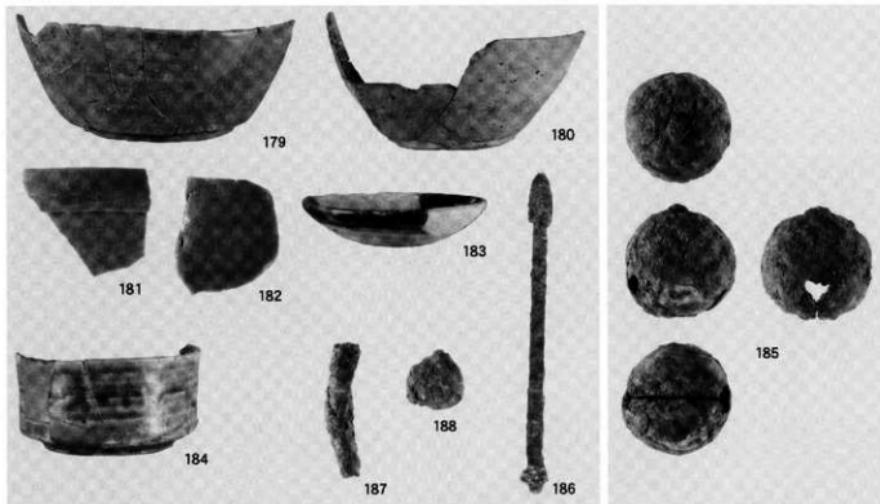


2号溝
(109~162)1号石列
(163・164)3号石列
(165・166)2号河道
(167~172)3号河道
(173~176)4号河道
(177)

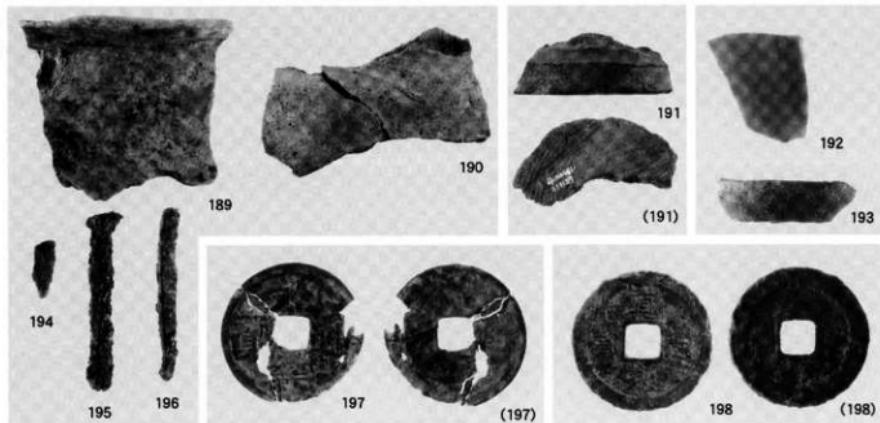
4号河道
(178)



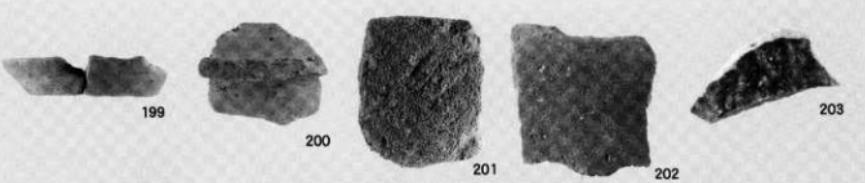
埋没谷
(179~188)



遺構外
(189~198)



試掘坑
2号トレンチ
(199~203)



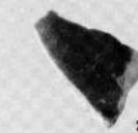
3号トレンチ
(204)



(205)

4-1号トレンチ
(205)

4-2号トレンチ
(206)

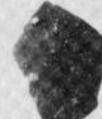


5号トレンチ
(207~209)

7号トレンチ
(210・211)

9号トレンチ
(212・213)

12号トレンチ
(214~220)



220

報告書抄録

フリガナ	ヒライシイセキ	
書名	平石遺跡	
副題	都市計画道路「愛宕町下条線」道路改良に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	
シリーズ名		
著者名	樋原功一	
発行者名	山梨県狭中地域振興局・(株)山梨文化財研究所	
編集者名	(株)山梨文化財研究所	
住所・電話番号	〒406-0032 山梨県東八代郡石和町四日市場1566 (株)山梨文化財研究所 TEL 055-263-6441	
印刷所	株エンドレス 〒405-0014 山梨県山梨市上石森123 TEL 0553-22-4574	
発行日	平成14年(2002) 9月30日	
平石遺跡	所在地	山梨県甲府市荒川2丁目238番地ほか
	1/25,000分 地図名・位置・標高	甲府北部 北緯35°40'20" 東経138°32'29" 標高288m
遺跡概要	主な時代	弥生時代・古墳時代・平安末～中世
	主な遺構	堅穴建物跡1、土坑18、溝2、Ⅲ河道、石列3
	主な遺物	土師器・須恵器・土師質土器・土製品
	特殊遺構	石積みと礎石を伴う溝
	特殊遺物	銅鏡・鉄鏡・土馬・青磁・白磁
	調査期間	平成13年(2001)11月12日～平成14年(2002)1月31日

なお緯度・経度は旧日本測地系データである。

平石遺跡

—都市計画道路「愛宕町下条線」道路改良に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成14年(2002) 9月30日発行

発行 山梨県狭中地域振興局・(株)山梨文化財研究所

印刷 株エンドレス

